

東海
道中

396

67
429

67-429



1200501281629

膝栗毛

下



始





膝

栗毛

下



67-429

東海道中 膝栗毛五編 卷之下

東都十返舎一九編



神風や伊勢と都のわかれ道なる追分の建場より左の方の町を離れて野道を辿り行く程に向うより來る農行の馬に横乗したる男、癩張聲にて「うた」見てもぬくとさうなヨ、お方と寝たりやナア、手織布子の一枚ねつこに「んぬけた、ア、エ、エ、エ、」又向うより横乗の馬士「エコウ見さつし、アノ向うから乗つて來る馬士をおあして見せようか、合羽の袖を前の方へ折りて刀の櫃に持ち「ナントどうだ、」俄にうろたへ「北八どうだ、奇妙か、」おりに行過る「二本さし、」馬に消りに自行とどて止めたナア、なんぜいきやらぬ、裸でお方に逢はりよかエ、ナア、エ、エ、此特案は此邊の郷土と見えて「ソレむこ（向）の堤から、つツとそ

道中膝栗毛五編

らへあがらせると、もう半道もあらずにな 馬「ハイ有難うござりやす 堤からそらへあがれとア何のことだ、 蝮が天上しやアしめえし、ハ、、、、時にこの川は何といふ川だ はしばん「ハイ橋錢が 貳文ツツ出ます、此川は宇都部川といひます 馬「ソレ貳文ツ、四文よ

抜参りならばぶさをもうつべ川わたしの錢もかりばしにして

それより高岡川をうち渡り、早くも神戸の宿に至る。入口に寶珠山火除地藏堂あり。

安穩に火よけ地藏の守るらん夏のあつさも冬の神戸も

かくてこの宿はづれなる茶店に寄りて休み居たるに 馬「モシ、お前方アおま(馬)に乗つて下んせんか 馬「いかさま戻りなら乗るべい 馬「上野まで戻るおまぢやわい、荷をつけて貳百五十下んせ 北「二方荒神で百五十遣るべい 馬「今日は杵をもて來んわいの、爰から上野まで三里の所ぢや、白子へ 壹里半代りやつて乗つていかんせ 馬「二人乗られにやアいやだ 馬「そしたらお二人ともおま(馬)の鞍へ括し付けて行こまいか、此繩で締めりや氣遣ひはないがな 北「とんだことを云ふ、それぢやア煙草も吞まれぬ 馬「そんなら代りく乗らう、百五十でやるか 馬「まよかし、遣らかしませよト、馬相談出來て二人の荷をつけ此所よ 馬「おらアそろく先へ行くぞ、ソレ北八右の方へかしぐやうだ 馬「ヒインヒイン 鈴のお 「しやんくく、 此内向うより來たる男紺袴の洗濯したる引返しを着て鑓置ばかり刺子 の風呂敷に包み肩に引かけ草履がけにて來り、この馬士を見つけ 「ヒヤア、のしや

ア上野の長太ぢやないか、今のしが處へ行た戻りぢや、えいとこでいき逢うた 馬「かた長太「ハア、權平次様かいな、コリヤさてわしや面目がないがな 北「あろまいく、ある筈がないわい、晦日くにいこす(戻)筈を、まんだ鑓錢壹文もいこさんがな、どうしさるのぢや、ソレきこ(聞)わい 馬「マアく、こちへ來て下んせ 此馬士借金の断りと見えて、かの男を日あたりのよ「そないにごふにや(業煮)らかいてくだんすな、マアこゝへ掛けさんせ、イヤそこのねきには犬の糞がある、今日おいでると知り居つたら、掃除しておこもの、コリヤく權平様へ茶なと上げんか、酒買うて來いと云ふ所ぢやが、こゝは大道中でそれもでけぬくい 北「コリヤ、どうする、早くやらぬか 馬「ハテせはしない、ちと待たんせ、いんま大事のお客がある、さてマア聞いて下んせ、去年の冬から家の噂めが病氣を煩ひをつて、餓鬼共にはせちがはれる、雜役にさへ出やせんものを、何ぢやると斯うして下んせ、四五日の内には、ひゆつと此方からもていこ(持参)がな 北「イヤ、承知ならんわい、そない(其様)に云うてもよういこ(戻)しやしよまいがな、でんないく(大事無い)、もう三年越しといふもの貸した錢ぢや、利に利がくつて二十貫餘りといふもんぢやもの、いこすなく、その代り、あのおま(馬)をとて(取)いのかい、ハテまさかの時は、のしがおまを渡そと證文に書いたぢやないか、そしたら言ひ分ありやしよまいがな、サアくもし、おま(馬)の上な旦那様、いんま(今)聞かんす通りぢや、借錢のか



昔のちの

うけ

の栞

の玉の



ぬき

のせ

尾陽
花林堂

且

復

な

う

あ

い

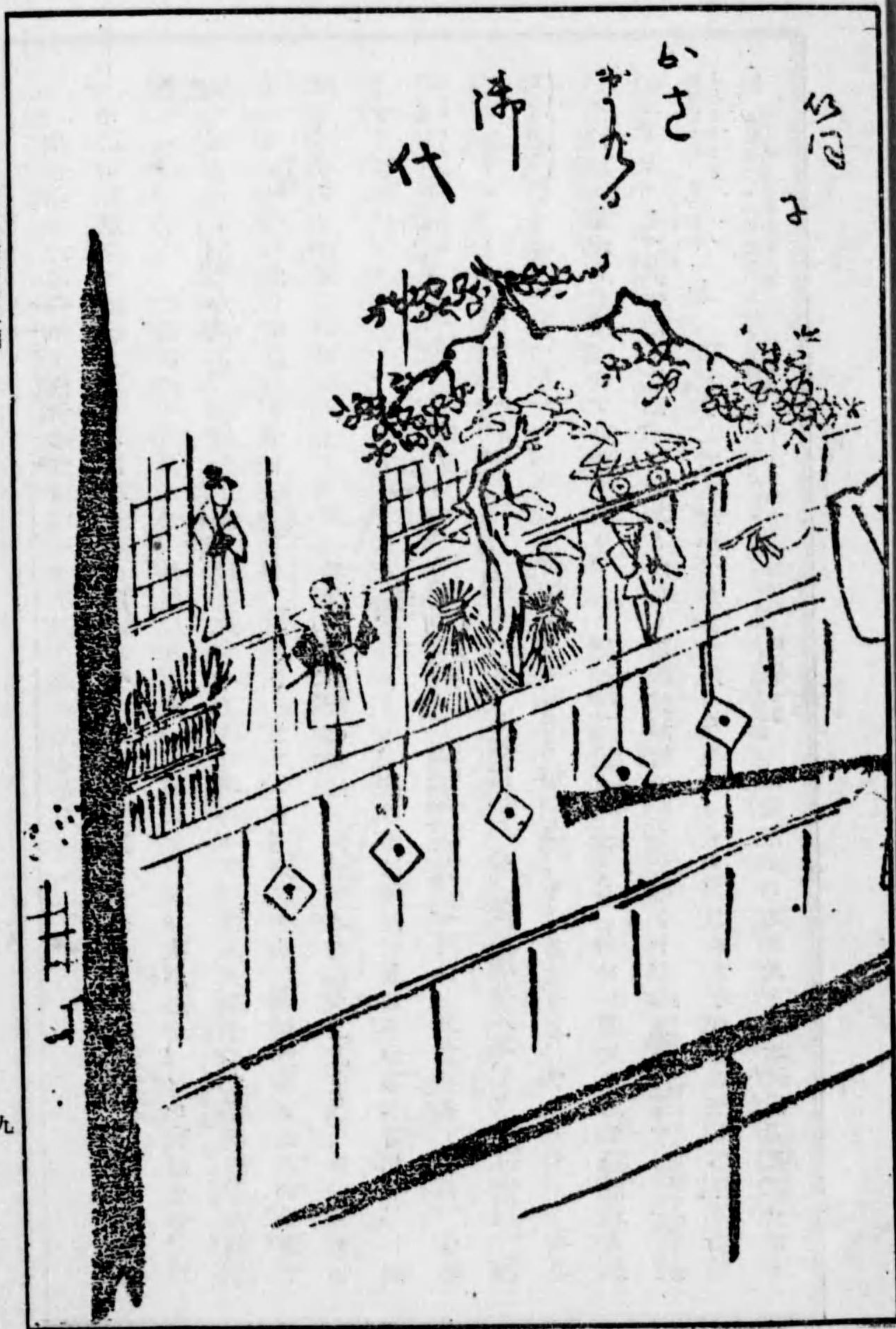
今
右馬耳風

はりに、請取るおまぢや、どうぞこゝからおりさんせ、氣の毒ながら 北「ハア、おいらもさつきにか
 ら、じれつたくてならなんだ、ひよんな馬に乗合せたは、こつちの不仕合、然しまだ錢は遣らず、是
 まで乗つたを徳として、ドレ下りて行きやせう、ト、彼の權平に口を取らせて馬からおりると馬士駈け寄り「モシ旦那、お前がおりて
 は、このおまを取られる、マア乗つてゐて下んせ 北「イヤ、ならんはい 馬士「ハテ、どないにも爲
 るわいの、旦那をおろしては氣の毒な、サア〜召して下んせ 北「また乗るのか、しつかり頼むぞ、
 北八又馬に乗れば權「コリヤ〜、長太どうしなさるのぢや、旦那おりて下んせ 北「エ、又おろすのか、
 平「やつきとなり 北八又馬に乗れば權「イヤ貴様達ア、俺をいゝてうさいぼうにする、下ろしたり足も腰も草臥れ果てた 北「それ
 ぢやて、わしがおまぢや、どうぞかし、おりてくだんせ 北「エ、面倒だ、ト 小じれが来てぐつと飛びおろる 馬士「はて
 扱おりさんせすとよいがな、コレ權平様斯うしてくだんせ、わしも途中ぢや、しよことがない、せ
 めて内へいぬまで待つてくだんせ、その代りこゝで此布子を渡すに 北「そしたらいんで、譯つける
 か 馬士「もうよいわい、サア旦那召さぬかい 北「ナニ又乗れか、もう勘忍してくれ、おらア之から歩
 いて行かう、何なら少々は錢を出しても乗ることアいやだ 馬士「さう云はんせすと乗つて下んせ、も
 うよいがなサア〜ト、馬の口をとりてすむる故、北八又「サア約束の布子脱ごまいか 馬士「イヤそないには云
 仕方なく馬に乗れば、こん平「サア約束の布子脱ごまいか 馬士「イヤそないには云
 うたものゝ、これも家へいぬまで待つて下んせ 北「イヤおのれ、もう了簡ならんわい、サア〜旦那

那、又おりてくだんせ 北「エ、この唐人めらア、又おりるとぬかしやアがるか、もういやだ、サア早
 くやらねえか、どうしやアがるのだ 馬士「旦那さうはかいの、下りすとよいに、こんイヤ、下りすと
 えいとは何でぬかす、ト 眞黒になり、馬に取り付きかゝる所を、馬士つき除けて馬の尻を思ふ様た、「ヤアイ〜、助けてく
 れ、コリヤどうする〜 北「馬をにがしてはならん、オ、イ〜、ト 退駈る、北八は後生大事に馬の鞍にとりつ
 りようとして鞍の繩に足がひつか、「ア、痛い〜、誰ぞきてくれ、アイタ、ト、一人もがきて苦しむ體に馬方「モシ、
 り眞逆様に落ちて腰の骨をうち 且那お怪我はないかな、ドリヤ〜、ト 手を取りて引起すうち權平は馬を捕へんとかけぬける。馬方「北「オ、イ待ちア
 がれ、俺をばひどい目に逢はしやアがつた、ト 小言をいひながら起きあがり、腹は立てども塗方なく、退駈けんには足腰
 が痛み、やう〜のことに踏みしめ〜と辿り行きつ、 借錢を負うたる馬に乗りあはせひんすりやどんと落されにけり
 行く程なく矢ばせ村といふに至る。彌次郎兵衛は神戸の宿はづれより、先へ來たるが、かの馬のい
 さくさをば露知らず、餘程先へなりたるを不思議に思ひ、こゝに待合せ居たりけるが、それと見るより
 彌「オヤ〜、北八そのなりはどうしたのだ 北「イオもう咄にもならぬとんだめに逢つた、ト 最前より
 修を咄せば、彌次郎をかしく、幸ひこの所は鎌倉の權五
 郎が古跡ありと聞きて、彌次郎兵衛とりあへず 權五郎ならねど馬士の一散におつかけて行くかけりの海
 それより玉垣を打過ぎ白子の町にいたり、福德天王を伏し拜みつゝ、子安觀音の別れ道にて

三州萩原

浅花菴皮人



風を孕む沖の白帆は觀音の加護にやすうみわたるらん

この宿を過ぎて磯山といへるに著く。此所に吹矢のいろく飾りつけたる小店の親仁、往來を見かけて「サア、お慰みにやてかんせ、外題は忠臣藏十一段續き、ソレ吹かんせ、ヤレ吹かんせ、お當てなさると忽ちかはる、新板の上細工はこれぢや」北ハ、ア、なんだ勘平おかる魂膽夢の枕、イヤこいつやらかして見よう、ト吹矢筒に矢を入れて「フ、、、引カチリ、ガツタリ」何だハアえらい松茸が出た、コリヤ可笑しい、ハ、、、與一兵衛子故の闇の夜は、何が出るだらう、フツ、フ、、、引カチリガサ、ヒヤアみこし入道、ハ、、、向うのは何だ、北八そつちへ寄りや、ト吹矢の筒でくらはしにかゝる、大はワンといつて噛みつく「アイタ、、、うぬのける拍子に足もとに寝て居たりし犬の足を踏む」犬「キヤアン」この畜生め、ト吹矢の筒を拂ひ出かける。向うに又煙管一本落ちて有る故北「ソレ彌次さん又拾はねえかぶち殺すぞ、トおつかくるはずみに、どつさり」と轉「ころんでも損はいかぬ、爰に煙草入が、トひろひかゝると、向側に居る子供が糸を引くと煙草入はする」エ、いま、しい、一番はぐらかしやアがつた、子ども「あはうよ、ワハ、、、北「こいつはい、業曝らしだ、サアいきやせう、ト吹矢の筒を拂ひ出かける。向うに又煙管一本落ちて有る故北「ソレ彌次さん又拾はねえか」イヤ、もう其手はくはぬ、アレあとからくる親父が拾ひをるだらうト、ゆき過ぎてふりかへり見れば、あとより來たる親仁かの煙管を拾ひて懐におしこみ、さつと「ハアだましでもなかつたさうな」北ハ、、、おめえごうぎにまんが悪いぜ、ト打笑ひつ、行く程に、やがて上野の宿に至る。こゝに此あたりの人と見え羽織「卒爾ながらあなた方アお江戸でござります

か「彌アイ左様さ」男「私は白子のさきから、あなた方のお後に跟いて參じたが、途中の御狂詠を承りまして、及ばすながら感心致しました、面白いことござります」彌「ナニサ、みな出放題でござりやす」男「イヤ、驚き入りました、先達てお江戸の尙左堂俊滿先生など當地へお出でござりました」彌「ハア、成程左様」男「貴方の御狂名は」彌「わつちやア十返舎一九と申しやす」男「ハ、ア御高名承り及びました、十返舎先生でござりますか、私南瓜の胡麻汁と申します、さて、よい所でお目にかゝりました、此度は御參宮でござりますか」彌「左様さ、彼の膝栗毛と申す著述の事に就いて態々出かけました」こま汁「いかさま、あれは御妙作でござります、是へお越しなさる道すがら、吉田、岡崎、名古屋邊、御連中方御出會でござりましたらう」彌「イヤ、東海道は宿々残らず立寄る所がござれども、參ると引止められまして饗應に逢ひまするが氣の毒でござるから、皆直通りに致しました、夫故御覽の通り態と僊服を着いたして、矢張同者の旅行同様に心安く何でも氣任せに、風雅を第一と出掛けました」こま汁「それはお楽しみでござります、私宅は雲津でござりますが、どうぞお供いたしたい」彌「思召難有い」こま汁「まことに御珍客、近所の社中共へもお引合せ申したい、何れ御一宿をお願ひ申ませう、マア、不思議な御縁で、よいところでお目に蒐つた、時にこゝが小川と申す所、饅頭の名物、一服あがりませんか」彌「イヤ饅頭には懲り果てた、直に參りませう、ト打つれて此所をゆき過ぐるとして

三羽吉田

正徳の 栢本茶丸



ら、マア是でも上げましよと存じて申し付けおきました 彌「もうお構ひなされな、イヤ御主人、この者はいまだお近づきにならぬげな ございいかさま貴方は 北「私は十返舎の秘藏弟子一片舎南鏡と申します、不思議な御縁で御厄介に預ります ございナニサ、とつとねからお構ひは申さんぢやて、イヤ先生ちとお寛ぎなされまいか 女「御膳がよござります ござい「早うあげんかい、御ゆるりとめしあがりませ、ト亭主は勝手へ立つて行く。女、膳を 彌「まんざらでもねえの 北「いゝ女だ、然しこゝぢやアおめえも先生株だ、おとなしくせざアなるめえ、ト此内又十一二ばかりの小じよく、膳をもち北八に据ゑる。兩人箸を取りてくひか、り見平には菟蕪を盛り、味噌は別に小皿にあり。彌次郎小聲にて 「ナント北八、この皿にある丸い物は何だらう 北「されば、なんであらうか、ト箸にてつゝき見るに、至つて堅く、挟めども動かず。 北「コレヤア石だ、 彌「ナニ石なものか、ノウ女中 女「それは石でござります 北「それ見なせえ 女「菟蕪をおかへなさりませ 彌「いかさま、もうすこし、ト平を出してつてゆくを待 彌「コウ、なんと馬鹿くしい、どうして石が喰はれるものか 北「イヤ、夫でも食はれる仕法があれやアこそ出したであらう、先刻當所の名物をあげませうと云つたア、何でも此石のことだ 彌「それだとして、ついぞ咄しにも聞かぬえ 北「イヤ待ちなよ、江戸で團子のことをいし〜といふから、大方コリヤ團子であらう 彌「ハ、アなる程そこもある、よもや本統の石ぢやアあるまい、ト又箸をもつてやはり石也。これは不思議と煙管の雁首にて叩き見ればかつちり〜 彌「どうでも石だ、コリヤどうして喰ふものだと聞くもごふ腹だが、

どうもねつから合點がいかぬ。此内ていしゆかつ「是は何もござりません、よろしうめしあがりませ、イヤ石がさめは致しませんか、コリヤ〜暖い石をかへてあげ申せ、トいはれて二人はいよくぎよつとせしが、いかふはらと、彌次兵衛これ「イヤもうおかまひなさるな、石も最早よろしうござる、扱扱珍らしい物を賞翫致しました。江戸表などで折ふし小砂利を唐辛子醬油で煎つけるか、又は煮豆などのやうに致してたべる事がござります、それに又石塔なども嫁をいぢる姑婆々などにはせたが薬だと申してたべまするが、私も随分好物でござります、今度府中に逗留致した時、馬蹄石をすつぽん煮にして振舞はれましたが、ツイ私四ツ五ツたべました所に、お聞きなさい、腹が重くなつて立たうとした所が、一向立たれず、仕方なしに兩方の手を棒しばりのやうに致して擔いで貰つて、やうやうと手水に行きやした、御當所の石ころは格別風味もようござりやすから、又食べ過ぎたらば御厄介になるだらうと存じてお氣の毒でござりやす、こま汁「ナニ、その石をあがりましたか、彌「たべましただんか、こま汁「イヤそれは滅相かいな、石をあがるといふはけしからんお齒のお達者なことでござります、然し火傷はなさりませんかいな、彌「それは何故な、こま汁「イヤ、あの石は焼け石でござります、すべて蕪蕪といふものは、水氣の取れぬものでござりますから、あの焼石にてお叩きなざると水氣がとれて格別風味がよござります、そのための焼石でござります、あがるのではござりませぬわいな、彌「ハハアなる程〜、聞え

ました、こま汁「マアさうしてあがつて御覽なされ、コレお鍋よ、石がぬくと（媛）なつたらもて（持）こんかい、早う〜、ト此内更に石の焼けたるをのせて、女もち出で引きかへてゆく。彌次郎北八ていしゆがことばの如くして、かの蕪別輕くしていはん方なけ「誠に珍らしいお料理、御仕法感心致しました、そして斯様に同じやうなる石が早速によく揃ひました、こま汁「イヤ夫はかねて貯へ置きます、おめにかかけませう、ト勝手に駈けり、吸物籠を「御覽くだされませ、こないに二十人前は所持致して居ります、トかの箱を見する、二人は可笑しく、其箱の横の方二十人前とかきつたり、此の内近所の狂歌よみ道々來たりて、こま汁「ヤこれは小鬘長元成様、サアサアどなたもこれ〜
「ハイ〜、是は十返舎先生、はじめてお目に蒐りました、私は富田茶賀丸と申します、次は反齒日屋呂、水鼻垂安、金玉の嘉雪、いづれもお見知り下さりませ、こま汁「時に先生、おやかましようござりませうが、おむづかしからうといふことを、お扇面短冊などお願ひ申したいが、何なりともお持ち合せのお歌をお認めくださりませ、ト扇短冊をつきつけられ、彌次郎しかつべらしくとり上げて何の出放題、やらかしてくれんと、いろ〜考へても我「これは難有う御座ります、お歌は時鳥自由自在に聞く里は、酒屋へ三里豆腐屋へ二里、ハア成程、どうか聞いた様なお歌だ、後朝のなさけを知らば今一つ嘘をもつけや明六ツの鐘、イヤこれは千秋庵大人のお歌では御座りませんか、彌「ナニ私がよみ歌、しかも江戸中大評判の歌、誰知らぬものはござらぬ、こま汁「イヤさよぢやあるが、先年私お江戸へ參じた時、三陀羅大人、芍薬亭大人など



にも、お目に蒐りまして、乃ちお短冊も戴いて歸りましたが、御覽なされ、その屏風に張つてござります、トいふ故、彌次郎ふりかへりて見れば成程屏風に三階羅「イヤ私の先生はそゝつかしいが癖で、人の歌だの、わが歌だのといふ差別は一向ござりませぬ、コウ彌次さん、イヤ先生是まで道中筋で詠みなさつた、おめえの歌を書きなさればいゝに、ト氣を付けられて彌次郎面目なけれど押し強い男なれば、いけしやア／＼として「ハ、ア戀川春町の畫がある、モシあの畫の上にある讀はなんでござります ござん」イヤあれは詩でござります北「こちらの布袋の繪の上にあるのは詩と見えますが、誰がいたしたのでござります ござん」イヤあれは語でござります、澤庵和尚の、トいふ故、北八心のうちに、こいついまいしい奴だ、さんかといへば、しだといふ。しかといへばごだといふ。何でも今度は一ツ餘計にいつてまごつかせてやらうと、そこから見廻し北「モシ、お掛物の畫の上に書いてあるは、大方六でござりませうな ござん」六か何かしりませぬが、あれは質にとつたのでござります、ト此内勝手より女「ハイひげつらさまからお手紙がさじました ござん「ドレドレ何ぢやあるな、ト此手紙を開きて、高々「手かみ」鳥渡申上候、只今東都十返舎一九先生私宅へ御着有之候、勿論名古屋屋連中、并吉田大嶽よりも書狀参り申候、早速貴公御噂もいたし置候事故、追付貴宅へ同道参上可致候間、右御案内申入置候已上 ござん」コリヤどうぢやいな、頓と合點のいかぬ、ノウ先生、只今朋友どもから斯様に申越しましたが、定めてこやつ尊公のお名前を騙つて参つた者と見える、幸ひ追ッ付けこれへ参るとあれば、ナントお逢ひなされて慰さんでやるぢやござりませぬか

彌「さて〜大變なことだ、いやはや横着な奴もあればあるものだ、然し私は逢ひますまい ござん」な
 んぜ〜 彌「イヤどうか先刻から持病の疝氣が起りました、左様でなくば其質物、致方がござるもの
 を、さて〜困つたものだ、ト 思ひがけなく此の仕儀に及び、流石の彌次郎しよげかへりてゐる、亭主ごま汁をはじめ皆々先刻より彌
 次郎が振舞合點ゆかすと思ひし所、さてはと心づき、こいつ化けの皮、あはらしてくれんと、互に袖を
 ひきあ、ちやが丸、なんと先生、コリヤ面白いことができました、御不快ではござりませうが、是非その質
 物にはお逢ひなさるがようござりませう 彌「ハテさて、困つたことをおつしやる たら安」イヤ時に先生
 のお宅は江戸表では何處もとでござりますな 彌「されば何處でござつた、オ、それ〜、鳥羽か伏
 見か、淀竹田 かゆき」山崎の渡を越えて與市兵衛とお尋ねあれか、おきやアがれハハ、ごま汁「イヤ、
 たしか貴方がたのお笠に江戸神田八町堀、彌次郎兵衛と書き付けてありをつたが、その彌次郎兵衛様
 といふのは誰さんの事ぢやいな 彌「ハア、聞いたやうな名だが、だれでかあつた、オ、聞いた筈だ、
 わしが實名を彌次郎兵衛といひやす ござん」ハ、ア常にや參らぬ、ちよつと〜參らぬ、彌次郎兵衛で
 ござるといふは貴方のことであつたか 彌「左様〜、ちやが丸、時に彌次郎兵衛先生、その質物の一九を
 今連れて來まいかい 彌「イヤわしはもう出立致さう ござん」なんぜ今頃何時ぢやと思つて、もう四ツぢ
 やがな 彌「さればの事、わしが疝氣は變つた事で、此様に畏つてばかりをると、だんだん悪くなる、
 いつも夜分外を歩いて冷えさへすりや直によくなくなるから ござん」ハ、ア、それで今立たうと云ふのか、

さうさんせ〜、たとへこなさんがおようと云つても、こゝにやもう置きやせんのだや、早う出て行
 かんせ、ようも人の名を騙つてだまさんしたの 彌「ナニ騙つたとは ござん」ハテ騙つたわいな、ほんま
 の十返舎先生は名古屋の川並連中から狀がついて來てありや違ひはないがな たら安「初めからこなさん
 の不都合たら〜、こないなことであると思つた、こちらから、ほからかし出されぬ内に、ちやつ〜
 と出ていかんせ 彌「なんだほかし出す、コリヤ面白い 北「コレサ、彌次さん力んでもはじまらねえ、
 ぜんてえおめえの思付きが悪い、サア爰を出て何處ぞ木賃にでも泊りやせう、コレヤアどなたも眞平
 御免なさりやし、ト 北八がだんくの詭言に、亭主は腹はたてども、可笑しきも半分、皆々この二人がはふくのていにてそこ〜に仕度
 し出で行く容姿を見送り、家内の者共手をうちたゝき、どつ〜と笑ふ。彌次郎は始終膨れ面して力みかへり出で行く
 をかしき。北
 八あとに従ひ

いとほまじ通り一べん旅の恥かきすて、ゆく扇短冊
 斯く詠みて、あとは笑ひを催し、出かけたれど、最早亥の刻過ぎたりと見え、家並に戸を閉ぢてひ
 そまりかへり、いづれを旅籠屋とも見えわかつた。とまるべき方もなくして、うか〜と辿り行く程
 に、あはや軒下の犬どもが、起き立ちて吠えかゝれば彌次郎兵衛きよろ〜して「エ、この畜生奴ら
 ア、悪くふざきやアがる、ト 石ころを拾ひて打ちつくれば、なほ 北「構ひなさんな、犬までが馬鹿にしやアがる、
 石ころを拾ひて打ちつくれば、なほ 北「構ひなさんな、犬までが馬鹿にしやアがる、
 オヤ彌次さん、おつな手つきをしておめえ何をする 彌「イヤ犬に取捲かれたときは、宙へ虎といふ文

字を書いて見せると、犬が逃げると云ふことだから、さつきから書いてゐるが、ねつから逃げやアがらぬ、こいつらアみんな無筆の犬ださうな、シツシ／＼トどうやらかうやら追ひ散らかして、ゆく彌「コリヤつまらねえものだ、まゝよ北八夜通し歩かうぢやアねえか、きつい事アねえ、やらかせ／＼」北「おめえとんだ事をいふ、まだ九つにやアなるめえ、又どこぞへ泊りてえものだ」彌「それだとして今頃に起きてゐる家はなし、イヤ有るぞ／＼、遙か向うに火が見える、アノ火を目當にいつて宿を頼まう」北「オ、サ、それがい／＼、併し提灯の火ぢやアねえか」彌「とんだことをいふ、戸の隙間より洩れる火だものを」北「ほんに家の内で焚く火だ、なんでも是非あそこを頼んで泊りませう、ト足に任かせて急ぎ行く、やがてそこに近づきたるに、かの目當の火はおのれとだん／＼先」彌「ヤア／＼／＼あの家がどうか歩いて行くやうだ」北「ほんになア、こいつは可笑しい」彌「イヤをかしくない、氣味が悪い、どこの國にか家が歩くといふは只事ぢやアねえ」北「ナニサ、これも赤坂の泊り位でみんな狐めがすることだらう、弱みを見せると猶つきあがりをする、構ふことアねえ、さつ／＼とあよびなせえ、ト態と力み返つて、足早にくだんの火に追ひつき、暗まされに逃しめれば、壁の車なかしくこゝをすぎ行くに、折ふし月は出でたれども、草木もねぶる真夜中のうそ淋しき。後にも先にも只二人、うはべは我慢につよばつても、心は至ての腫病者、こは／＼迎りゆくあとより一人来るもの有り。彌次郎ふりかへり見れば、小山の如き大男、長脇差を腰に横へ来るは唯者ならず、われわれをめぐりつけ来るなら」彌「コウ、あとからをかしな奴がついて来る、ちと急いでやらかさう、ト足早に走ればんと北八に睨きて」北「待ちなよ、呑口が外れさうだ、ト小便をすれば、その男も立ち止り待つてゐる故、彌次郎聲をかけ」彌「モシおめえ今頃何處へお出でなさ

る、トこは／＼云へば彼の男存じの外憂しき物いひにて」北「ハイ／＼わたしは松坂へ戻りをるものぢやがな、夜さら一人、恐うて／＼、モどうしよいなと思ひをつた所へ、おまい方が通らんす故、コリヤよい連れぢやと、後からお二人を心だよりに参じたわいな」北「イヤおめえ風姿には似合はぬ弱い音を出しなさる、そしてそんな長いやつをさしてゐながらかの男ハ、ア是かいな、コリヤあとで拾うて来た竹切れぢやわいな、ト腰から抜ついで行」彌「ハ、ハ、脇差ではねえの、わつちらア又おめえが恐くて／＼先刻にからコリヤひよんな奴に見込まれたと思つたが、マアおめえ臆病者でわつちらも落ち着いた」北「もう／＼これから三人といふものだから大丈夫だ」男「イヤ／＼この先に、とつとえらいことがあるがな」彌「なにがえらい」男「聞かんせ、わしや今日江戸橋まで往て、歸りにきつう遅なつてな、今のさつきこの松原に來をつたとこが、なんぢややら向うに大きな白い物が立つてゐをつて、それがあつちやへ行たり、こつちやへ來たり、ぶうらり／＼、もう／＼、わしや恐うてコリヤ死ぬかと思つたわいな、そぢやもの、どうして向うへ行かれる者で、コリヤならんわいと、後戻りして、どうぞよい連れがほしいと思ひをつた所へおまいがたに行逢うたのぢやわいな」彌「エ、その白い大きな物がわたといふは、どこらに」男「イヤ直きにこのさきぢやわいな」北「エ、何が出るものだ、おいらが先へ行かう、おれについて來な、ト打つれてを一下ばかりも行き」彌「アレ／＼向うに、ア、コリヤたまらぬ／＼、トがた／＼ふるへる。二人も怪しく遙か向うを月あかりにたる時の男

も高く街道一ぱいにひろがりたつてゐる様子。是はなんだらうと、さきへも進まず、たちどまり見れば、又消ゆ。彌「マアなんだらう 北裾すその様にはつたり無くなるかと見れば又すつくりと立ち、大きくなつたり、小くなつたり、その形わからず

がねえから亡魂ぼうこんにちげえはねえ 男「ア、アレ、あれぢやもの、どうして先へ行かれましょいな 彌「しやう體たいが分らにやア、猶氣味なまけが悪い、コリヤ行かれぬ、あとへ戻らう 男「わしもおまへ方をたよりに又參まゐじたが、どうも恐こはうて行かれんわい、あとへ戻つて又連つれの人が出来をつたら、又爰こゝ迄來こゝうわいな、二三度もそないに行たり戻つたりしをつたら、丁度夜よが明けうわいな 彌「なんでも白装束しろしやうぞくだから、何ぞの亡魂ぼうこんに違ちがはねえ 北「アレ、青い火が見える 男「エ、どうか、こつちへ來こる様ぢや 彌「コリヤどうしよう、とても先へはいかれぬ、ト三人ながら色寄ぎめて、がたくふるふ 折しやから向むかうより人の來ると見え 彌「戀こひの重荷おもひをナ、積たんだらおまにえ、いく駄だあるやら知れぬ、ナアンエ、ト唄ひながら來るは助 彌「モシ、おめえ方アどつから來なかつた 人そく「ハアわしらア此こゝの近在きんざいぢやが、役にあたりをつて津まで行きをるのぢやわいな 彌「ソレヤアいゝが、此處こゝへはどうして來なかつた 人そく「ハテこな人は其役そのやくで津へ行くのぢやと云ふのに 彌「たゞしお前方まへも幽靈いらいぢやアねえか、どうも人間なら此處迄こゝ迄生なまきて來よう筈はずが無い 人そく「何言いはんすやら、根ねから葉はから分わからんわい 北「イヤ向むかうに化物ばけものが居ゐるのに、どうしておめえ方がたアその前まへを通とほつて來なかつたといふ事ことさ 人足「コリヤこなさんたちは三渡みわたの藤九郎とうくわ狐きつねが、いこいたのぢやな、ハ、ハ、北「ナニサ向むかうを見なせえ 人足「むこに何なにが居ゐるぞい 北「アノ白い物が、アレ、人そく「白

い物ものとは、あれか、ありや道みちなかで、おまのくつや草鞋わらうぢが燃もえてをるが、其煙けが月にうつつて、白くなつて見えるのぢやわいな 彌「ハ、ア、さうか、ハ、ハ、ハ、コリヤ有難ありがたうござりやす、ト人足に別かれつと溜息ためいきをつき、打笑うちわらひつ、やがてその所に辿たどり着き見るに、成程なるほど草鞋わらうぢなどを積み重ねて火をつけ燃したるにて、其煙白く立ち昇り見えたるなり 此こゝの所ところを過ぎて松坂まつざかに至いたり、まだ夜深よふかければ道連みちづれのかの男おとこを頼たのみ、寝ねるばかりのことなれば、あたりまへの旅籠はたごを出だすも費かなりと、町の入口いりぐちに木賃きぢん宿しゆくを世話世話して貰もらひ、そこに泊とどりて一夜ひとよをこそはあかしける。斯かくて月落つきおち鶏とりなきで、時の鐘かね明あけ六むツを告つげわたるに、彌次郎やじらう北八きたはち早くも起き出だで、此こゝ所ところを立出たつるとて、

鳶とびも輪わになりて舞まふ日ひぞたび人のをどり出だでたる松坂まつざかのやど

右みぎのかた、小山こやまの薬師やくしを打うすぎ、櫛田くしだといふに至いたる。こゝにおかん、おもんといへる二軒にけんの茶屋ちややあり。餅もちの名物なぶつなり。

旅人たびとはいづれに心うつるやとおもんおかんが賣うれる焼やきもち

それより祓川はらひを打うわたり、齋宮さいみやうをすぎ、明星みやうじやうが茶屋ちややに休やすみたる時とき、ここに上方者かみかたと見えて派は出でな大おほ綱なの引ひまはしをきて、帳面ちやうめんと風呂敷ふろしき包かみを背負せおひたる男おとこ、馬うまのねをつけてゐたりけるが 馬うま士しモシ、お前方まへア其荷そのにを付つけて、お一人ひとり此こゝ旦だんな那なと二ふたはう荒神あらしじんに乗のらんせんかいな 上うがたもの「おまい方も大おほかた參まゐ宮みやぢやある、わしも古市ふるいちまで掛取かけとりに行いくさかい、一所いしょに乗りなされ、はなしもて行いこわいな

「いかさま、ゆうべの夜道で大疲れた、北八、おらア乗つて行くぞ、北」そんなら此荷をつけて貰はう、ト此所にて馬の相談が出来、上方者と彌次郎と二は荒神にて出かける 馬「ヒイン」上がたもの「おまい方ア江戸衆ぢやあるな、彌」左様さ上がた「江戸はえいとこぢやが、わしや去年行て、えらい目に逢うたがな、アノ江戸に似合はん何處へ行ても手水場が、とつともう、えらい穢しうて、わしや百日ほどをる内、頓と手水に行たことがないがな、それから江戸を立つて鈴が森たらいふとこへ来て、ヤレ嬉しや、こゝでこそ小用してこまそと、海の中へ溜め、た小用を一氣に三斗八升ばかりしをつたが、えらうよかつた、あしこは奇麗でえらい大きな小用擔であつたわいな、ハ、ハ、ハ、彌京では小便と茶と、交換にすると云ふことだから、小便も大切なもんだに、おめえ海の中へ惜しいことをした、その三斗八升で取りけえたら、茶が馬に五駄や六駄は来るだらうに、それだから京では尻をひるにも、出さうになると、ちやつと裏の畑へ駈けて行つて、生えてある大根や菜の上へ尻をひりかけるといふことだが、成程是も肥料になるだらう、上がた「さうぢやわいな、其尻をひりかけた菜を、よう刻んで土にまぜて壁を塗りをるがな、京ではその土をへなつちといふわいな、彌」總體京と言ふとこはあたじけねえ所よ、めえど（前度）わつちが行つた時分は三月で、花見の最中、てん／＼に幕を打つて、結構な高蔭繪の重詰なんどを取り散らした所はいゝが、その重のうち何があるとと思へば、かくやの香の物に雪花菜の煎つた奴は、恐れる／＼

上がた「イヤそれよりかお江戸の衆が吉原の櫻はえらいと、いかう自慢せらるゝさかいで、わしや態々吉原へいて見たが、何の櫻は有りやせんがな、彌」そりやおめえ何時頃行きなすつた、上がた「わしが行たはたしか十月時分、彌」なんの十月櫻が有つてたまるものか、上がた「ハアさうかいな、それでも京の小室や嵐山には年中櫻がちんと有るがな、彌」それやア木ばかりだらう、花は年中有りやアしめえ、上がた「左様ぢやわいな、イヤ又江戸衆は長唄をよう唄うてぢやが、京の宮菌や國太夫はまた格別なもんぢやわいな、彌」國太夫といふほどの様にうたひやす、上がた「國太はかうぢやいな、ト」眞面目に聲を張り上げて國太夫節 上がた「頓てわたしが年明けて、お前と夫婦になるならば、肩を裾へはまだな事、足を耳にかけてなりとも添ひませう、チン／＼／＼／＼、チンチリツン／＼、彌」イヨ／＼おもしろえ／＼、ナントわつちに／＼さきり教へてくんなさらねえか、上がた「そりや易い事ぢやわいな、わしについてやりなされ、ト」此内北八は細長き竹が餘りに高慢くさいことを云ふ故、つゝき落してやらんと馬の後から、上がた「チンチリツン／＼、チンチン、ほんに女子は執念の深いといふは、うそぢやない、死んでも呵責の夜叉羅利、杖ふりあげてうど打つ、ト」八手を延し、北の竹にて上方者のあ、上がた「ヤアコリヤ、どやつぢやい、人のあたまへ磔うちをるがな、彌」ハ、ハ、ハ、もう一遍今の文句を、上がた「ほんに女子は執念の深いと云ふは、うそぢやない、死んでも呵責の夜叉羅利、杖ふりあげて北八らしるより又、上がた「アイタ、ハ、ハ、どやつぢやい、ど減相な、えらう磔うちくさるがな、



トふりかへり見れども、北八はちやつと彌次郎が 彌「面白いが、どうも節がむづかしい、もう一遍やつてくんなせえ
 上「た」ソリヤなんぼでもやるはやるが、又つむりを打ちやしよまいか 彌「ナニサわつちが見ておよう
 上「た」そんならま一度やりましょかい、死んでも呵責の夜叉羅刹杖ふりあげて、てうど打つ、ト今度
 上「た」ハアさつきから、わしがつ
 ろたへて彌次郎がたまを 彌「アタ、、、、北八おれだが、コリヤどうする 上「た」ハアさつきから、わしがつ
 びしや〜〜 彌「アタ、、、、北八おれだが、コリヤどうする 上「た」ハアさつきから、わしがつ
 むりを打たんしたのも、こなさんぢやな、何として打たんした 北「わしは打つた覚えはない 上「た」ナ
 ニ無いとは云はしやせんわいな 北「ハテおいらア知らねえ、いけしつこい野郎奴だは 上「た」野郎とは
 何ぢやいな、こなさんはえらい 嘸「た、かんすな 北「なんだこの篋棒め、さつきから總體氣にくはね
 え野郎めだ、あんまりたはことつきやアがると、ひきずり下ろすぞ 上「た」面しろい、サア下ろして見
 やんせ 北「オ、眞逆に落してやらう、ト馬驚いてはね上る 上「た」ヤアコリヤたまらん、何するのぢ
 や 彌「おれもたまらん、コリヤ〜〜どうする〜 上「た」エ、畜生め、ドウ〜、ト此内しんちや屋、あけの原
 此所より馬をおりて三人とも茶屋に 休む。上「た」もの北八にむかひて 上「た」ヤアコリヤたまらん、何するのぢ
 せえ、おたげえに旅ぢやア色々なことがあるもんだ、了簡しなせえ、わつちが一杯買ひやせう、モシ
 女中、何ぞ肴があらばこけへ（此處へ）一ばい出してくんな、トこれより酒盛となり、上方者もひとつ 「コリヤ
 えらう酔うたわいな、コレ彌次さんとやら、わしや御前がえらうすきぢやが、此わろはいかんぞや、

とんといかんけれど、おまいの連れぢや、しよことがない、斯しよぢやないかいな、これから山田の
 妙見町にいっしよに泊つて、古市をおごろかいな、わしやあこではえらうきれるがな、千束屋の鼓の
 間、柏屋の松の間、わしが案内するさかい、いかんせんか、どうぢやいな、トやたらにほほうな事はかりいふ
 遊ぶつもりに胸 彌「奇妙〜、どうぞお供致してえの 上「た」是から世古の松坂屋で支度して妙見町の藤屋
 費用して 上「た」是から世古の松坂屋で支度して妙見町の藤屋
 としよぢやないかいな、サア〜もういこわいな 彌「ドリヤ出かけやせう、トこの酒代を拂ひ立出る。此町の
 に至り 出はなれにみや川といふ舟わたしたし

宮川や神に機縁を結ばんと掬へる水のかげの白木綿

是より中河原をうちすぎ、堤世古をうちこえて、山田の町にさしかゝりける。

道中膝栗毛五編

卷之下 終

膝栗毛五編後序

旅人のすなる日記といふものを、作者のして見るひざくり毛、筆の歩みの
拂りて、早くも伊勢路にさしかゝりぬ。いでや天地は古市の宿屋の如く、光
陰は道者に似たり、人間行路の難きことは、宮川の川にあらず。相の山の山
にあらず。たゞ襟もとの錢かけ松こそ、たふとき神のほくらには比すべけれ。
末社めぐりの十返舎、こゝに感ずるところありて、天の岩戸のあなをたづね、
ふたみの海の底を探りて、かひある言葉を選びつゞりつ。あつぱれ明星が茶
屋にはねたる三寶荒神。その尾にとりつくおかげ参。賓導堂に筆をとりて、



ひがごとすなる伊勢街道。島さんこんさん仲成しるす。

東海 道中 膝栗毛五編追加緒言

荒海の障子に手脚を屈め、乗合の寶船に天窓を搔く。忠綱が齒虚しく齒磨を費し、眉間尺が額徒らに剃刀を勞す。話長ければ、棕櫚箒鯨鯨立をして、災害穿物に及び、幕長ければ、蜜柑の皮羽翼を生じて、餘波留場を鬧す。古人いらぬ物を指して長物と呼ぶ、宜哉。唯長くして美なる者は、飛頭蠻、長くして奇なるものは、膝栗毛なるべし。今既に五編追加成りて長袖よく舞ふ古市の樂しび、長舌巧に囀る宮雀の滑稽を盡せり。實に二子が鼻の下の長より出でたる滑稽の骨にして、價良馬の骨より貴し。卿が文さんげ／＼の提灯と光を争ひ、卿が名法性寺入道とともに長く傳ふべし。

文化丙寅仲夏

喜三二書于芍藥亭

憚りながら口上でなし自序ともつかぬ

附言

氣のきゝたる化物は足を洗ひて引つこむ時分、膝栗毛の作者、圖に乗りて、又しても彌次郎兵衛北八が、洒落も無駄も洗濯頃、この五編目追加に至つて、足許の明るきうち、先づ今日はこれまでの筆を擱くに如くとなしと、漸う満尾し、こぢつけたれど、御見物の痺をきらせし所に付け込み、京へ上るの一段を、拾遺に書けよと書肆のもとめに、是非なくとは嘘の皮、やつぱり作者も慾の皮、ひつぱり凧の手を組み、一工夫せし後の二冊は京大阪の穴さがし、なぢくりかへして御覽に入れんと、しこたま趣向は取つて置ききの正月物、それは晴着、此一冊は不斷櫻の伊勢道中、をはりかと思へば拾遺の始まり、こゝはざつと致しませうと、後をはらんでそのためお断りさやうと、例のなまけものが云ふ。

東海 道中 膝栗毛五編 追加

川崎音頭に伊勢の山田とうたひしは、和名抄の陽田と云へるより出でたるにや。此町十二郷ありて、人家九千軒ばかり、商賈薈を並べ、各質素の莊嚴濃にして、神都の風俗おのづから備はり、柔和悉鎮の光景は、餘國に異なり、參宮の旅人絶え間なく、繁昌更に云ふばかりなし。彌次郎兵衛北八は、かの上方ものと打ちつれ、此入口に到ると、兩側家毎に御師の名を板に書きつけ、用立所と云へる看板竹葦の如く、こゝに袴羽織引つかけたる侍、何人ともなく馳せちがひて、往來旅人の御師にいたるを迎ふと見えて、一人の侍、彌次郎兵衛に近附き 御師の手代「モン貴方方は何れへお越でござりますな 彌「知れた事、太神宮様へ参りやす 手代「イヤ太夫はどれ 彌「太夫は竹本義太夫殿さ 手「ハア義太夫と申すは、どこもとぢやいな 彌「其義太と云ふはな大阪にては道頓堀 其京は四條、お江戸は葦屋町川岸に於いて、永とく御評判に預りましたる 手代「不具者はおまい方であつたかいな 北「嚙語ぬかすと引つばたくぞ 手「えらいあぢやな、ハ、、、上方ものちと休んで行こかいな 北「こゝらはきたねえ所だ、みな御師の雪隠と見えて、用立所と書いてある 彌「おきやアがれ、ハ、、、ト 三人共、ある茶くやすむ。此内向より、上方道者大勢 うち「ござれ夜店は、順慶町の通り筋から、ソレ瓢箪町を、ヤアとこさア、揃ひのなり、女交りに聲張り上げ

よいとさア、チ、チン、素見ぞめきは阿波坐の鳥、ソリヤサかわい、もヤアレ格子先、ヤアとこ
 さ、ヨウいとなア、ありやりやこりやりやコノなんでもせ、チ、ンチ、ンチン、トこの一団れ通り過ぎたる後から、太
 々講と見えて廿人ばかり、いづれも
御師より迎ひの駕に打ち乗り来る「サア、これぢや、まづどなた様も是で御休息なさりませ、ト駕は襷
 が、おしの手代さきに立ちて」
此太々講は、江戸と見えて、いづれも小袖ぐるみに、みじかいおたちを「イヤこれはどうだ、彌次殿、貴様も參
 屋の門に下す。此太々講は、江戸と見えて、いづれも小袖ぐるみに、みじかいおたちを」
きめた手合、めい、彌次郎を出で、座敷に通る。此内一人の男彌次郎を見つけて「ハア太郎兵衛様か、よくお出かけな
 宮か、ト聲をかけられて、彌次郎びつくりし、見れば町内の米屋太郎兵衛なり。江戸を立」
つとき此米屋の拂をせず立ちたる事なれば、何となく彌次郎しよげかへりて「ハア太郎兵衛様か、よくお出かけな
 さいました、併し爰であなたのお目にかゝつては、面目ない、太郎、ナニサ、わしも仲間の太々講
 で、その辭講親と云ふものだから、據なく出かけましたが、よい所で逢つた、旅へ出ては、兎角づう
 くに（同國）が懐しい、奥へ来て一杯遣らつし、彌有難うございます、太郎、連は誰れだ、ハ、アまん
 ざら知らぬ顔でも無い、ナント貴様たち幸のことだ、太々講拜まぬか、それも飛入と云やア、ちつと
 ばかり金が出るから、無駄ながら、わしらが供になると、一文も入らず、しこたま（大分）馳走にな
 つて拜まれると云ふものだから、どうだらう、彌それは願つてもない有難い事でございやす、しかし
 それが出来やせうかね、太郎「ハテわしが講親だもの、どうでもなる、マア何にしる奥へ來さつし
 彌「ハイ左様なら、モシ上方の、ちと茲に待つてくんなせえ、方の上、よいわいの、行てごんせ
 太郎「サア、二人とも來さつし、ト此太郎兵衛にいざなはれ、彌次郎も北八も、草鞋を取つて奥へ行く、上方ものは、ひ
 とり店先に酒など飲みて待つてゐるうち、奥は太々講の事なれば、御師よりの馳走にて、

さいつおさへつ大騒ぎの最中、又表に一群れの駕十四五挺計り、か「ホウよい、えつこらさつさ、トこれも同じく此
 これは上方の太々講と見えて御師の手代さきにたちて」
おしの手代「サア、御案内、茶屋の女「お早うござります、奥へお通りなさんせいな、ト
すぐ酒肴を持ち出し、太々講二組の大騒ぎ、座敷のしやれ、いろ、あれども、あまりくたくしければ、略す。やがて奥の酒もりも終りて、「サ
 サアお立ちと云ふと、二くみの太々講が一所になり、どさくさして、奥より出づると、江戸組の御師の手代、いちばなだちて奥より出で」
ア、お駕の衆、これへ、どなたもサアお召しなされませ、ト
又上方組の御師の手代も同じく駆け廻りて「こ
 ちらのお駕は、これへ、ト横づけにして、皆々を乗せる。米屋の太郎
 兵衛生酔となり、彌次郎が手を取り」
太郎「コウ彌次公、貴様おれが駕に乗つ
 て行かぬえか、彌「イヤとんだことをおつしやる、太郎「ハテわしはこれから、歩くは慰みだ、貴様洒落
 に乗つて行かつし、彌「さやうならへ、こりや奇妙々々、ト
駕に乗れば、サアお立ちぢやと、両方の駕が一時にかき
 あげ、混雑して彌次郎が乗りたる駕の人足、とんだ間拔
 けと見えて、上方ぐみの駕の中へ紛れ込みたるに氣も附かず、さつさとかいて行く。かゝるどさくさまぎれに、人もそれと心附かねば、だん／＼と急
 ぎ行くほどに、山田のまん中すぢかひと云へる所にて、江戸がたの、内宮の御師なるゆゑ、左の方へ別れ行く。上方組は外宮の御師にて、此
 所より右の方へ別れ田丸街道の岡本太夫の方につく。門前の幕目、盛砂に水打ちきよめ、玄關に落打ちまはして、馳走の役々羽織袴に出迎へば、講中
 皆々駕をおりて、玄關より打ち通る。この時彌次郎もかごかきの、ちにて上方ぐみの中へまぎれ込みこゝに來たれど、十四五挺もある駕、どれがど
 れやら分らず。彌次郎駕を出て同じく座敷に打ち通り、ト「ハテ合點のいかぬ、モシ、米屋の太郎兵衛様は、どれ
 からお出でなさいませ、そばにゐた男「なんぢやいな、太郎兵衛さんとは、こちや知らんわいな、そしてお前
 は根から見ん顔ぢやが誰さんぢやいな、彌「ハイわつちは、ソレ太郎兵衛さんの町内のものぢやが、ハ
 テどうか違つたやうな、北八はどうした知らん、ト互に袖を引きあうて、荷物など片寄せ囁きあふ内、此講中の内二三人立ち
 向ひて「コレ、こなさん、見なれぬ人ぢやが、誰れぢやいな、彌「ハイ、講中「ハテこなわろは、何



石川
堀の
小川
あ
秋
神都
子



寺
お
お
お
足久保
茶丸

をきよろ／＼さんすぞいな、誰ちやと云ふのに、彌「イヤわつちは、米屋の太郎兵衛さんにお眼にかゝれば分かりやす、講中「ハテそないな人は、こちらの講の内には無いもせぬもの、なんぢややら氣味たの悪い人ぢやわいな、御師の手代「ハアこな人は、あなたの方のお連ではござりませんかいな、講中「さよぢやわいな、手代「イヤそれはどしたもんぢや、とつとゝ出て行かんせ、えらいへげたれぢやな、講中「道中じら（盗）であるぞいな、ほり出してやらんせ、あたけたいな、彌「エ、そんなに云ひなさることアねえ、ほり出すとはなんのこつた、とはうもねえ、講中「ハ、アお前のもの云ひは、お江戸ぢやな、それでよめたわいの、今のさき、お江戸の太々講と一所で落合うたが、其時おまいの乗らんした駕が、こちらの中へ紛れ込んでござんしたのぢやな、彌「成程左様、そんならわつちの行く御師どの、どこでございやすな、手代「ナニおまいの行く所を誰れが知るぞいな、講中「めん／＼の行く御師どのを知らんと云ふことがあるかいな、コリヤわりさま（汝）はわざと此方の仲間へすり込んで、太々講を喰ひ倒ししようでな、講中皆々「エ、けたいなやつぢや、のうてん（天窓）どやいてこまそかい、彌「イヤ悪く酒落らア、手めえたちの太々講、丸つきり喰ひ倒した所が、たかが知れてある、あんまり安くしやアがるな、江戸ツ子だは、己ひとりで太々講うつて見せよう、トどつさりすれば、御師の手代きもを潰して「ナニお前がお一人でないな、こりや出来た／＼、見ん事おまいが、彌「知れた事よ、多少にやアよるめえ、これで頼みます、

トうちがへの鏡二百文、紙に包み出せば御師の手代二度びつくり「ハ、ハ、ハ、太々講は、やすうて金十五兩も出さんせんけりや、出来んわいな、彌「ナニ是ではなりやせんか、手代「さよぢや／＼、彌「太々講がならずば、是で蜜柑講でも頼みます、講中「ハ、ハ、ハ、べつかこうにさんせ、ハ、ハ、ハ、手代「イヤおどけたお方ぢや、ハアよめた、おまいの行く所は、慥に内宮の山莊太夫どのぢやわいの、さつきの手代が彼所のおぢや程に、是から妙見町をすぐに古市のさきへ往て尋ねさんせ、彌「ハアさうか、コリヤ有難え、ほんにおやかましようございやした、講中皆々「えらいあほうぢや、ハ、ハ、ハ、ト手を打ち笑ふ、彌次郎腹立てども詮方な鉢植の鉢植のだい／＼こうにあらねどもちうにぶらりとなりしまちがひ、それより彌次郎兵衛は、もとの筋違に出で、妙見町をさして行く道すがら、北八はいかゞせしや、米屋太郎兵衛と打ちつれて、御師の方へ行きしか、但しは上方ものと、妙見町に泊りしかと、思ひわびつゝ、辿り行くほどに、廣小路にいたると、此所の宿屋「モシお泊りかいな、宿をとつてかんせ、彌「コレ妙見町と云ふは、まだ餘程ございやすかね、宿屋の女「イエ今少し此先ぢやわいな、彌「ソノ妙見町に、ア何屋とか云つた、道づれの上方ものが泊ると云つたは、ア、それよ、トいら／＼に考へても、藤屋といふを忘れて、さつぱり思ひ出さず「ハテロへ出るやうな、何でも棚からぶらさがつてゐるやうな名であつた、モシ／＼妙見町にぶらさがつてゐる宿屋はございやせんか、そこにある人「ナニぶらさがつてゐる宿屋は、こちや知らんわいの、そない



なこと云うては知りやせんがな 彌成程こゝらで尋ねては知れめえ、もちつと先へ行つて尋ねやせう、
トそれより此所を過ぎて急ぎたどり行くほどに、故に萬金丹の看板妙見町山原七右衛門 彌モシこゝらに何でもぶらさがつてゐる
ト門と云へるを見て、借こそ此所が妙見町ならんと思ひ往來の人を呼びとめて やうな名の家はございやせんかね 往來の人不思議 「何ぢやいな、ぶらさがつてゐる家とは何屋ぢやいな 彌宿
 屋さ 往來」その家名わいな 彌家名を忘れたからのことさ 往來「イヤそれ云うてかんせにやア、知れ
 悪いわいの、何ぢやると、ぶらさがつた家と云うては、ハ、ア向うの角に人の立つてをる家へ行て問
 うて見やんせ、あこは去年首縊りがあつて、ぶらさがつた家ぢやさかい 彌「イヤそんな物のぶらさが
 つたのぢやアございやせん 往來」ハテまあ行て問うて行んせ、あこも宿屋ぢやあるわい 彌「ハイさやう
 なら、ト 走り行くうち、かの家の門に立つてゐた人も何處へかついと行つてし 彌「モシ、ちと物が尋ねたうございやす、
去年首をおくりなさつたは、あなたでございやすか この家の亭主居合はせ贈 「イヤわしや首つツたことは
 ないがな 彌「そんなら、何處でございやすていしゆ」こゝらに首つゝた家は知らんがな、此二三軒さきに
 棚から落ちた牡丹餅喰うて、咽をつめて死んだ家があるが、もしそれぢやないかな 彌「いかさまなア、
 何でも棚からぶら下つた様な家であつた、ト 又二三軒先へ行き或 角にて 「モシ棚から落ちたうちは、おめえぢや
 アございやせんか、ト 家の女房と見えて 此 「イヤ、エナ私がうちは、もとから爰で、ついしか棚へ上げて置
 いたことはおませんわいな 彌「ハア外にはござやせんか 女」ソリヤおまい聞き違ひぢやあるぞいな、

藤屋 妙見町



山から落ちた家ちやおませんかいな、それちやと相の山の與次郎の小屋が、此間の風で谷へ吹き落されたと云ふことでおますがな、大方それちやあるいな 彌「イヤそれでもねえが、コレヤア困つたもんだ、何だか彼だか、さつぱり分らなくなつて、元も子も失つたやうだ、わつちも先刻から尋ねあぐんで、もうくがつかりと草臥れやした、どうぞ一ぶく吞まして下さりやせ、ト 此店さきに腰を懸ける。亭主氣の毒さうに煙草盆をさげて奥より立ち出で「サア一ぶくあがらんせ、一體お前は何處を尋ねさんすのぢやいな、參宮ちやあるが、おひとりか、但しはお連れでもおますかいな 彌「さやうさ、道連ともに三人の所、わつちはその連れにはぐれて、こんな困つたことアございやせん 彌「イヤそのお二人のお連は、お一人はお江戸らしいが、今お一人は京のお人で、目の上に此位な痰癩のあるお方ぢやおませんかいな 彌「左様々々 彌「夫ぢやとこちの内にお泊りなされたさかい、すぐにお前様のお迎ひを出しましたわいな 彌「そりや本當にか、ヤレく嬉しや、そしておめえの所は何屋と云ひやす 彌「アレ御覽なされ、掛札に藤屋と書いておますがな 彌「ホンニそれく、棚からぶらさがつたやうだと思つたが、その藤屋よ、さうして連の奴らはどこに居やす 彌「ソレ奥へお連れ様かお出でだと云うてかんせ、ト 此聲を聞くより奥から出る道づれの上方もの飛んで来り「コリヤようごんした、定めて其所らうち尋ねさんしたのである、こちもえらう尋ねまふたこつちやないわいの、マアく奥へ 彌「これはお世話になりやす、ト すぐに奥へ行く、上方ものと北八は、江戸ぐみの太々講について御師の方へ行きしが、彌次郎兵衛見えざるゆゑ、知らぬ人ばかりにて手持ちなく、いろく

聞き合せても分からず、詮方なくその御師の方を出で尋ね度もあてど無く、かねて妙見町の藤屋へ泊らんといひたることも承知の事なれば、大方尋ねて来るであらうと、儲こそこの所に泊りて待ちうけしなり。彌次郎は太々講の親が間違ひたるいぢぶしうを物語り大笑ひとなりける。北八は髪結を呼びにやり、髻をそりてみたりけるが、「まあ、お互に別條なくてめでたい、彌、いやもうとんだ目に遇つたといふは已れが事よ、時に髪結さん、其後でわつちも一つやらかしてくんなせえ、北、お前マア湯に這入つて來なせえ、彌、そんならさうよ、ト、彌次郎は湯に入りに行く。ト、北八髻をそりかゝりて、「時に髪結さん、おいらが髪はぐつと根をつめて結つてくんな、何だか此方の方の髪は髪が出て髻がおつに長くて、とんだ氣のきかねえ頭つきだ、そして女の髪もどうせえに大きく結つて、何のことはねえ、筑摩の鍋かぶりと云ふものだ、かみゆひ」そのかはり、女子はとつとえらい綺麗でおまじよがな、北、綺麗はい、が、立つて小便するにはあやまる、かみイヤお江戸の女中も大きな口を開かんして欠伸さんすには、根から色氣がさめるがな、北、それでも女郎は又江戸のことだ、江戸は意氣張があるから面白い、こつちのは誰が行つても同じことで、根つから振ると云ふことが無えから、信仰が薄いやうだ、かみイヤこちの方ではお前の様なお方が行かんしても振らんさかい、それでえいぢやおませんかいな、北、貴様己を安く云ふな、コレほんのこつたが、かみオツト仰向かんすと切りますがな、北、イヤ切らなくてもどうせえに痛え剃刀だ、かみ「痛い筈ぢやわいな、この剃刀はいつやら研いだまゝぢやさかい、北、エ、めつさうな、なぜ剃る度毎に研がねえの、かみ「イヤそないにとぐと剃刀がへるさかい、ハテ人さんの頭の痛いのは、こちや三年もこらへるがな、北、道

理こそ痛くて、一本づ、抜くやうだ、かみ「なんぼ痛いとして、たかで命に障る事は無いがな、北、エ、そりや知れた事よ、もう、月代は好い加減にしてくんな、かみ「お前逆剃はお嫌かな、北、エ、その剃刀で逆剃に遣られてたまるものか、頭の皮がむけるだらう、もうそこはい、から、ぐつと髪を詰めて結つてくんな、かみ「ハイ、コリヤえらい雲脂ぢや、この雲脂のとれることがおますがな、北、どうすると取れる、かみ「坊様にならんすとえいがな、北、エ、いめえましいことを云ふ、かみ「根はこない（此様）でようおますかい、北、イヤ、もつと引つ詰めてくんな、兎角こつちの方へ來ると髪は下手くそだ、根を堅く詰めて結ふことを知らねえ無器用な、かみ「さよなら、これではどうでおます、ト、髪結これ見たか根をつめると、月代に三つほどひだが出來て、目は上の方へ引きつる位にかたく引、北、これでよし、ア、い、心持だ、かみ「ナントそれでようござりまじよがな、北、餘りよすぎて首が廻らぬやうだ、ト、此内彌次郎湯より上、「サアあなた、髪なされませんかいな、彌「イヤどうか湯に入つたらぞく、して風でもひいたやうだ、わつちはマア明日の事にしやせう、かみ「さよなら御機嫌よう、ト、出て行く。此うち女膳を持ち出で、めい、へ直す。上「ドレ飯食をかいな、女「今日は不漁でお着が何もおませんわいな、彌「これは御馳走、サア北八どうだ、北、彌次さんわつちが箸は何處にある、彌「エ、此男は、ソレ膳に附いてあらア、北、取つてくんな、どうも俯向くことがならねえ、彌「なぜならねえ、オヤ、手めえの顔はどうした、目が引きつツて狐憑を見るやうだぜ

北「あんまり髪結めがどうぎに根を詰めて結やアがつて、アイタ、首を動かす度に、めり／＼と髪の毛が抜けるやうだ 上方「ソレお前、お汁がこぼれるわいの、アレお飯の上にお汁椀を置かんすさかい、アレこぼれたわいの、コリヤもうとつとやくたいぢや 北「彌次さんどうぞ拭いてくんない 彌「いめえましい男だ、そしてマア俯向かれぬほどに、なぜそんなに緊く結はせた、もうちつとゆるくすればいいに、手めえ大方髪結をいぢめたらうから 上方「そぢやさかい、そいな目に遇はんしたのぢやあるぞいな 北「イヤもうものを云ふさへ頭へ響けてならぬ、彌次さん、どうぞこの難義を助かるしやうはあるまいか 彌「ドレ己れがちつとゆるくしてやらう、ト髪根を持つて、いやと云ふ 北「アイタ、どうするど

うする 彌「これでよからう 北「ア、ちつと首が廻つて来た、エ、とんだ目に遇はしやアがつた。

侮りし報は罰があたりまへ油断のならぬ伊勢の髪結

自ら斯く詠みて打笑ひつゝ、支度仕舞ひ、はや膳もひけたるに、いづれも打ちくつろぎて嘶の序に上方「ナント今宵これから古市へ行こかいな 彌「まだ宮めぐりもせぬさきに、勿體ねえやうだが、儘のかは、やらかしやせう 上方「行て見やんせ、わしやあこで年々捨てた金が千や二千のこつちやないさかい、なんぼなとわしがうけこみぢや、サア早う行かんせんかいな 彌「エ、そんなら、已も髪月代すればよかつた 上方「御亭さん、ちよと来ておくれんかいな この宿の亭主「ハイ／＼御用でおますかい

な 上方「お江戸のお客が、これから山へのぼるといな 妙見町の通言に、古市へ行くを山へのぼるといふ 上方「よござりましょ、お供

して参りましょ 上方「牛車樓か千束亭にしよぢやないかいな 北「太鼓の間とやらは何屋にありやす

て「太鼓ぢやおません、鼓の間の事かいな、ソリヤ千束屋でおますがな 上方「その千束屋がよござり

ましょ、ト 皆々仕度するうち、は今日も暮れて、時分はよしと亭主を窓内として三人とも出かけゆく程に、此妙見町の上はすぐに古市に

「ようござんした、すぐにお二階へ 藤屋のて 「お連れ申してもよいかな、サア御案内いたしましょ、

ト 亭主を先におの二階へ上り、座に着くと 上方「時に彌次さん、かうしよぢや無いかいな、お前方をお江戸でえらい大きな店の

番頭衆にしよぢやないかいな ふぢや「そないなことがよござりましょ 上方「しかし誰らんしてはあかんわ

いの、上店と云ふもんぢやさかい、京談でやらんせにや、工合が悪かるが、どうぢやいな 彌次「そんな

な事はもつて来いだ、すつぱりとわつちが上方でやらかしやせう、コレ／＼女子衆、ちよと来て

おくれんかいの、わしやなんぢややら、どつともう、はやえらう咽が乾くさかい、茶々ひとつ持て来て

おくれんか 女「ハイ／＼ 彌次「ナント京談えらいか／＼、へ、畜生めが 上方「イヤきよといふもんぢや、

でけた／＼、ト 此内女酒肴を持ち出し、ある、藤屋始めて 「コレお仲居、おやまさんはどうぢやいな、此お方は

な、お江戸のえらいお店の番頭さんぢやさかい、なんぢやあると、おやまさんをありたけ出さんせ、

お氣に入ると百日も二百日も御逗留で、お金の入る事は根から葉から、とんとおかまひないお方ぢや

ふぢや「さよぢやわいな、私が去年お江戸へ参じた時、お店の前を通りましたが、成程えらい御大家ぢや、あなたの御支配なさる方は兩替店と見えましたが、これもおつきな店でおますわいの。彌「ナニサ格別えらい店ではないわいの、間口がやつと三十三間あつて、佛の数が三萬三千三百三十三人暮しぢやさかい、えらい賑かなこといな。ふぢや「京のお店はたしか六條珠數屋町であつた。彌「サイノ、わたしが父さん母さんは、さぞや案じてゐさんすぢやあるに、こないにおやまばかり買うて、とつともうえらい、やくたいぢや。彌「これいし皆お出でんかいな、ト呼び立つる聲に四五人立ち出で「どなさんも、ようござんした。彌「ハ、アどれもえらい出來ぢやな。ト番頭さん盃をちと彼方へさゝんせ。彌「アイもし一つあげうかいト、其中で一番美しいやつへさし。北「おいらは太鼓の間が見たいが、どうだ。ト「また太鼓の間と云はんす、鼓の間ぢやわいな。女「鼓の間には、これもお江戸のお客さん方が子供衆寄せて踊らせてぢや、アレ聞かんせ、ト此内奥の鼓の間に踊が始まるとチテチレ〜チ、トテチレ〜いせおんどうたすゞ風や、塵も拂うて木隠れの、池に浮べる月の顔、けはひは遊里のいろ〜にヨイ〜ヨイ〜よいやさア。ト「イヤア奥で踊を始めをつたさうぢや、こちもコリヤ面白なつて來た、ちとおつきなもんでやるわいな。彌「さうさ、とんだおつに浮かれて來た、もう京談も何も面倒になつた、ヨイ〜ヨイ〜、よいやさア。ト「ヨイ〜トテチレ〜。ト「目立つ浮名も面白き、やはらぐ唄や三味線に、足もしどろに立ち

かへり、またも今宵の約束は、ヨイ〜ヨイ〜、よいやさ、トテチレ〜。ト「コリヤえらい〜、時にと、下拙の私めが相方のおやまさんは、コレお前名は何と云ふぞいの、なんぢやお辨、有難いの、誰あらう勢州古市千束屋のお辨女郎と云ふ美しい可愛らしい女の辨財天女様は、忝なくも尊くも、京都千本通り中立賣ひよいと上る所、邊栗屋與太九郎様の相方ぢや、ちと傍寄らんせんかいの、ト手を取寄せる、此の京人は酒に酔ふと何でも丁寧にくどく云ふことが癖にて、だん〜管を巻きかける。彌次郎は始に我が盃をさしたるおやまゆゑ自分の相方と思ひるたりしに、京の男わが相方のやうに云ふゆゑやつきとして。彌「コレ京のお客、ソリヤわしが相方のおやまさんぢや。ト「イヤ何云はんすぞいの、コレ女中のお仲居、お前名は何というてぢや。女「ハイきんと云ふわいな。ト「ソレ〜勢州古市千束屋の仲居おきん女郎に、京都千本通り中立賣ひよいと上る所、邊栗屋與太九郎が、先刻内々ひきあうて置いた、アノ美しい可愛らしい辨財天女のおべん女郎と云ふおやまさんは、則ち京都千本通中立賣。彌「エ、やかましい、千本も百本もいるものかえ、何でもかう、しよてつぺんに己が盃をさして置いた、トいふは江戸にては女郎の座敷になほると、すぐに盃をさして相方を定め、残り彌次郎北八と己れが作略してきはめて置きしゆゑ、彌次郎はその事を一向知らず、江戸の格にて盃をさしたおやまを、我が相方と思ひるたりしゆゑ、さてこそこのいきさ起。ト「これいし、アノおやまさんはな、此人さんの相方、お前さんはこちの島田鬚さんぢやわいな。彌「馬鹿ア云ふな、此中でアノおやまが目付いたから、それで己が盃をさしたに違ひは無い、そこで私がおやまかいな。ト「ハテ悪い合點ぢやわいの、こなさんはアノ江戸はどこぢ

やいな 彌「江戸は神田の八丁堀とち面やの彌次郎兵衛様と云つちやア、ちとひねくつた奴様だア」上「そ
 のお江戸の神田八丁堀、とち面やの彌次郎兵衛殿と云ふひねくつた奴様が、京都千本通中立賣ひよ
 と上る所邊栗屋與太九郎が相方のおやま勢州古市千束屋の 彌「エ、何をぬかしやアがる、邊栗屋の與太
 九郎も呆れらア」上「イヤこゝな お江戸神田八丁堀柄めんやの彌次郎兵衛殿京都千本通中立賣上る所、邊
 栗屋與太九郎を京都千本通中立賣上る所、邊栗屋與太九郎殿と云へばまだしも、夫を京都千本通中立
 賣上る所、邊栗屋與太九郎と呼び捨てにさんしたの、其處でもつてからに、京都千本通中立賣 彌「エ
 エやかましい、よく饒舌る野郎だ」北「己アそんなことより、太鼓の間が見てえ、太鼓の間はどこだど
 こだ」女「太鼓の間とは何ぢやいし、鼓の間の事かいな」北「オ、そのつゞみ」上「イヤ鼓ぢやあるが、何
 ぢやあるが、此邊栗や與太九郎が相方ぢやわいの 彌「コレ悪く洒落るな、何でも鼓の間は己がのだ、悪
 い敵役ぢやアねえが、嫌でも應でも抱いて寝る」ふぢ「ハ、あの廣い鼓の間をかいな 彌「オ、廣くても
 狭くとも頓着はねえ、己がものだ」上「イヤ」上「そりやさゝんわい 彌「ナニさゝんことがあるも
 のか、誰が何と云つても、京都千本通中立賣とちめんや彌次郎兵衛様が相方だは」上「イヤ此お江戸神
 田八丁堀上る所、邊栗屋與太九郎の買うたのぢや」北「ハ、お前方は何を云ふやら、どつちがどう
 だかさつぱり解らなくなつた」女「そして此お方は京のお方ぢやと云はんしたに、物言ひがいつの間に

やらお江戸ぢやわいな 彌「籠棒奴、この慌しいに京談がつかつてゐられるものか」女「餘りお前さん方
 が争うてぢやさかい、ソレ見さんせ、おやまさん方は皆逃げて行かんしたわいな 彌「思えましい、も
 う歸るべい」女「マアようおますがな」ふぢ「モンかうしよかいな、これから柏屋の松の間をお眼に懸け
 うわいな、たゞし麻吉へお供しよかいな 彌「厭だ、己ア是非けえ（歸）る」ふぢ「ハテよござ
 ります 彌「イヤ留めやアがるな、思えましい、ト」すつと立つてかへらうとする。仲居ども立ちかゝりて、いろ／＼挨拶し留
 ります 彌「これいし、何ぢやいし 彌」とめるな、よせえ」初「お前さんばかり其様になア歸る」と云はん
 すがな、私がお氣にいらんのかいし 彌「イヤさうでも無えが、こゝを放せ」初「わしや否いし、ト
 又駈出しさうにするを引き捕へ 彌「イヤ羽織をどうする、よこせ」ト 草入を取られる 彌「コレサおらアける
 無理無體に羽織をぬがせる」云ひながら帯をぐつと引きほどき着物をぬがせようとする、彌次郎も拵じみたる越中襦袢 彌「コ
 ける 初「情の強い人さんぢや、ト」云ひながら帯をぐつと引きほどき着物をぬがせようとする、彌次郎も拵じみたる越中襦袢 彌「コ
 レ、もう堪忍してくれ 初「そぢやさかい、こゝに居さんすか 彌「居るとも」 仲「初江さん、も
 う堪忍してやらんせ」ふぢ「サア」よござります、これへ、ト 彌次郎が手とりもとの所に引き据ゑる 北「ハ、ハ、ハ、面
 白え、彌次さん斯うもあらうか。」

むくつけき客も今宵はもてるなり名はふる市のおやまなれども
 此一首に皆々笑ひを催し、藤屋の亭主仲居どもが、そこら取り片附けて、それ／＼に座敷を設け、

酔ひ倒れたる上方のものを引きたて、案内するに、北八も俱に出で行けば、後に彌次郎兵衛一人残りたるに、女「サア、お前さんもちと彼方へ」彌「ドレ行きやせう、どこだ、ト云ひながら立つて行く。此かの煮しめたる如き糞臭極めたるが、殊の外氣にかゝり、ひよつと見付けられたら恥のかきあげならんと、懐中のうちにて、ソつとはづし、糞子の怒より庭の方へ投げ出し、あとさきを見廻し、人の見ざるに安堵して、仲居の後に引き添ひ行く。かくて夜も更けわたるに、奥の間の川崎音頭も自ら鎮り、旅客の駟の聲喧しく、鐘の音もはや七ツひゞきて、鶏の聲萬戸にうたひ、夜も白みかゝる、明り窓の障子に驚き、起き上りて目をこすりながら、上「サア、どうぢやいな起きさんせ、もう去のわいな、北彌次さん日が出たア、歸らねえか、ト兩人彌次郎が寝て居る起きて「ヤレ、ぐつと一寝入りにやらかした、おやま、これいし、今日もゐさんせ彌」とはうも無え、歸る歸る、ト皆々仕度して出懸ける、おやまども送りて廊下に出、彌次郎が顔を笑ふ、彌次郎は背に糞子より捨てたる糞臭極庭の松に引つ懸りて、平氣にて「これいし、アレ見さんせ、庭の松に湯文字が懸つてあるわいなア彌次郎の相方、女郎初江」のいてかんせ、ほんに嫌いな、誰ぢやいな、彌「ハ、アこいつは可笑しい、羽衣の松ぢやアねえ、糞鼻禪懸の松も珍らしい、北彌次さん、おめえのぢやアねえか、初「ホンニそれいし、あのさんの廻ぢやないかいな、ト彌次郎が顔を笑ふ、彌次郎は背に糞子より捨てたる糞臭極庭の松に引つ懸りて、平氣にて」ナニとはうもねえ、あんな汚ない糞鼻禪を、ナニ己がするものか、初「そぢやて、ナ昨夜わしやこのお客さんの着物を脱がすとてなア、よう見たが、あないな色の廻ぢやあつたわいな、トオ、さうぢやあるぞい、彌「馬鹿ア云はつせえ、己ア木綿糞鼻禪はきらひだ、何時でも羽二重を締めてゐる、初「オホ、

ホ嘘やの、あれぢやいし、北「いかさま己も見覚えがある、確にあれだらう、それが嘘なら彌次さんおめえ今裸になつて見せなせえ、今朝ア宿入の奴様でふつて居るに違えはねえ、初「さうぢやいし、オホ、ホ、これいし、久介どん其廻はお客さんのぢや、取て下んせ、ト庭に掃除をしてゐる男を呼びかけ指圖すると、つとさし出し、糞子の前へ「さあらば糞鼻禪をまわらさう、ソレ取らんせ、どうぢやいな、初「オ、くさ、北「ハ、ハ、ハ彌次さん手を出しなせえ、彌「エ、情ない事を云ふ、己がのぢやねえと云ふに、北「そんならお前のを捲つて見せなせえ、ト彌次郎が帯を解きに懸れば、振り、みな「オホ、ハ、ハ、ハ、ト大笑ひにて送り出る、三人彌「エ、忌えましい、北八めが己に赤恥をかゝしやアがつた、北松に糞鼻禪のぶらさがつたも珍らしい。糞鼻禪を忘れて歸る淺間嶽萬金玉をふる市の町、かくて妙見町に立ち歸りたるに、其日は空の景色いと長閑なれば、急ぎ内外の宮めぐりせばやと、支度あらましにして立ち出づるに、行く程なく今戻りし古市のあがりくちに、はや見出だして、めい、小屋に引きたつる、古のお杉お玉が面影をうつせし女の二上り調子「ペンペラ、ペンペラ、ペンペラ、ト無上に弾き立つる唄の唱歌は、何とも解らず、往來の旅人、彌「彼方の新造が鑿へぶツ附けてやらう、ト鏡二三文投げると、ちや「ペンペラ、北「ドレ己が當て、見せよう、ハアこれはしたり、ト「なんととして、

天照皇大神にて、神代よりの神鏡神劔をとつて、鎮座し給ふ所なりと。

日にまして光照り添ふ宮柱ふきいれ給ふ伊勢の神風

こゝにあさひの宮、豊の宮より始めて、河供屋、ふるどの宮、高の宮、土の宮、其外末社悉く記すに違なし。風の宮へかゝる道に、御衣裳川と云ふあり。

引きずりて幾代かあとをたれ給ふ御衣裳川の流れ久しき

すべて宮めぐりのうちは、自然と感涙肝に銘じて、有難さに眞面目となりて、洒落もなく、無駄も

云はねば、暫くのうちに順拜をはりて、もとの道に立ち出で、頓て妙見町に歸り、こゝにてかの上方も

のと別れ、彌次郎北八兩人のみ、藤屋を晝立として外宮へまゐる。是すなはち豊受太神宮なり。天神

七代の始め、國常立の尊と申せし御神なり。神璽の宮、寶劔の宮、其外數多の末社を拜みめぐりて、

天の岩戸に登りたるに、彌次郎兵衛如何しけん、頻に腹痛みて惱みけるゆゑ、匆々に此所を下りたち、

傍に休みて、丸薬など用ひ、兎角するに堪へがたければ、急ぎ廣小路に到り、宿を借らんと、其處

此處を見廻すうち、ある宿屋の亭主「モシ〱御泊ちやおませんかいな 北「アイ連の者が少し虫がか

ぶりさうだから、宿をお頼み申しやす 北「サアお這入りなさんせ、ソレお鍋、奥へお供せんかい

やい 女「ようお着きでおます 北「サア彌次さん、上んなせえ、 彌「アイタ、タ、タ、汚ねえ顔を

する、お前コレヤア何ぞの罰が當つたのだ 彌「ナニサ罰をくつた覚えはねえ、大方今朝の飯があたつ

たのだらう 北「お飯も、あがりつけなざらんと、あたることがおましよわいな 北「ア、コリヤ意氣

地のねえこつた、サア〱奥へ〱 彌「アイタ、タ、タ、 北「北八に介抱せられ來敷に通〱さぞ御難儀でおましよ、

お薬でもあがりましたか、幸ひ、私所の妻が今月臨月でおますがな、昨日からちとすぐれませんで、

今醫者様を呼びに参じたが、あなたも見てお貰ひなさんせんかいな 彌「それはどうぞお頼み申しやす

北「畏りました、ト 勝手へ立つて行く、彌次郎 北「どうだ湯でも茶でも酒でも飲みたくはねえか 彌「馬鹿

ア云ふな、アイタ、タ、タ、無上に腹がごろ〱鳴る、北八雪隠はどこにある、尋ねてくりや 北「お前

何所に置いた、袂にでもねえか 彌「阿房つくせ、ナニ雪隠が袂にあるもんだ、どこにあるか見てくり

やと云ふことよ 北「ハアさうか、ドレ見てやらう、あつた〱、アレ縁側の先におちてある 彌「まだ

吐しやアがる、アイタ、タ、タ、ト 漸やうのことに立ち上り、用たしに行 北「ハイお醫者様がお出でたわいな 北「サ

ア〱、これへ〱、ト 此内近所の醫者の弟子と見えて焦茶の木箱紋付に黒 北「エヘン〱、これは不順な天氣あひで

ござる、ドレお脈を、ト 北八の傍へ坐り北八が 北「イヤ私ではござりませぬ いしや「ハテ達者な人の脈から見

較べねば、病人の脈が分らんわいの、先貴様お見せなされ、ト 北八が脈を取り 北「ハ、ア成程貴様は何とも

無いやうぢや 北「左様でござります いしや「お食はどうぢや 北「ハイ今朝程飯を三膳、汁を三杯食べま

した「しゃ」さうである、平は大方一杯ちやある、換へてはまゐるまい、北「さやうでござります
 いしゃ」さうぢやある、此脈體では、何所も何とも無いやうぢや、北「左様でござります、いしゃ」ナン
 トよう當りましたらう、凡そ醫は意なりと申して、脈體をもつて勘考いたす所が第一でござる、氣遣
 ない、最早お暇いたさう、北「モシ、病人を御覽じて下さりませ、いしゃ」ほんに、さうぢやあつた、
 私は變つた癖で、とかく病家へ參つても、病人の脈を見ることを、どうも忘れてならんわいの、しか
 し見ずとも知れたことぢやが、ついでに見てしんじよ、病人はどれにござる、北「ハイ、只今雪隠へ參つ
 てをります、コレ、彌次さん、お醫者様がござつた、早く出なせえ、ト大きな聲をすれば彌次「イヤ
 まだ出られぬ、お醫者様、どうぞこれへお出で下さりませ、北「エ、滅相な、お醫者様が其所へ行かれ
 るものか、無躰なことを云ふ、彌「そんなら、今出る、ト漸う雪隠より出れば、醫者しかつ「ハ、ア貴公はコ
 リヤ血の道ぢやわいの、兎角臨月などには起るものぢや、彌「イヤ私孕んだ覺えはござりませぬ、いしゃ」ナ
 ニ懐胎でない、ハテめんような、イヤコリヤわしが師匠が悪い、廣小路の伊賀越屋から呼びにおこし
 たが、彼所の病人は産月ぢやさかい、大方血の道が起つたのぢやある、その積りで藥盛るがよいと、
 教へておこしたが、そりや貴公のことでは無かつたわいの、北「左様でござりませぬ、血の道は、こ
 の内儀のこととござりませう、此男はそれではござりませぬ、いしゃ」さよぢや、コリヤ私が間違ひぢやわ

いの、併し何なら貴様もそれにしておかんと、藥盛るにも一所にして面倒になうてよいがな、北「成程
 コリヤお醫者様のおつしやる通り、彌次さんお前も血の道にして置くがい、ね、彌「とんだことを云ふ、
 男に血の道があつてたまるものか、いしゃ」イヤ、外の病氣も面白かる、何も私が稽古の爲ぢや、一體
 貴様は何病ぢや、彌「私は先刻から蟲がかぶつてなりませぬ、いしゃ」大方ソリヤ腹のうちでかぶるぢやあ
 る、彌「ハイおつしやる通り、腹の外ではござりませぬ、いしゃ」さうぢやある、コレ、女中、供の者に
 藥箱おこせと云うて下んせ、女「ハイ、畏りました、イヤもしお供の人は見えませぬ、いしゃ」見
 えん筈ぢや、連れて來んさかい、藥箱は私が持て來たわいの、ト提げて來た風呂敷包を開、女「オ、をかし、
 あなたは竹の匙で、煮豆盛るやうにしてぢやわいな、北「ハア聞えた、敷醫者様だから、そこで竹の匙
 をおつかひなさんと見えた、そして貴方のお藥袋には、繪が描いてござりますが、どういたした事
 とござりますね、いしゃ」イヤお尋ねで面目ないが、生得手習をいたしたことがないさかい、北「ハ、アあ
 なた無宿ぢやない、いしゃ」左様々々皆目字が讀めぬむしくぢやさかい、それで斯様に藥の名を繪に描いて
 置きますぢやて、北「これは面白い、左様なら、その道成寺の繪はなんでござります、いしゃ」コレハ桂枝
 ぢやて、北「閻魔様は大方大黃でござりませうが、此の犬が火にあたつて居るのは、いしゃ」陳皮、北「此
 産婦の傍に小便してゐるはいしゃ」知れたこと山梔子、北「印判に毛のはえたはいしゃ」半夏、北「鬼が尻をひつ

て居るのはいしや「それは枳殻きこく北ハ、面白く、時にお薬はいしや煎せんじ様常じょうの如し、生薑しょうがは一剝ひとへぎお入れなさい 北山葵わさびでは悪うござりますか 彌馬鹿あばア云ふな、これは有難うござります、ト此内何やら勝手の方俄かに騒がしく、人の足音とんとん響き、亭主の聲として「コリヤ、お鍋なべやい、取揚とりあげ婆殿ばどのへ人を遣れ、ソレ久介は湯を沸わかせ、催もよほ生薬やめはあるか、早う早う、ト騒がたつち此方には又彌次郎が頼に腹痛みだして「アイタ、北彌次さん、どうした、いしや「コリヤ堪たまらん、病人そびの傍そばには居られぬ、ト早々逃げ出して歸ると、勝手の方には、ヤレ取揚婆ア様のお出でと、下女のお鍋が来ると、とり「これはしたり、寝て居さんしてはならんわいの、サア、起きおきさんせ、ト彌次郎を引きずあげば、「アイタ、辛抱しんぱうさんせ、コレそこな人、菰こもはどうぢやいな、彌アイタ、こちや、トこちや、この産婦と間違へ、彌次郎が腰を引つ立て、「サア、皆来みなきさんせんかいな、コレ、こへ来て、誰だれぞ腰を抱だいて下くだんせ、さあ、早う、ト急ぎ立つるにぞ、北八は呆れ返りてをかしく、こりやどうしを、「コリヤ北八どうする、ア、痛いたえ、そないな氣の弱いことではならんわいな、ぐつといけません、いけません、彌此處こゝでいけんけんで堪たまるものか、雪隠ゆきいんへ行いきてえ、放はなした、トこゝかへ行てはならんわいの、彌それでも此處でいけむと、此處へ出る、「出るから、いけませんと云ふのぢやわいの、ソレウ、ウン、ソレ、もう頭あたまが出でかけた、彌アイタ、そりや兒こでは無え、それをそんなに引ひつ張はらしやんな、ア、コレ痛いたえ、トもかくをかまはず婆はぐいと引、「エ、此の婆ばあ奴、

ト橋面を張り飛ばす、「この血違ちがひは、ト武者振り着く、かゝる騒ぎの最中勝手の方には「おぎやア、そりやこそ生うまれた、イヤ、ぢや無い、何處どこぢやいな、トうろたへ廻るうち、彌次郎も頼に痛み、雪隠「コレ、婆様先刻さつにから尋ねてをるに、もう生うれたわいの、早う、ト婆を引つ立て連れ行けば、勝「めでたい、三國さんごく一の玉たまのやうな男の子が生れた、ト喜びの聲、共に亭主に「コレハお客様お喧やかましうござりませう、先づ私わたくし妻さいも安産やすんいたしました、ト云ふうち、彌次郎も「さて、おめでたい、私も今雪隠で思入おもひれ安産やすんしたらば、忘わすれた様に快やくくなりました、トいしや「それは貴方あなたもおめでたい、北お互たがえにめでたい、トより喜びの酒酌み交して、婆の間違やら、何やら彼やら咄し合ひて、大笑ひとなりける。めでたし、

東海
道中 膝栗毛 六編序

長いはく、此作者のながきこと、肢體は心と俱に長く、鼻の下は禪のさがりと侘しく長し。酒のあとをひく事は、行坐を飛脚に遣りたるよりも長く、借金をひきずる事は、淋病やみたる牛の小便よりも長し。去るに仍て膝栗毛の尾に尾をひいて、長道中の今に歸らず。漸く五編目に至つて伊勢路に筆をおくと雖も、例の長尻痺をきらして、京へ登るの趣向を考へ、下手の長嘶を六編とし、御見物が長喜世留の掃除し給ふ紙屑を賣出すも、固より爪の長き熊手性、長居はおそれも承知之助、ひとつ長屋の佐次兵衛とは、隣同士の彌



次郎兵衛、せめて四國は廻らずとも、京大阪は當りまへ、是だけの所御辛抱御一覽のほど、ハイおたのみ申しますと、しか云ふ。

維時文化丁卯春正月

十返舎一九識

附言并凡例

或人予に謂つて曰、此膝栗毛、追々足下の骨折見ゆれども、五編目伊勢參宮迄にて、大かたは事足れり。夫れ花は半開に詠め、酒は微醉に飲むがよいと譬の通り、ものは十分ならざるを却て壯觀と心得べし。不佞は足下が最辰ぢやから云ひますが、今年も六編を書いたといふことぢやが、よしにすればよいになア。足下が胸の奥行も、もう大概は知れてある。此うへ掃き出さば鼠糞やら鼻かんだ紙やら、色々の穢い物引出して、はては人の鼻に袖覆はするの罪にあはん。予答へて曰、趣向は塵芥のごとく、今日掃いて今日積る、胸中掃溜にひとしければ、狗の糞のしやれたるも南瓜の花のむだなるも、作者が智恵の肥料にして、葛西船に積むとも盡きず。そは御見物の最辰組から、こゝの塵も掃いたがよい、あそこも埃だらけぢやと、こちらの氣のつかぬ所を教へて下さる岡目八目、

すかさず是へと反古張團扇ほぐはりうちばに受留めた、塵埃ちみの中から趣向はさまぐ。既に五編目凡例にいへるが如く、彌次北八かみさかやきが髪月代をせし所なし。東都を立ちしより日數ひかずを経て、其事なきは如何いかにぞやと、或人の批判ひはんしたまひしことありしを、オットまかせとすぐさま追加めうけんまち、妙見町泊の趣向とせし事、御存知の通り、なんでも人の懐ふところをあてにする、そこが金ぢやと版許はんもとの慾心よくしん房はうが一つ穴の狐、化けあらはした所が三文が智恵ちゑもない作者の腸はらわたかくのごとし。

偕さてまた又此書伊勢路より大和廻り御約束おやくそくの所、一足飛そくたひに伏見から京大阪とやらかしたるは、和州名所巡覽こつげいの滑稽こつげい、其趣めづりき珍めづりしからず。こちつけ餘あまりくだくしければ、此所縫ぬい上あけをせしうへ、ぐつと端折はしよる。

大和路やまとぢより大阪へ出る順道なれども、予思ふことあれば、先づ花洛見物みやこを前とし、大阪おほを後にす。

京名所盡く記すに際限さいげんなければ、只祇園清水知恩院ぎをんきよみづ、大佛様御覽おほらうじたかえ、金閣寺拜

見あらば、よい傳つてがあるぞえ、と云つた位の事を記す。故に此次七編は、京都見物終り、千本通りより淀よどに出で、八幡山崎やわたに參詣し、佐田守口さだもりぐちの邊にて終る。

東海道中 膝栗毛六編 卷之上

ことわざ 諺に云ふ旅の恥は書き捨ててゆく落書の國所は欄干にとゞまり、おのづから往來同國の人の目を
なぐさ 慰め、被り行くつんまう 髻の笠印は、わざと己れひとり心の悦ばしむるも、みな俱に驛路のわざくれ、相
やど 宿の木枕に結ぶ縁は出雲の帳外、二方荒神の隣同士は長家附合の外にして、其の心々に出る儘をし
くら やべり、あくまでに喰ひ、掛取道連にせざれば三十日の愁にあはず。米櫃背負て出ざれば鼠追ふ世話
あつまとこ もなく、名にし負ふ東男も薩摩芋に髭を撫で、花まだき京女郎も團子のくしにつぶりをかき、しら
かけおち ぬ火のつくすたはけに駈落して走るあれば、雲井路の路草くふ遊山旅ののろつくあり。並松の根に腰
こんびら 打かけて金比毘羅参りの樽をひらき、街道の真中にひよぐり出して諸社順拜の鈴口をふる。羈中の有
もくひきわらち 様まことに命の洗濯もの引ばり、股引草鞋に何國までも足にまかする雲水の樂み得も言はれず。こゝ
あつま に東の都神田の八丁堀邊に住む彌次郎兵衛北八といへる二人連の意けもの、神風や伊勢参宮より足曳
あそに のやまと路をまはり、青丹よし奈良街道を経て、山城の宇治にかゝり、こゝより都に赴かんと急ぎけ
ふしみ るほどに、やがて伏見の京ばしにいたりけるに、日も西に傾ぶき、往來の人足はやく、下り船の人を
せんどう 集むる船頭の聲々やかましく「サア〜今出る船ぢや、乗らんせんか、大阪の八軒家舟ぢや、のてか

ん（乗つて行かん）せんかい 彌「ハ、アこれが彼の淀川の夜船だな、ナントきた八、京から先へ見物する積りで来たが、いつそのこと、此舟に乗つて大阪からさきへやらかさうか 其それもよからう、モシ乗合もありやすか せんどう」さうはかいの、乗るなら早う乗らんせ、いつきに（急に）出すさかい、コレ、草鞋解いて乗らんせ、えらいへげたれぢやな 其「エ、何をぬかしやアがる、氣の強え笹棒だ 彌「コレ北八、手めえの包みもいつしよにおれが風呂敷に包んで置かう 其船頭さん、コレヤア何處えすわるのだ せんどう」そなた坊様のねきへ割込まんせ 彌「御免なせい、ヤアえいとな、ト、二人ながら船の間のわりこみ」わのり合「コリヤえらう詰めくさつた、船頭さん、蒲團一つ貸さんせ せん頭「ソレとらんせ、サア」皆えいかいな、下にゐてくだんせ、苦草くさかい 其「人」錢かひなされ、錢はよござりますかな 其「昆布、砂糖餅」 彌「燗酒よござりますかいな、鹽梅よし、ト、此うち船頭共舟に苦を葺い、うた「ふねは追風に帆かけて走る、われはこがれて身をあせる、ソウレ、ソレ」なんぞい、コリヤ、えらう空がわるなつた、ふる（降る）かしらんわい のり合「船頭さんゆうべはちうじやう島ぢやある、精進が悪いさかい、コリヤ雨ぢやあるぞいの、ハ、ハ、ハ、時にどなたも、じよらかいて（平坐）ゐなさらんか、今の内あんぢよう（味能く）せん、後に工合がわる成るさかい 其「人」コレおまい、ちと退いてかさんせ、粽の上にいしかつてぢやわいな 大阪の「人」コリヤ不調法、とかく乗合はお互に何ぢやると不肖して

くれなされ 其「よいわいな、おまい大阪は何處ぢやいな 大阪「わしや道頓堀 其「かいな、どとん堀のしゆは、皆藝子ぢや、ナントこゝで何なと一つやりなさらんかいな 長崎の「人」コリヤよかたい、船中のねぶり目ざましに、あんた（彼方）衆、一つツツ藝能やらしやつたらよかたい、うんどもは長崎のもんぢやが、能毛川島のぼうぶら（南瓜）まくらで、かみさし（筭）ぼつきりでもやらうばいよウ 越後の「人」コリヤ、えいことんし、わしどもは、いちご（越後）のもんだが、長崎のあんにやさ（兄）がやらしやつたら、わしも國風のおけさ松坂でもかたるべいとこと 其「こいつは面白え、マア長崎のお客から始めなせえ 長崎の「人」よかく、これしこやらうばい、ト、おまへよかはた、わしよ振り捨て、よんにようしやんす（大分色女）と契らんす、コリヤどんく（蛙）が飛ぶなら桶かぶせ、それでも飛ぶならきねおけ、コリヤ、なんぢやいな のり合「イヨ、えらでけぢや 越後の「人」わしどもやるべい、みんなそれからトコトン」と囃してくれさつしやい 長崎「よかく、合點あらう 其「手を打」トコトン」 「お長なよつばらかんだ（良久）まめでたかおちよななみ」トコトン」 「にがた（新潟）一ばんすゐぎゆ（水牛）の櫛を のり合「トコトン」 其「ハ、面白え」 其「イヤ江戸のお客に何ぞ所望しよぢやないかい 彌「ソリヤもう琴三絃鼓弓、なんでもちつとづゝはやりやすが、こゝ

にやアそんなものはねえから、はじまらねえ 京「おまいの口跡では聲色が出るぢやある、誰なと江戸役者やりなされ 彌「聲色も二十や三十ばかりは遣ひやすが、誰にしよう、源之助か、三津五郎か、イヤ高麗屋にしやせう、併し江戸役者はおめえ方にやア分らねえから、つまらねえ 大阪「ハテえいわいの、一つやりなされ 彌「手前味噌ぢやアねえが、聲色は江戸でも一番といふ男さ、誰でもうしろを唄ふ人があると、すつぱりやつて見せるがなア 京「うしろ唄ふとは、呼出しのことかいな、わし、やろわい、口三味線ぢや、チ、ツ、ンチンシヤン 京「これはお江戸の堺町や、葺屋町に名も高き役者聲色はどうぢやいな、誰れぢやいな松本の幸四郎でせい、チ、、、チン のり合、イヨ松もとウ彌「まんまと奪ひ取つた此一巻、是さへあれやア出世の手がより、大願成就かたじけない 京「コリヤやくたいぢや、わしや江戸に五六年居て、此間戻つたわいな、高麗屋はそない(其様)な口跡ぢやないもせんもの 大阪「わし一つやろわいの 京「た、是はねつからでませぬ、さて又つぎの役者は誰ぢやいな 大阪「やつぱり今のぢや、ト、此大阪ものは江戸にも居て聲色もまんざらでなければ、わざと文句もその儘にいふ「まんまと奪ひ取つた此一巻、これさへあれやア出世の手がより、大願成就かたじけない、トハ無調法のり合、イヨ高麗屋ア 京「コリヤきよといきよとい、大阪のお方がほんまぢや、おまへのは高麗屋とは聞えんわいな 彌「聞えん筈だ、コレヤア信州松本の者で、幸四郎が弟子の胴四郎が聲色だ 京「そんなこつちやあるぞいな、ハ、、、ト

中船



彌次郎のへこんだのを可笑しが、どつと笑ふ。彌次「彌」ときに北八、とんだことを忘れた、舟に乗る前に小便すればはしよげてだんまり。此内舟ははや旋を過ぎて

よかつたものを、例の通り舟ではどうもあぶなくて爲にくい、困つたものだ、コレ船頭さん、ちよつくり舟を着けて貰ひてえの。せんどろ「あがるのかいの。彌」小便「せんどろ「エ、舷へちよ〜こなつてひよぐらんせ〜」彌「それが出来れやア言ひ分はわえ、ア、もう〜出さうになつて来た、ト、うろ〜此彌次郎きた八羅の間と胸の間の所に居たるが、胸の間三人前借り切にして、十二三の前髪連れたる體居らしきぢい様、背より彌次郎きた八と咄しなどしてゐたりけるが、先刻より蒲團かぶりて寝ころびながら

用にお困りなら、ぶしつけながら、わしが渡瓶貸してあぎよかいな、コレ〜長松よ〜、イアこいつ、もう寝くさつたさうぢや、モシそこらにあるぞいの、だんない、そつちへ持てかんせ。彌「それは有難うございます、ト、暗がりがまぎれに隣を探りまはせば、箱火鉢のうしろにうございます、ト、きびしよと云ふ、今江戸にもたまさか見えたり。彌次

にござりやした、こいつは尋常な渡瓶だはえト、持手

「コリヤえらう寒なつた、長松起きて火イともさんかい、酒なとやるかい、コレ目イさまさんか〜、コリヤやくたいぢや、ト、そこら探り廻して、火鉢の火をつけ木にうつし、小提「ヤア、コリア何ぢやい、ハ、ア、茶をたくつもりで、水かな入れておきをつたさうぢや、ト、川の中へうちあけてしまひ、すぐに樽の酒をあけて、かの火鉢の上にかきな

「モシ江戸のお客、酒一口どうぢやいな。北「コレハお嗜みでございやす。いんきよ「もう出来た

さうぢや、ト、菜籠の煮しめなど出し、「ドレお燗見まじよかい、イヤこれはけたいな香がする、ベツ〜ベツ、コリヤ酒がわるなつたのか、よもやそぢやあるまい、一つおまい飲んで見てくだんせ、ト、北八へ盃をさす

北「ハイこれは、オト、ト、ト、引うけてぐつと飲ん〜しまひしが、何とやら彌はゆきやうにて、變な匂「ハイ頂きやした。いんきよ「お連のお方へあげてくだんせ。北「そんなら彌次さん、ソレ、ト、盃をまはす。彌次郎は先刻よりこれを見小便をした渡瓶だが、それで酒の燗をするといふはどうかしたものだ、但しはおれが籠相で、渡瓶と思つて小便したのか、何にしても、とんだことをしたと心の中に二人が顔をしかめるを見て可笑しきこらへられず、それと知らずにあの内酒を北八が飲みたるをふき出すほど可笑しく、ちつとこらへ居たりし所へ北八盃。彌「イヤおらア御免だ、なぜか今宵は酒が飲みたくねえ、お盃ばかり、ハイそれへあげませう。いん「あがらんのかいな。北「ナニあびる位さ、彌次さん、なぜ飲まねえ、酒といふと一番に咽をぐい〜するおめえが、コレヤア何でも變ちきだはえ。いんきよ「ハ、アきこえた事があるわいの、今そつちやのお方が暗がりて渡瓶と間違へて、このなかへ小用しこみやさんせんかいの、どうも小用臭いと思うたが、コリヤおまいそぢやさかい、飲まんのおぢやあるぞい。北「ソリヤ知れやせん、桑名の渡しでも、此人が船の中で小便して大騒ぎをやりました、その位の籠相はしかねん人さ、エ、きたねえ、ゲエイ〜。いん「道理こそ、きびしよに何か一杯あると思つたが、わしや又此わる(童)めが水入れて置きをつたと思つて、川へほつたが、どうでも小用のおどもりが残つてあつたものぢやあるぞい。北「とんだこつた、胸がむか〜する。いん「ア、こりや、ゲエイ〜、長松よ、背中叩いてたも、ア、むさ

やの、ゲエイ〜 彌「これはお氣の毒な、モシ何ぞ薬でもあがりやし、然し小便のあたつたには何がよからうしらん、モシ〜どなたぞ丸薬でも御所持なら、少し下さいましたのり合、ハイどうも小便のあたつたによい薬は持ちませんわい 彌「ソレヤア困つたものだ 北「彌次さん苦をちつとまつてくんない、彌「どうする 北「小便を 彌「するの、北「吐くのはな 彌「ドレ 舩へぐつと顔を出してやらッし、おれがつかまへてゐてやらう、ソレよしか、シイ引〜、どうだ未だか、エ、川の中だから犬が居ねえでわりい 北「ナゼ、犬が居るとどうする 彌「てめえ小便をはくの、白コイ〜〜と呼んでやるは 北「エ、馬鹿アつくす、ゲエイ〜、ト、此内隠居はやうやうに吐いてしまひ、川の水にうがひし、口を洗ひて「どうぢや、そつちやのお方えいかいの 北「どうやらかうやら、よくなりやした、ト、くちをそ、ぎてまじめな顔、彌次郎は心の中に可笑しさを隠して居る。隠居結構人と見えて格別腹も立てず「いん「イヤモウお互にどえらい目に逢うたこつちや、口直しにあとの酒やりたいが、爛をするものが無うなつた、どうせうぞいの 長まつ「そしたら、こつちやにあるほんまの渡瓶で酒の爛いたしましよかい いん「ホンニさうぢや、ほんまの渡瓶の方が綺麗ぢや、藤の森で今日買うて來た儘で、まだ一度も小用せんさかい、それで爛せうわい 北「めつさうな、あやまりやすね 彌「馬鹿アいふな、茶は土瓶の茶がうまし、酒の爛は渡瓶の事だは 北「ナニ渡瓶の酒が飲めるものか 彌「そんならモシ御隠居様やつぱり今のきびしよとやらになさいませ いん「きびしよは川へほつたはいの、渡瓶の方が新しいさかい、

きれいちやはいの、ト、樽の酒を渡瓶にかけて、火鉢の上にかけていん「きよ「長松そこな茶碗おこせ、サア〜ほんまの酒ぢや、ソレおまい方さそかい、ト、茶碗を差出す彌次郎「頂きやせう いん「むしのえいお人ぢや、肴あぎよかい、煎煎あがるかいな 彌「ハイ〜これはなんでござりやす いん「ソリヤ鯨の油取つたあとの身ぢやさかい、煎煎がらと云ふわいな 彌「いゝものでございやすね、サア北八さうか、ト、北八へ茶碗を返し、渡瓶をとりつぐ。新まいと、一杯ひききうけてぐつと飲んでしまひ 北「小便の混らぬ酒はまた格別だ、ハイあげやせうか いん「皆乗合のお衆へ一つづつあげてくだんせ 北「さやうならお隣の、ト次に居た連後の 北「ヤレふとつ頂くべいとこと、ト、茶碗をとる。北八かゝる 北「コリヤ小便のする、やきたごぢやアござらないか 北「ナニ、この渡瓶は新しいから綺麗さ、トついでやればぐ 北「ア、えゝことん〜、サア長崎のあんや(兄貴)さ、やらつしやるか、ト、茶碗を返し、トつとほしてうけて「ナイコリヤ氣のどんくうなことばよウ いん「だん〜そつちやのお方へあげてくだんせ 長「しから、あんたへさんじますたい、ト、そのつぎの人へさす。是は病人と見えて、色の蒼ざめたる垢だらけの男、襟に綿を巻きて、蒲病人「わしや酒はいかんさかい、こなん一つ頂かんせ、ト、供のおやちを譲る。先刻より渡瓶のきいれなおやち「モシモシ憚りながらその渡瓶こつちやへくだんせ、手酌にやりましよかい、ト、此おやち酒好きと見えてつづけて二杯やら彌次郎兵衛取 彌「サア隠居様あげませう いん「イヤおまい一つ飲んでおこさんせ 彌「ハイ〜左様なら、モシそのしびんこちらへ びやらにんの所のおやち「ハイ〜それへ、ト、しびんを送り戻す。北八取つて、彌次郎へなみくとついでやる。彌次一息にぐつと飲んでちわやんを

投げだ 彌「エ、、、こりやとんだこつた、ゲエイ〜」 北「彌次さんどうした 彌「どうした所か、コリヤ酒ちやアねえ、小便だ〜」 おやち「ハ、アこれはしたり、龜相しました、わしらがとこの御病人の洩瓶と取ちがへました、サア〜酒のは此處にある、ソレ取り換へてくだんせ 北「ハ、、こいつ大出来大出来 彌「エ、もうどうしたらよからう、此位なら己が小便を飲むはまだしも、アノ病人めがエ、わる臭い、ゲエイ〜、ベツ〜」 北「ハ、、あの病人の顔を見な、瘡と見えてあたまから首筋のあたりまでちく〜」 彌「エ、、もう言つてくれるな、咽が裂けるやうが、ア、苦しい、ゲエイ〜」 北「兎角おめえは小便が祟る、船ではもう禁便にするが、そこで一首浮かんだが、どうだ〜、

小便を人に飲ませしその報いおのれも飲んでよいきびしよなり

此騒動に船中おの〜ねぶりをさまし、 大笑ひとなるうち、舟は早ひらかたといへる所近くなりたると見え、商ひ船此處に漕ぎ寄せ〜 商人「飯くらはんかい、酒飲まんかい、サア〜みな起きくされ、ようふさる奴らぢやな、ト、此舟につけて遠慮なく苦みきひろげ、わめきたつる。このあきなひ船は、もの言ひがのり合「コリヤ飯持てうせ、えい酒があるかい 北「いかさま腹がへつた、爰へも飯を頼みます 商人「われも飯くふか、ソレくらへ、そつちやのわるはどうぢやいやい、ひもじさうな面してけつかるが、錢無いかい 彌「イヤこの籠棒めら何をふさきやアがる のり合「この汁はもむ(味)ないかはり、ねからぬるうていかんわ

い 商ぬるかア水まはして食ひをれのり合「何ぬかすぞい、そして此芋も牛蒡も腐つてけつかる 商「その管ぢや、えい所は皆うちで焚いて食てしまふたわい 長きの人「イヤこやつふとう(大膽)な奴よウ、いかなちうつるばつてん(ドウシタモノヂヤ)その吐しやうばい 五「づくにうにやして(天窓打つて)やつくれべいか 商「猪口才ぬかさすと、早う錢おこせやい、コレそこなおやぢ、錢どうぢやい おやち「このがんだう(奸盜)めらは、たつた今とりくさつて、コリヤ早う往ねやい、さだめしおどれがげんさい(女房)は、晝は袖乞して生米がな食らふさかい、今頃はぶつ〜と腹ふくらして、白い泡吹いておよぞい あきんど「オ、われがうちは、大かた四條の蒲鉾ぢやある、雨が降りさうぢや、水の出んさき、早う往にくされ 彌「イヤこいつらア、言はせて置きやア、途方もねえ奴等だ、横ツ面アはり飛ばすぞのり合「コレ〜おまい腹立てさんすな、アリヤこゝの商ひ舟は、あないに物をぞんざいに云ふのが名物ぢやわいの 彌「それだどつてあんまりな 商「ワアイ、あほうよく〜、ト 行_{こぎ出して} 彌「コリヤ待ちアがれ、あほうとア、だれがこつた、ト ひとりきんで思はずたちあがる拍子に、 五「この人「アイク、、、コリヤわしがぶしやかぶ(膝頭)踏んだ 長「うんどもがべん(頬)ふう、あんによう(大分)打つた、アイタタ、、 彌「コリヤ御免なせえ、ト すわる かくて船はひらかた過ぎたる頃、雨催ひの空俄に暗くなり降り出し、あはやと見る間に篠をつく大雨となり、苦を漏れば、乗合は上を下へと騒ぎたち、船頭も

かくては働き自由ならず。やがて堤に船を漕ぎ寄せ、しばらくかゝりて見合せけるが、こゝは伏見と大阪の半途にして、登り船も下り船も皆落合ひ混雜し、がたひしと岸によりて、今やと霧を待ち居たるに、およそ一時餘り過ぎたるとおぼしき頃、漸く雨やみ雲きれて、月の影八幡山にさし出でたるに、船中おのゝ勇みたち、彌次郎北八も苦ひきあけ、顔さし出して此景色を眺め居たるが、彌ハアもう何時だらうな、ときに北八、又困つたことがあるはい、雪隠へ行きたくなつた、北エ、きたねえ事ばつかりいふ、彌どうも船では出来ぬ、イヤ幸こゝにかゝつてゐるうち、ちよつくり土手へあがつてやらかしてこよう、北ホンニ、よその船でも、人が手水にあがる様子だ、早くさうしなせえ、イヤわつちもお相伴がしたくなつた、モシ船頭さん一寸あがつて来たいがいゝかねえ、船用達しになら早う往てごんせ、わしらが今飯食てしもふと、いつき(直)に船を出ささい、彌草鞋は何處だ、北ナニサはだしであがらう、乗る時足をすゝげばいゝに、ト、兩人船より堤にあがりて、彌「ナントいゝ景色だな、どこらでやらかさう、北オットそこには水溜りがある、もつとそちらへ、ア、なるほどいゝ月だ、一刻を千金づゝの相場なら三十石のよど川の月、斯くくちすさみて思はず勝景に見とれ居たるが、このうち岸にかゝりゐたりし船ども、追々漕ぎ出す様子に、北八彌次が乗りたる舟も、今出ると見えて、船頭ども舳ひ綱を解き、棹さしのべて二人を



八幡山

舟

舟

舟

舟

舟

舟

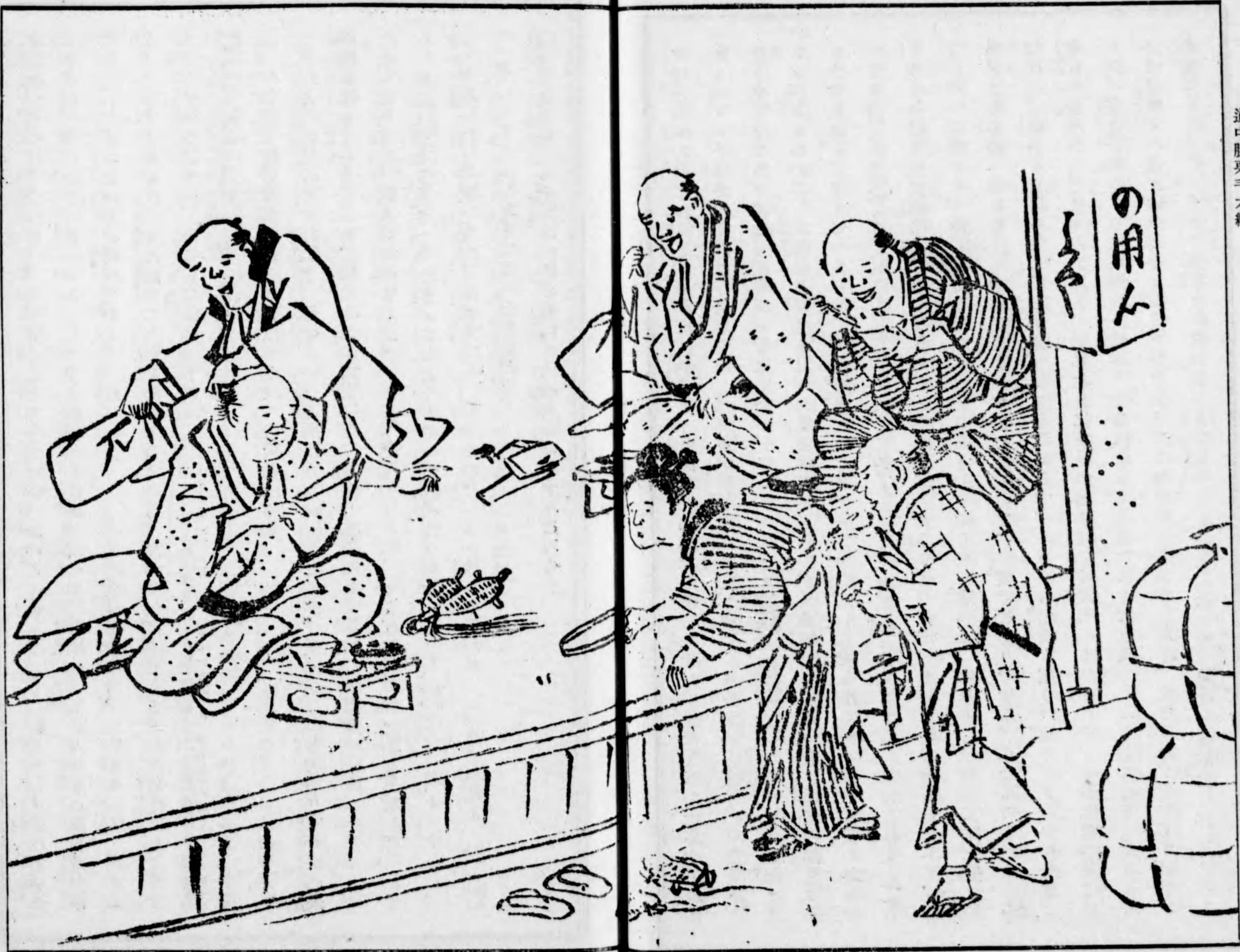
舟

呼びたつるに、何れの船にも、乗合の内、土手にあがりたるものども、いちどきにおりたち混雑し、彌次郎北八、やう／＼のことに人をおし分け飛乗りたるは大坂八軒家の登り船なり。此二人あまり船頭に呼び立てられて大きに狼狽へ、今まで乗つて来りし伏見の舟と心得、その次にならびてかゝりみたりし大坂の登り船に上りたるが、苦の内暗く、間違ひたる船とも心付かず。殊更此船にも乗合のうち堤にのぼりたる者も二三人あれば、それかと思ひて、船中にも互に顔もかたちも知れざれば、これを咎むる者もなく、そのうち船は出るに任せ、おの／＼背より咄し疲れたるにや、おし合ひへし合ひ、互に足をやりちがひとなし臥したりけるが、彌次郎北八も暗がり紛れ、其處ら探り廻はして、手ざはりよく似たればとて、人の風呂敷包をわが包と心得、引きよせて直にそれを枕として打臥し、それよりは前後も知らず高軒なり。さるほどに船は右に棹し左に綱引きのぼるに、早くも八幡山崎を後になし、淀堤を打過ぎ、夜も明け近くなりたる頃、伏見にこそは着きたりける。苦漏る影も白く、鳥の聲告げ渡るに、船着きたりと、乗合皆々目をさまし立騒げば、北八彌次郎も苦打開きて、笠風呂敷包を手引さげ、船頭が歩み板渡すを打渡りて岸にのぼり、船宿に至るに、乗合の人々つゞいて爰に来るを見れば、見知りたる顔一人もなし。是は不思議とそこらうろ／＼見廻しながら、彌次郎北八、おいらに酒を飲ませた隠居どのはどうしたの、北八さればの、そしてアノ長崎者や越後道者どもは来さうなものだが、大方爰へ寄らずにいつたと見える、おいらはゆるりと爰で支度して出かけようさ、トもとの伏見に着いたこと一向に気が付かず、船宿の女「どなたもお支度あぎよかいな、彌次郎オイ爰へ二膳頼みます、女「ハイ／＼、ト焚きたての飯に八は豆腐の平をつけて持つて人はじめたれば、こんなことは知らず、元よ、彌次郎は斯う致そ、是から長町の分銅河内屋とやらいふ宿屋へいつり大阪へ着いた事とはかり心得、平氣にてて、あれも大和の初瀬の茶屋でよこした書付の所だから、あそこへ泊つて、すぐに芝居でも見ようぢ

やアねえか、北八おいらアまた新町とやらを早く見てえ、彌次郎オ、それもまんざらでねえの、ア、アツ、ツ、どうてきに熱い汁だ、ベツ／＼／＼此傍にも船あがりの三四人連れ同じく仕度をしながら「太兵衛さん、おまい虎屋の饅頭はどうしたぞいの、太兵衛さん聞かんせ、けたいなこつちや、きのふわざ／＼あこ(彼所)へ行てかう(買)て来て、とんと大佛屋に忘れたわいの、つれづれ一走り取てごんせ、茲からわづか十里ほかないもせんもの、太ハ、ハ、ハ、さういうてもくれんがよい、ハ、ハ、ハ、此咄を聞いて彌次郎不思議さうに「モシあなた方が今云ひなされた虎屋といふは、たしか大阪でございやすね、六「さよちやわいの、彌次郎その虎屋のまんぢう忘れたとおつしやつた大佛屋とやらは何處でございやす、六「コリヤ新町橋西詰を南へいくとこぢやわいの、彌次郎その新町橋南へいく所迄は、爰からいくらほどございやすね、六「こゝからは十里ぢやわいの、彌次郎はてなア大阪は思ひの外廣い所だ、ノウ北八北八ナニサ、いゝかげんに聞いてゐなせえ、わつちらをひやかすのだけはな、爰から十里有つてたまるものか、途方もねえ、太「イヤおまい、此處を何處ぢやと思つてぢや、こゝは伏見の京橋ぢやがな、彌次郎ナニ伏見だ、コリヤ北八がいふ通り貴様達やア人をはぐらかすな、おいらアゆうべ伏見から船に乗つて来たのだけはな、太「何云はんすやら、桃山のけつね(狐)にがな、つまゝれたもんぢやあるぞい、みなこち退いてゐやんせ、北八のいて居るもすさまじい、そしておいらを狐憑とアなんのこつた、江戸つ子だぞ、つがもねえ、ト、いさくさなれば、此大阪のもの、連れと見えて二三人駈け来り

なんぢやい、何せりあうてぢや、そんな事より、こちやどえらい目に逢うたわいの、こつとらが包を船で失うたさかい、いんまのさきまで、そのせいらくしてをつたが、ねからはから知れんわい、ト いふうち一人が彌次郎の傍にある包を見つけ 「イヤ權介さん、あこにあるわいの、そぢやさかい、わしがいふまいことか、さきへあがつた衆を問うて見やんせと云うたぢやないかい こんホニこれぢやわいな、ト、取りにかかれ つとひか「コリヤ何ひろぐ、此包みはおいらがのだは こんナニぬかしくさる、おどれら、やばなこと働きくさるな、コリヤ見い、風呂敷の端にこちの名が書いてあるわい、ト、云はれて彌次郎がつくりし、よく見れば自分の包でなし。きもをつぶし て、彌「ホニコリヤ間違つた、ソレ戻すぞ、おいらがのは何處にある こん「あんだらつくせ、ナニおどれらが包みを誰が知るぞい 彌「こいつは詰らねえ、北八どうした 北「おめえおれがのも取つて一所に包んでそばに置いたぢやアねえか、どうしておいらが知るものだ 彌「ハテめいような、モシいよいよこゝは伏見に違ねえかね みなく「ハ、、、、何ぬかしくさるやら、アノ頼見やんせ、けたいな頼ぢやな 北「イヤこいつらは太え奴等だ こん太いも細いもいるこつちやないわい、たかでおどれらア奸盗ぢや、包みに別條無いさかい、ゆるしてこます、とつと、出て往にくされ 彌「コレヤアとんだ目に逢ふが、さつぱりわからぬ、北八どうしたのだらう 北「さればわつちも分らぬ、全體ゆるべは何日だつけ 彌「ム、かうと、ゆうべあの時分に月が出たから、大方廿四五日あたりだ 北「今月は大きか、

きのふは何の日だねえ 彌「されば、かうと、此間ソレ何處でか泊つた時、甲子だと云つたぢやアねえか 北「ソレ、あの茶飯はうまかつた 彌「ひらの牛蒡の大きさ、あいつは珍しい みなく「ワハ、、、、コリヤどうでも、てきらは本氣ぢやないわい、ワハ、、、、ト 腹筋をよつて大笑する。この中で、も年ばいの太兵衛暫く考へて「ハ、ア聞えたことがあるわいの、成程餘り賢うも見えんわろ達ぢやさかい、人の物手まへる(盗)ほどの働きはありやせんわい、コリヤかうぢや、コレ其處なわる達、ゆうべ伏見から乗らんして、途中で船のかゝつたとき、用たしにがな堤へでもあがらんしたことがあるがな 彌「左様でござりやす 太「ソレ見やんせ、こつとらが乗つた船にも、あの時あがりをつた人が大分ありをつたが、やがて船が出るといふと、皆うるたへて乗りをつた、其時こなん達は下り船と上り船を取り違へて、めんくの乗つて來た船と心得、こちの船へ乗らんしたものでがなあるぞい 北「ホニ左様でござりやせう、わつちらも船に乗つた時は、暗がりではあるし、取り違へたことは知らず、どうやら居所も違うた様でございやしたが、乗合の事だから、まゝのかはと、それなりに草臥れ紛れにツイ寝てしまひやして、今朝此處へ來て見りや、乗合の衆のうちに見知つた顔が一つもねえは不思議なことだと云つておやしたのさ 彌「さう云へば成程今のさき船のあがり場で、ハテ見たやうな所だと思ひやしたが、見た筈だ、やつぱり初手の伏見だもの、ハ、、、、畢竟それ故おまへ方の包みを、わつちらがのだと思つて鹿相致しやした 北「こ



れで物がさつぱり分つた 彌「イヤ分ることア分つたが、おいらが包みはどうしたらう 太「それも分つてあるわいな、おまい方の乗らした下り船に包みばかり残つて、今頃は大阪の八軒屋に風呂敷包みがうろくとおまい方を尋ねておよぞいな、ハ、、、 北「とんだ目に逢つた、いめえましい 彌「まよ、どうするもんだ、金は胴巻に入れて持つてゐるから、たかゞ包は手めえとおれが着代ばかりだ、うつちやつてしまへ、そこらは江戸つ子だは、ト、惜しけれども益方なく、これから又船に乗つて、大阪へ尋ねに行くも馬鹿々それにて、ぶらりくんと京街道にさしかかり、

伏見出て淀の車か又あとへまはりまはつて来たは何事

それより伏見の町を打過ぎ、墨染といへる所にさしかかりけるが、爰は少しの遊所ありて軒毎に長簾懸け渡したるうちより、顔のみ雪の如く白く、青梅の布子に黒天鵝絨の半襟まで白粉べたくつけたる女走り出で、彌次郎が袖をとらへ「もしな、這入りなされ、ちよと遊びんかいな 彌「なんだ、よせえく、ト、ふり切れば又北 女「おまいさんどうぢやいな 北「かうぢやいな、ト、ベつかこう 女「オ、すかん、こちや厭いな 北「厭いな三郎義秀でも、泊らんだ、エ、放しやアがれ 女「オ、こはト、おつばなし 彌「ハ、アこゝがあとで聞いた墨染だな、すみぞめのおやまのかほの眞白さは石灰藏のねすみごろもか

深草の里は家毎に焼物、土細工を商ふ見ゆれば、

やきもの、牛の細工に買ふ人も涎たらして見とれこそすれ

かくて藤の森に至りけるに、

稻荷山松のふぐりにかゝれるはふどしのさがり藤のもりかな

こゝに稻荷の社を伏し拜みつゝ、北「ナントそこらで一ツぶくやらうぢやアねえか 彌「よからうく、ト、眞禰たて懸けたる茶店「オヤ甘酒があるの、婆あさん一杯くんは 北「ハイ、温うしてあぎよわいな 北「コウ彌次さん、こゝの婆あさんが、おめえに氣があると見えて、アレこつちばかり見てをかしな目つきをすらすア 彌「馬鹿アいへ、婆あさんどうだ、早くくんは 北「まちつと待つておくれんかいな、ト、いひつ、此婆彌次郎の顔を見ては泣き、見えては泣きする故、不思議に思ひ 彌「婆あさんどうぞしたか、おめえ目が悪いのかね 北「わしやおまいの顔を見ていかう悲しうてならんわいな 彌「ソリヤどうしては「ワイ、北「こいつは可笑しい、婆あさん何が悲しいは「わしや此間一人の息子を失うたが、その息子にアノお方が似たとこそいへく 彌「ハアおいらに似たとかえ、それぢやアおめえの息子もいゝ男であつたらうに、惜しい事をした 北「ソレそのどうまん聲のものいひから、おまいの様に、やつとあらゝ痘痕があつて、色が黒うて、鼻は獅子鼻とやらで、目のいつかい所までが、其まゝぢやわいな、彌「それぢやア、わつちが顔のわるい

所ばかりが能く似たの 其わるい所ばかりも気がつえ、いゝ所は一つもねえもせんものを 其「そればかりぢやないわいの、アノ片小鬚の元げさんした所までが、あないにも似るものかいな 其「人の顔の店卸しが濟んだら、その醜を早くくんな 其「ほんに忘れたわいな、ト、茶碗二つにあまぎけを酌んでさしで 其「ごうぎに薄い醜だ 其「薄うも成りましたぢやろ、わしや悲しうてツイ涙をその中へ落したわいな 其「エ、とんだことを、涙ばかりならまだしも、見れやアおめえ水漬を垂らしてゐるが、それも此中へ落ちやせんかね 其「わしや見なさる通り三ツ口ぢやさかい、涙水と涎を一つに其中へ落したわいな 其「コリヤ情ないことをいふ、こいつはもう飲めぬ 其「おらアつい飲んでしまつた、いめえましい、サアいかう 其「婆あさんいくらだ 其「ハイ六文ヅ、下んせ 其「水漬はおまけたの、アイお世話、ベツ、ト、こゝをたち出てふり

線言に涙をませて水ばなもすゝり込んだるうばが甘酒
かくて二人は足に任せて辿り行くほどに、だん／＼都近くなりて、往來殊に賑しく、人の風俗も自然と温順にして、しかも衣装は花やぎたる女よそほひに、うつ／＼抜かして見とれ行くうち、早くも大佛前に至りて 其「オヤ／＼ごうせえなお寺だ、アレ山門の上から佛様が覗いてゐる 其「ハ、アこれがかの大佛だはえ、成程咄しに聞いたよりは、ごうてきなものだ、そしてこの石を見や、えらい／＼

大佛の御堂は雲に入るとてやこれは大きなもの、天上
かくよみて山門のうちに入り、やがて御堂にのぼりける。

東海 道中 膝栗毛 六編 卷之下

大佛殿方廣寺、本尊は盧舍那佛の坐像、御丈六丈三尺、堂は西向にして、東西廿七間、南北は四十五間あり。彌次郎きた八こゝに法施し奉りて、彌「ナント話に聞いたよりか、どうてきなもんぢやアねえか、アノかうしてござるお手のひらへ、疊か八疊敷かるげな、北「狸の金玉と同じことだな、彌「勿體ねえことを云ふ、そして、アノお鼻の穴からは人が傘をさして出らるゝと、北「ソレヤアまだしも人がさして出るからいゝが、己が方のぼうだら八が鼻の穴からは、瘡が自然にふき出したは、彌「馬鹿ア云ふな、お後へ廻つて見よう、オヤお背中に窓が開いてゐらア、北「あれは大方、汐を吹く所だらう、彌「ナニ鯨ぢやアあるめえし、北「オヤ、アレ皆が柱の穴をくゞつてゐるは、彌「ほんにこいつは奇妙く、ト、此堂の柱の下には丁度人のくゞるだけ切り抜きし穴あり。田舎「コリヤ面白え、併し己等はくゞれるが、彌次さんは肥つて道者共戯れにこれなくゞり抜ける、北八も同じくゞり、彌「おれだつて、ナニこれが、ト、北八を引き退け、四ツ道ひになつて、柱の穴へ體半分ほゐるから、抜けられめえ、彌「おれだつて、コリヤひよんな事をした、北「オヤどうした、抜けられぬ脇指のつばが横腹につかへて痛み堪へ、ア「イタ、、、、、コリヤひよんな事をした、北「オヤどうした、抜けられぬえか、彌「コレ手を引ツ張つてくりや、北「ハ、、、、こいつは可笑しい、ト、彌次郎が両手を、彌「アタ、、、、タ、北「弱え男だ、ちつと辛抱すればいゝ、彌「後の方から足を引いてくれる、北「承知々々、ト、後へ廻り、兩の足を捕へ、

又此方府中
一馬存

大福了
大佛
の
美
切
の
南



「ヤアえんさア〜 彌「アイタ〜 北「ちつとこらへなせえ、餘程出かけたやうだ、ヤアえんさアえんさあ 彌「ア、待つてくれ〜、腰骨が折れるやうだ、コリヤ矢張前の方から、引出してくれ、ト、云故、北八又前へ廻り、 北「ヤアえんさア〜、ソレ又此方へ餘程出て来た 彌「コリヤ堪らぬ、アイタ、、、、北八これではいかぬ、初手のやうに又後へ引き戻してくれ 北「エ、色々なことを云ふ、ト、又後から足「ヤアえんさア〜 彌「待つて〜、コリヤどうでも前の方から引いて貰はう 北「エ、そんなに前へ廻つたり、後へ廻つたり、引き出しては引き戻し、何時までも果しがねえ、コリヤいゝ算段がある、ト、傍に見てゐたりし 彌「モシどうぞ此方から引ツ張つて下さいませ、私が彼方へ廻つて足を引き摺り出しますから 彌「馬鹿ア云ふな、両方から引ツ張つては出る瀬がねえ 北「出る瀬がなくても、両方から引ツ張ると、前へ廻つたり、うしろへ廻つたりする世話が無くていゝわな 彌「コリヤいゝことがある、酔を一升も買つて来て、彌次さんおめえに吞ませよう 彌「なぜ、酔を吞むと、どうする 北「ハテ酔を吞むと、瘦せると云ふことだから 彌「コリヤハ、ハ、ハ、そんなこと云うたてゝ、今の間に合ふこつちやないさかい、斯うさんせ、何處ぞへ往て、槌借つて来さんして、頭を後の方へ打ち込まんしたが、よいわいの 北「成程こいつが早い理窟だ、併しそれでは命があるめえ さんけい「されば其處はどうも請合はれんわ

いのト、此内田舎 道者一人「コリヤハア氣の毒なこんだアのし、私はハア遠國のものだアから、あに(何)も知り申さねえが、ふと(人)の難儀さつせるこんだア、愚意のう云つて見ますべいか 北「どうぞあの人の助かることがあるなら、云つて聞かしてくんなせえ どうしや「ハアそれだアからのこんだアよ、何でもあのふと(人)の足の先きを切割つせえて、山椒粒のう、はさまつせえたら、ふとりでに突ん抜けばいのし 北「ハ、ハ、ハ、そりや蛇が女に見こんだ時のことだらう、どうせそんなことであらうと思つた さんけい「コリヤ私が智恵借そはいの、何ちやろと彼さんの體を和かにして引き出すがよかるさかい、斯うさんせ、土砂取て来てかけさんせいのなかも「すんだら、土砂のウ打つ懸けずと、一番の桶さア買つて来なさる、手足をちとべしをん曲げたら這入るべいのし 彌「エ、思えましいことを云ふ、無駄所ぢやアねえ、北八早くどうぞしてくれぬか 北「待ちなよ、ハ、アお前脇指の鍔が横つ腹へこだはつて痛えのだト、手を差し入れてひねくり回し 漸う脇指を抜いて取る 彌「いか様これでどうか寛ぎがあるやうだ 北「ドレ〜、イヤ、時にどなたぞ前の方から押し出して下さいませ、私が足を持つて此方へ引き出しますから、ヤアえんさア〜 彌「ア、痛え〜 北「しめたぞ、えんやア〜、ソリア出たぞ〜ト、出る奴がいけむから大笑ひだ 彌「ア、痛え〜 北「しめたぞ、えんやア〜、ソリア出たぞ〜ト、漸のことにて引き出せば、彌次郎大汗を拭き〜ほつと溜息をつきながら 「ヤレ〜有難え、コリヤどなたも御苦勞でございやした、わつちやア伊



勢の泊で産をしやしたが、産むよりか生れる身は、餘程せつねえ、コレ着物が摺り切れて、肋骨が今にひりくする。

傘さして出るお鼻より柱なる穴恐ろしや身をすぼめても

斯く詠み興じて大笑ひとりとなり、それより御境内をめぐり、蓮花王院の三十三間堂にて、

いや高き五重の塔にくらべ見ん三十三間堂の長さを

これより、この御門前を北へさして行くに、往來殊に賑しく、げにも都の風俗は、男女共に何處となく柔和温順にして、馬士荷歩持までも、洗濯布子の粘強きを、折りめ高に着なして、あのおしやんすことわいなと、なまめきたるも可笑しく、二人は興に乗じ、目に見る物毎に珍らしと、辿り行くうち、俄に往來騒ぎ立ちて、老若打ち交り走り行く人毎に「ホウホ、よいく、えつこらさつさ、ホウホ、よいく、えつこらさつさ」囃むしやうに人が駈けるは何だ、イヤ向うに何かあるさうで、凄まじい人だ、モシく何でございやすね 向うより来る人彼所にえらい喧嘩があるわいの 北「京の喧嘩も珍しからうト、足早に行きて見るに、見物山の如く、往來もならぬ位なるに、二人は人を押し分け、これを見れば、かの喧嘩の一人は肴屋と見當りのよき所に二人向合ひて、日さかなヤ「コレイノ、わが身の方から行き當りくさつて、そないなこと云ふもんぢやないわい、おのれのうてん（天窓）たや（打）いてこまそかい 相手職人「おきくされ、こなんが手

の動くのに、こちやちつとしておやせんわいと、云ひつ、手拭を丁寧に折りて鉢巻をする さかなや「よう願鳴らすわろぢやな、一體わりや(汝)何所の者ぢやい しよく人「己かい、おりや堀川姉が小路下る所ぢやわい さかなや「名は何と云ふぞい しよく人「喜兵衛と云ふわい さかなや「年齢は幾歳ぢや しよく人「廿四ぢやわい さかなや「おきくされ、おのれ廿四にしちや、えらう若い、嘘つきくさるな しよく人「何云ふぞい、ほんまぢやわい、前厄で今年噴めを死なしたわい さかなや「ソリヤ、えらい力おとしをつたぢやある、えい氣味洒したな しよく人「イヤそればかりぢやない、乳飲みくさる餓鬼奴があるさかい、えらい難儀な目に逢うたわい さかなや「そぢやあるわい、己や汝に二つ上ぢやわい しよく人「さう吐しくさりや、われも若い、家は何處ぢやぞい さかなや「一條猪熊通り東へ入る所ぢやわい しよく人「かいやい、あこに盲目で目の見えん寸伯と云ふ針醫があるがな さかなや「オ、針醫がありや、どうすりや しよく人「イヤこちの一家ぢやさかい、おのれ去にくさるなら言傳してこまそ さかなや「厭ぢやわい、何のわれが言傳、誰がいを(言)ぞい、えらい阿呆めぢやな 見物の人欠伸しながら「十兵衛さん、もう去のかい 十兵衛「待たんせ、今に打ち合ふぢやある 見物「イヤわしや家に客放つて置いて来たさかい 十兵衛「そしたら其お客連れてごんせ、序に薄縁など一枚くさんせんかい 又此方の方にある見物、軒下につく這ひ籠を抜き「見なされ、あつちやのわろが、どうしてもえらい奴ぢやわいな 見物「イヤこつちの男もえらい おとがひ「願ぢやわい 見物「ホンニその願で思ひ出した、お家はどう

ぢやいな、痛所はえいかいな 見物「ハイお忝なうござります、とんと快いやうであつたがな、昨日からえらう悪なつて、ツイ昨宵死にしましたわいな 見物「ソリヤおまい、御愁傷ぢやある、御葬禮は何時ぢやいな 見物「今出しをります所ぢやあつたが、えらい喧嘩があると、人が走るさかい、私もツイ往て見て戻るほどに、それまで待てと云うて、待たして置きましたわいのト、各氣の長い者はかり、悠々と見物「コリヤヤイ、まちつと此方へ寄りくされ、日向が無うなつて寒なつたさかい さかなや「オ、寄つたが、どうすりや しよく人「おのれ今己がことを阿呆とぬかしをつたが、何で己が阿呆ぢやぞい さかなや「阿呆ぢやさかい、阿呆ぢやわい しよく人「何ぬかしくさる、さう云ふわれが阿呆ぢやわい さかなや「イヤこちや阿呆ぢやない、賢ぢやわい しよく人「われが賢なりや、己も賢いわい さかなや「オ、われも賢いか、そしてたら此喧嘩止めにせうわい しよく人「サアひよつと互にせり合うて、着物でも引き裂いたら損ぢやさかい、止めにしてこまそうかい さかなや「えらう遅なつた、もう去んでこまそ しよく人「己もわれが去にくさる道ぢや程に、連れ立つて去んでくりよわい、今日はえい天氣ぢやあつたな さかなや「暖うてえいわいやいト、互に挨拶して、この二人連れだちて歸る。見物もこそくと彌次郎北八腹を抱へて「ハ、、、、成程上方者は氣が長い、あんな薄鈍い喧嘩が何處にあるもんだ 北「あの中で、損徳を考へて止めにしたから大笑ひだ。公家衆のいます都はおのづから喧嘩やめるもうたとよみなり

斯く打み興じ、早くも清水坂しみずざかに到るに、兩側の茶屋軒毎あふに煽あふぎ立てる田樂でんがくの團扇うすあふの音、喧かまひすきまで呼び立つる聲々「モシナお這入りなされ、茶々あがつてお出でんかいな」名物難波なんば餛飩うどんあがらんかいな、お休みなされ、彌なん何ぞ食つてもいゝが、もつと先へ往つてからの事にしようト、程なく清水寺に到り、境内をめぐり、音羽の瀧を見て

名にしおふ音羽ねむの瀧たきのある故か上りつめたる清玄せいげんの戀
 本堂は十一面千手觀世音なり。むかし沙門延鎮ぜんちんが夢中に得たる靈像れいざうにして、坂上田村麻呂さかのうえのむらまろの建立こんりふとぞ、北八彌次兵衛暫はやせんく此寶前に休みながら、

境内に植ゑし櫻は隙間なくとも澤山たくさんな千手觀音

傍たがひの小高き所に机を控へたる老僧、參詣を見かけて「當山觀世音の御影はこれから出ますぞ、誠に靈驗あらたなる事は、盲が物言ひ、啞の耳が聞え、歩いて來た慧えいが直る。一度拜する輩は、いかなる無病達者なりとも、忽ち西方極樂淨土へ救ひ取らんとの御誓願ぢや、どなたも戴いてお歸りなされ、冥加錢は澤山にお心持次第、御信心の方はござりませぬかな 北よく饒舌る坊主めだ、時に彌次さん、かの噂うはさに聞いた傘をさして飛ぶと云ふは、此舞臺からだな 僧昔から當寺へ立願の方は、佛に誓うて是から下へ飛ばれるが、怪我せんのが有難い所ぢやわいな 彌爰こゝから飛んだら、體からだが微塵みじんになるだ

らう 北折々は飛ぶ人がありやすかね 僧さよぢやわいな、えては氣の狂れたわろ達が來て飛びをるがな、此間も若い女中が飛ばれたわいな 北ハア飛んでどうしやした 僧飛んで落ちたわいな 北落ちてそれからどうしたね 僧ハテ根問ひするわろぢや、此女中は罪障ざいしょうが深いさかい、佛の罰で目を廻したわいな 北鼻は廻さなんだかね 僧イヤ瘡かさと見えて、鼻は無かつたわいな 北そして、氣がつきやしたか 僧氣がついて去んだわいな 北去んでどうしたね 僧さてくしつこい人ぢや、それ訊いて何さんすぞい 北イヤわつちが癖として、聞きかけた事は、金輪際聞いて畢はねば氣が濟まぬと云ふもんだから 僧それなりや云うて聞かそかい、それから其女中が全體其下地ぜんたいそのしたちもあつたかして、俄に氣が違ちがうたわいの 北ハテナ氣が違つてどうしたね 僧百萬遍を始めたわいの 北百萬遍始めてどうしやした 僧鉦かねを叩いて 北鉦を叩いてどうしやしたね 僧南無阿彌陀佛 北それからどうだね 僧南無阿彌陀ん佛 北コレサ、百萬遍の後はどうしやした 僧南無阿彌陀ん佛 北その後あとはよ 僧ハテ忙しない、百萬遍ぢやわいの、マア念佛ねんぶつ濟ましてからのこといの 北エ、その念佛百萬遍濟むまで、待つてゐるのか、途方もねえ 僧イヤこなさん、聞きかけた事は、根掘り葉掘り聞かんせにやならんと云うたぢやないかい、ま少と辛抱して聞かんせいな、退屈なりや、こなさん達も百萬遍手傳うて下んせ 北コリヤ面白からう、彌次さんおめえも此所こゝ懸けなせえ、サアく南無阿彌陀ん佛 僧とて



右 左
 右 左
 右 左
 右 左

桑田半
 巴二



古
 破
 一
 九

ものことに鉦入れてやるわいなト、無上に鉦を打「ハアなまいだア、チャンチャン 北「コリヤ、どうてきに面白くなつた、なまだア」 僧「わしや手水して来るうち頼みますト、北八に鉦を突き付け、何處へやら行「ハア、なまだア、チャン、チャン、チキチキ、チャン、チキチキ、手前鉦の叩きやうが下手だ、此方へよこせ 北「ナニ如才があるもんか、チャン」 「なまだア、チャン」 「ト、夢中に叩き立内陣の番僧出で来り、此 ばん僧「コレナ、わごりよ達は、どしたんぢやぞい、勸化所にあがつて、無作法體を見て喰をつぶし」 北「ハア今の坊様は何處え往つた、まだ中回向も済まぬうち 番僧「ナニ嚙語云ふなト、叱られて二人は心附 北「ハア今の坊様は何處え往つた、まだ中回向も済まぬうち 番僧「ナニ嚙語云ふのぢや、爰を何處ぢやと思つてぢやぞい 北「ハイ爰は清水、敦盛さんの墓所とけつかる 番僧「コリヤおのれ氣が間違つてをると見える 北「氣違ひゆゑに此百萬遍 ばん僧「ナニぬかしくさるやら、とつと」 出て去なんかい、爰は御祈願所ぢやぞト、聲高に云ふうち、勝手より樺突きて出で、追ひ 北「づくにうめが、とんだめに逢はした」

舞臺から飛んだ嘶は清水にひやかされたる身こそ口惜しき

此山内を下り行く先に、清水焼の陶造、軒をならべて往來の足をとどむ。此所の名物なり。

天道の恵みもあらんすゑもの師大日山の土を製せば

かくて、其日も早七ツ頃と思しければ、急ぎ三條に宿を取らんと、道を早め行く向うより、小便擔と

大根を荷ひたる男「大根小便しよ」 北「ハ、、、南瓜が笛を吹いた見世物は見たが、大根の小便するのは、つひぞ見た事がねえ彌「あれがかの大根と小便とつけえ(取替)にするのだらう 北「えと」 大根と小便しよ」ト、呼んで行く此方より、お中問「コリヤ」 私等二人が爰で小便してやるが、その大根三本おくんさいな 北「えと」 マア此方來てして見さんせト、此所の辻子へ二人を連れて行く。辻子は江戸でいふ新後より跟いて行き、 北「えと」 サアやらんせんかいなト、小便擔を卸し 一人の男「アリヤ私先やるわいなト、此擔の中へ二人立ち留り見れば 北「えと」 もう是限で出んのかいな 中問「うちどめに尻が出たから、もう小便はそれぎりぢやわいな 北「えと」 コリヤあかんわいな、ま一度よう體を振つて見さんせ 中問「ハテ小便くすねて置いて何せうぞえ、有りたけ醜んでのけたわいな 北「えと」 それぢや大根三本はようやれんわいな、二本持てかんとせ 中問「コレ小便は少なうても、こちとらのは、代物がえいわい、餘所の茶粥ばかり喰てをるのとは違つて、こちや肉ばかり喰てをるがな 北「えと」 それぢやて、餘りぢやわいな 中問「ハテやかましう云はんすな、家へ持ていんで、水交りやア三升許りにはなるぞいな、早う三本くさんせ」 北「えと」 知らないくせ」と云うたて、これにくさるもんぢやないわいな、そこらへ行って茶など飲んで来て、まちつとやらんせ」ト、ヤツつかへしつ云うてあるを、 北「モシ」 幸わつちが小便したくなつたから、無駄ながら、おめえ方に上げやせう、これを足して大根三本取りなせえ 中問「お心ざしはお忝なう

ござりますが、それぢやお氣の毒様ぢやわいな 北「ハテいゝわな、どうせわつちも有合せたもんだから、あまり輕少なれど 中間「さよなら、お小便戴きましょかいなト、小便擔を北八の前へ持 北「イヤ〜、矢張り夫に置きなせえ、わつちがのは一二間づゝ向うへ走ります、こえとり「コリヤきよとい〜、イヤお前のは地ではないわい、兎角小便は關東がよございます、地のは薄うて價値がない 北「もちつと早いと、まだ出たものを、わつちは生れついて小便近いから、不斷小便桶を首に懸けて歩いた男さ 中間「そりやお羨ましいこつちや こえとり「さよなら、お前此擔を首に懸けておいでんかいな、わしや何處までもお供して行こわいな 北「イヤ近頃は其やうにも無えのさ こえとり「お連様もあるさうぢや、モシお前も序に手水してお出んかいな 彌「イヤ私は前方は、一時に小便の壹斗や二斗する分は、根から苦にも思はなんだものだが、どうしたことやら、近年は小用づまりで薩張出ぬには困り果てる こえとり「ハア小用づまりなら、えいことがあるわいな、いつきによるこつちや 彌「どうするとよくなるの こえとり「アノ酒屋などで、酒の樽の呑口から思ふやうに酒の出んことがあるもんぢやわいな、そないな時は、樽の上の方へ錐揉みして穴あけると、直に下からシウ〜と酒が走るものぢやさかい、お前の小用のつまらんしたものも、額ぐちへ錐揉みさんしたら、直に小用が通じるぢやあるぞいな 北「ハ、こいつは出來た、時に遅くなつた、サア行きやせう、二人は引別れ行く向うの方より被衣を着たる女の二三人連れ、さすが都女の風俗しなやかに、いづれも色白く透き通るばかりの代物北八現を抜

して「ヒヤア〜、生きた女が来る、綺麗〜 彌「冗談な女どもだ、皆着物を被つて来るは 北「あれが被衣と云ふものなの、アノ美しい奴と、己が物を云つて見せようかト、ヤがて彼の女中の傍へ走り行きて「モシ、ちと物がお尋ね申したい、これから三條へはどうまゐりやすねト、聞くに此女中御所方と見え「わが身三條へ行きやるなら、この通りを下がりやると、石垣と云ふ所へ出やる程に、それを左へ行きやると、ツイ三條の橋ぢやわいなト、一體御所方の女中は、人を何とも思はず、ちと利いた風の男と 北「ハイこれは有難うござりやすト、何も知らねば禮を云つて暫く 北「彌次さん、アレヤア何だらう、ごうてきに大風な女共だ 彌「ハ、とんだ安く取扱はれやアがつた、ごふさらしめト、それよりヤがて彼の石垣と云へるを打過ぎ、左の方へと教へられたる道筋を三「モシ〜、しか谷の方へはどう参りますな 北「ハア汝しか谷へ行きやるなら、此通りを直に行きやると、ツイしか谷へ出やる程に、ソレ轉んだら起きて行きや、牛の糞を踏ん附けたら、遠慮なしに拭いて行きやれ わうらいのハイヤ此奴、ぞんざいな物の吐しやうぢや、こゝなあんだらめが 北「ナニあんたらとア何の事だ、道を聞くから教へてやるのだけは 往來「イヤ細言吐すない、どたまにやしてこまそかいト、此男の見えたが、二三人立ちかゝるを見れば、いづれも見上ぐる如き大男ども、腰に長脇指を横 彌「こいつは生酔だ、物言ひ恰好、いか様にも各角力取らしき者共なれば、北八忽ちしよげかへりて 彌「是から此三條に



宿をとらうと云ふのでござりやす、すまふ何吐すぞい、此三條にとは何のこつちやい、こつとらは今
 三條の編笠屋から出て来た者ぢや、こゝは五條の橋ぢやわい、彌ヤア爰は三條ではござりやせぬか、
 ソレ見や北八、先刻の女共が、とんだすつぽかしを教へやアがつた すまふ貴様達はどつから来たのぢ
 や、彌清水の方から すまふワハ、ハ、ハ、ハ、てつきり狐にがな、つまゝれくさつたもんぢやあるぞい、え
 らい暇費しな、ほつて置け、さりとて阿呆な奴らぢやナ、ト 打ち笑ひて行き過ぎる。彌次北八は思ひも寄らず五條
 行燈軒毎に照し、三味線の音賑しく、ぞめき唄に煩被せし男共のちらつくに紛れて覗き歩く。この所は五條新地とて、少しの流れを酌む遊所なり。家
 毎に門の戸を開てたるが、番戸ばかり開きて門口に立ちたる女の、さ、やかなる聲して、モシナ、彌ナント北八、こゝはおやま屋
 と彌次郎が袖を引くに振り返りてくゞり戸の内を見れば見世つきのおやまならび居たりけるにぞ
 と見えるが、いつそのくされに今宵はこゝに泊はどうだ、北奈何様何も荷物はなし、まんまほしにそ
 んな事も野暮でねえ、女サア這入りんかいな、彌這入ることは這入らうが、こゝはいくらだ、女オ、
 かたやの、お泊りなはるかいな、彌勿論さ、女まだ初夜前ぢやさかい、七夕づゝおくれんかいな、北上
 方のお山は直切つて買ふと云ふ事だ、半分にならねえか、彌何かなし、四百づゝなら泊つて行かう、
 それで出来ずば御縁がねえと諦めようさ、女よござります、お這入りなされ、北それでいゝの、丁度
 おやまさんも二人あらアト、この家へ上ると、女が二階へ案内するに、屋根「あいたしこ、北」どうした、女「オホ、
 裏の低き二階にて、彌次郎頭をこつたり
 ホ、お危うござんす、ト 煙草盆を持つて来る。此内おやま、二人、一人名は吉彌、今一人は金五、いづれも大織細綿やらの著物に黒天鰐絨
 の半襟、梁のつかへる程低き二階をしゃんと立つて歩くしるもの、片手に著物の袂を横の方へ引あげて来りオ、し

んど、云つ 北「とんだ暗い行燈だ、サアもつと此方へ寄りなさんか 吉彌「お前さん方は、どこぢやいな
 て坐る 彌「されば、どこやらであつた 金五「オホ、六角の朝市にこないなの方がよう見えてぢやが、訛つ
 てぢやさかい、大方旅のお方ぢやあるぞいな 吉「六條様へお出でたのかいな 彌「マアそこらのものよ、
 吉「モシナ酒一つあがらんかいな 彌「さうさ酒が早く飲みてえの 吉「さう云うてやるかいな、お肴は
 何にせうぞいな 金「角の鮓がおいしいぢやないかいな 吉「わしやナ、かちんなんばが、えいわいな
 彌「かちんでも家賃でも頓着はねえ、早くしてくんな 吉「いつきに参じるわいなト、
此おやま酒肴をいひつ
けに下へおひる。あと
に残りしおやまは、此内帯の間から鏡を出し、行燈の傍へより、顔を直す、やがて下よ 「なんだ大平が人別割とは珍しい、京は
り鏡子盃を出し、大平が一人前に一つづ、廣蓋に載せ持ち出す。彌次郎肝を潰し 「なんだ大平が人別割とは珍しい、京は
 あたちけねえ所だと聞いたが、こゝらは又どうせえだ 北「四百には安いもんだト、
此二人は酒肴も肴も揚代の四
百の中だと思ひ、わしやう
に安いと誓 金「サア一つあがりなされ 北「始めようオト、、、ひらは何だ、ハ、ア葱に半平は聞えた
 が、こつちでは半平を焼くと見えて、眞黒に焦げておらア 吉「オホ、、、ソリヤ歌賃ぢやわいなト、
これは上方にてする難波餅とて煎をいれたる難煮餅なり。此おやま下戸と見えておの
れが好物ゆゑ、客に勧めて取り寄せたるなり、北八かちんといふことを知らず 「ハアかちんといふは聞いたこともねえ、
 どんな肴だの 吉「オ、笑止、あも(餅)ぢやわいな 北「ム、鱧か、ドレ、ヤアこりや餅だ、
 彌「おきやアがれ、上方者は氣が利かねえ、酒の肴に餅とはどうだ、是で酒が飲めるものか 金「外の
 お肴いうて参じようわいなト、
すぐに下へおひたるが、ほどなく井物を持つて来る。中には上方に流行る
鳥貝の餅なり。此おやまの好きと見えて此餅をいひつけやりたるなり 北「なんだコリヤ馬

鹿貝の剝身を鮮につけたのだな 金「鳥貝のすもぢぢやわいな 彌「出す物も、變ちきな物ばかりで、
 もう酒も飲めぬト、
此内無駄も色々あれども略して、こゝに蒲團を敷きならべ、腰屏風にて間を劃る。
此うち四十ばかりの女、この女房と見えて、揚代を取りに来り屏風をあけて 「お許しな 彌「オイ
 だれだ 女「ハイお揚代を頂きに参じましたト、
書付をいだし、彌
次ひらき見て 「なんだ四百ツツ八百の揚代は聞えたが
 四匁かちんなんば、二匁すし、壹匁八分御酒、五分蠟燭、メて十六匁三分、コリヤとんだ咄だ、雜用
 は別に取るのか、おらア又酒も肴も揚代のうちかと思つた、コレ、北八この通りだ 北「ドレ、
 なんだコリヤおめえ方ア、わつちらを他國者だと思つて酒代を別に取るさへあるに、ごうてきに高え
 もんだ、此四匁かちんなんばといふは、アノ大平の事か、餅ならたつた三ツ四ツ入れて葱のちつとば
 かりさらへ込んだものを、壹匁づゝとは、成程京の者はあたじけねえ、氣の知れた根性骨だ、蠟燭ま
 でつけることアねえ、こんな物はまけにしておきなせえな 女「オホ、、、京の者を悪つおしやんす、
 おまいさんがしゆみ(吝)ぢやわいな、五分許りの蠟燭代、まけいなんのと、おしやんすことはない
 わいな、そして皆あがりなされた後で、高いの安いのと、おしやんしたて、あかんこつちやないか
 いな 彌「エ、面倒な、ソレ壹分持つていきな、はした位はまけなせえト、
金一分はふり出してやる、女房ふ
せうとつて下へおひると
彌次郎あつけにとられし
顔付、ぐにやりとたり 「ア、とんだ目に逢つたノウ北八 北「併しおらア惜しくねえ、どうかおつにもてさ
 うな鹽梅だト、
此内北八のあひか
た吉彌來りて 「オ、しんきやの、あこにわたし一人置かんして、此處に何してぢやぞ



あつはな
年寄の
佳景
まると
さう
浦志
まき
おれ
かき
山
嵐雪



いな、サア休やすみんかいなト、手を取りておのが方へ北「コリヤ〜おれが帯を解いてどうする、ト、聞きえる様に聲こゑを引ひこかし女北八「よいわいな、今宵こゝろはいこう暖ぬくいちやないかいな、おまいさんちつとしてゐなされ、わたしがあぢようするわいなト、すべて上方筋のおやまと初対面から帯紐を解きて打ちとけたる體に客をもてなすこと、まだまれる掟の如し。中にも此吉彌は大年増にて如才のなきしろもの、北八に着物を脱がせてはふり出し、おのれも帯を解きてきた八におのが着物をうちかけ、さながら深き馴染の如く打ち解けたる體にもてなしけるゆゑ、北八うつ、を抜かしてうちふしけるが、夜も次第に更けゆくまゝに、犬の遠吠のさみしく、時の太鼓もはや丑の刻ばかりなるに、吉彌目さめし様子にて「モシナモシナ、よう寝ねてぢやな北ア、ム、なんだ〜吉わしや手水てうづにいて来るぞえト、起きあがりたるが枕もとに物ものをきて帯おびを「おまいさんの着物きものちよと貸かしておくれや、わしやこれ着て殿達とのたちのふりして、下の衆しゆをだまひきしめ北「おまいさん、似合にあつた、奇妙きまう〜吉頭つわりがこれぢや、あかんわいなト、手拭を取つて打ち被り、下へおりたるがして來きまそわいな北「よく似合にあつた、北八はそれより寝もやらず、待てど暮せど、かの吉彌は一向に來らず。さては外に客にも有るやと、暫く待ち居たるに、は「どなたぞお呼よびなされたかいな北オ、此處こゝだ〜、コレわつちがおやまは先刻さつき下へおりたが、それなりで顔出かほだしもしねえ、ちよつくり呼んでくんなせえ、女サア、そのこと下は大騒おほさわぎでござんすわいな北な北「〜女アノおやまが男おとこのきりもん着て走はしつたさかい北ナニ走つたとは、逃にげたのか、ソリヤ大變たいへんだ〜、その男おとこの着物きものといふはおれがのだ女かいな、ソリヤ又何またなんとしておまいさんのを着て行いたぞいな北イヤ下へいつて、みんなをだまして來るから貸かして呉くれろと云つたによつて女それで貸かしなかつたのかいな北さうさ、時にそのおやまの駈落かけおちしたは、こつちにヤア知らねえこつたから、何

でもこゝの抱かかへ違ちがへはあるめえ、着物きものは是非せひとも爰こゝの内うちからどうぞして貰もらはにやならねえから、下へさう云つてくんなせえ、早はや〜女「マアなんに致いたせ、そないに申しませうト、下へおりて行くと、程なく此どてらを着たる、やつくりとせし大男、料理番男ども二三人引連れ、「コレ吉彌きちやに着物貸かしたといふわろは、こなはんかいどや〜と二階へ來り、亭主北八が枕もとに立ちほだかり「コレ吉彌きちやに着物貸かしたといふわろは、こなはんかいな「北オ、おれだ〜、ていしゆ「おどれかい、ほてくろしい事ことさらしたな、マア起おきくされ、ドレ面見つらみせさせ北イヤこの才さい六むめらは、何でおれをその様やうにぬかしヤアがるていしゆ「ぬかしたがどうすりヤア、おどれ吉彌きちやめにきりもん貸して駈落かけおちさせをつたからは、行先ゆきさは知つてけつかるぢやある、ありていにほざき出いしくされ北「とんだことをいふ、なにおれが知るものかていしゆ「イヤ〜そないにぬかしさらしても、われが人に頼たのまれて糸引いとひきくさつたに違ちがひは無いわい北「コリヤきさま達たちはおつひに言ひひかけをするなていしゆ「願ねがた〜かすな、しよびき下くだせト、皆々立かゝり、北八を手込めにする。このどきまきに彌次郎目を覺し、この體を見て勿ね起きとんで出で「コリヤおれが連つれだが、うぬら此男このおとこをどうするト、亭主をつきの料理番りやうばん「イヤこなやつも同盜どうさうぢやある、二人共にひつく〜れト、いづれも小力ある者ども、彌次郎北八を兩方から引きたて、下へおろし、ほそびきを持つて、遂に二人をぐるぐやまりを後悔し疑受けたる上、かゝる目に逢ひ口惜しけれど、理の當然に言譯立たず、慶所の柱に繋がれたる面目なき、ことに「十吉じき「わしや夜もあけはなれて近所の者ども追々見舞みまひに來るうちに、これも此商賣屋しやうばいの亭主ていしゆと見えて、少し小口こぐちでもきかるといふ男、名は十吉「わしや今聞いまきいたが、吉彌きちやめがきよとい事ことさらしたげな、その手引てびきした奴等やつらはどしたぞいなていしゆ「あこにくくつておいたわいの十吉「店主たなぬし呼んで預あづけさんせていしゆ「旅たびのもんぢやて、嘘うそつき晒さらして、ほんま

のうちを得言はんわいの 十吉ソリヤ氣の毒なもんぢやわいと、二人が縛られてる 傍へ来り 十吉コレこなん達は悪い合點ぢやわい、ソリヤはて、友達づくなら頼まれまいもんぢやないが、もうこないに露顯れては、しよことがない、有りやうに云うて、めん／＼の身ぬけするがえいわいの 彌イヤわつちらは、からきし何も知りやせん、たゞ此男がほんの洒落に着物貸したばかりで、疑ひ受けたと云ふもんだから、どうぞ貴方のお取做しで、わつちらを助けて下さいませ、コレ手を合せて拜みたくても縛られてゐるから、足を合せて拜みます、コリヤ／＼北八もお頼み申せ 北ハイ南無金比羅大權現様、此災難を免れます様に、南無歸命頂禮／＼ ていしゆ「エ、何ぬかすぞい、金比羅様祈るなら、そないなこつちやきかんわい、幸 おどれ裸でをるから、水浴びせてこませ、垢離とつて祈りくされ 北イヤわつちは全體金比羅信心でござりやすが、是まで願をかけやすに、人と違つて水を浴びて寒い目してはきゝやせぬ、なんでも着物をたんと着て、穀汁に熱燗をひつかけた上、巨燧へ首ツきりのたくりこんで願ふとすぐに御利生がござりやすから、せめて着物は着すとも一杯熱くして下さりませんか ていしゆ「エ、尻ねづりくされ 彌イヤ御尤でござりやす、わつちこそは此男めがまきぞへ、ほんの災難、そしてこんな目に逢ひますと、持病の癩が差込んで、アイタ、／＼、 ていしゆ「癩が痛いなら、胴中の繩をもちと堅う締めてやるかい 彌イエ／＼わつちが癩は甚句踊ると治まりますから、どうぞ此繩解いて下さりま

せ 十吉「ハ、／＼、コリヤねからやくたいな奴等ぢやわい、勘太さん許してやらんせ、たかて敵等はえらい阿呆ぢや、成程吉彌めにたらされくさつて、きりもん貸した迄のこつちやあるぞいな ていしゆ「サINA、そないに云はんすりや、いかさま賢うも見えんわる達ぢや、別しての事もありやせまい、去なしてやるかいな 北それは有難うござりやすが、わつちやア此裸の儘では歸られやせん ていしゆ「いなれざ、去なんすなく、こちにも言分があるさかい 北イヤそんなら、めえりやせう 十吉「サア／＼去なんせ、あだあほらしい衆ぢやわいなト、二人が繩を解い 彌北八手めえのお蔭でとんだ目に逢つた、 北おめえよりか、おらア此通り着物をとられてハアくつまめ、オ、さむさむ ていしゆ「ハ、／＼、あんまり可憐さうぢや、何なと一枚くれてやるかい 北有難うござりやす、どんな物でも、どうぞ頂かして下さいやせ ていしゆ「エ、みだれめ(乞食)がいふやうなことぬかしけつかる、てきに似合うたやうに納屋の菰一枚もて来てやれやい 下男「イヤこゝに昨日の依がある、これ着ていかんせ 北「ナニそれを着るとか、エ、情ないことをいふ ていしゆ「折角のおれが志ぢや、着ていなんかい 北ハイ有難うござりやすが、私は矢張裸が勝手でござりやす 彌外聞の悪い男だ、おいらが合羽を貸してやらうト、彌次郎が木綿合羽をとつて 北八にうち着せながら

うとましや搔いたる恥も赤はだか合羽づかしき身とはなりたれ

果は大笑おほはわらひとりとなり、二人はやう／＼のことにて此所こゝをのがれ立ち出いでけるとなり。

東海道中 膝栗毛七編序

穆王むくわう八駿しゆんに御ぎよして王母わうぼが桃ももを甘あまじ、靈鷲りやうじゆの説法を聴くも、ひとへに名馬めいはの功によれり。こゝに彌次郎兵衛喜多八は、心の欲する所に随まひ、膝栗毛ひざくりげのりが来るまゝ、四方に奔走ほんさうして果はてもなきは、八駿にも勝まさりてたのしかるべし。かの生啜いけすき、磨墨するすみならば、八十うぢ川の争あひもあるべきに、人喰ひとくひ馬うまにも合口あひぐち同士どうし、勝手次第かたてしだいの道草みちくさは、これ此栗毛の徳ならずや。盡まきぬ趣向しゆきやうに七編しちへんの緒いとづらを、作者の乞こふに任せ、予も又乗のりかゝつて筆ふでを揮ふるふ事然ごとし。

文化辰春

龜山人蘭衣述



其角

其角

いんげん

いんげん

柳

東海 道中 膝栗毛七編 卷之上

或人の句に花尊都に本寺へ哉と詠みたりしは、實にも寺院堂塔の廣大無邊にして、其莊嚴麗秀なるいふも更なり。殊に花の春紅葉の秋は、東西南北に名たたる勝景の地ありて、加茂川名酒の樽とともに、人の魂を飛ばしめ、商人のよき衣きたるは他國に異にして、京の着だふれの名は、益西陣の織元より出で、染色の花やきたるは堀川の水に清く、釜もとのおしろい、川端の五倍子の粉は雪を欺き、御影堂の扇、伏見の團扇に、風匂ふ香堂前の粽、丸山輕焼、大佛餅、醍醐の獨活芽、鞍馬の木芽漬は、庭訓往來に著く、東寺の蕪、壬生の菜は、名物選に鼻高し。其外名産奇製の品物あまたある都に、たまへ入り込む騷客の兩人、彌次郎兵衛喜多八とて、拔詣の刷毛序にまぐれ出でたれども、淀川の下り船に門違ひして荷物を失ひ、五條新地の一ツ杯機嫌に早呑込して丸裸となりたる、きた八の名にも似ず、同行の彌次郎兵衛が木綿合羽を借着せしほどの仕合なれば、かゝる洛陽の地も面白からず、うか〜と新地戻りの朝風身にしみわたり、五條の橋にさしかゝりたるに、此所は古へ牛若丸の千人切したまふ所とあれば、きた八しを〜と打かたぶきて、かゝる身はうしわか丸のはだかにて辨慶じまの布子戀ひしき



かくて東にわたりて、河原院の舊跡門出八幡も直通りとなして、高瀬船の綱に曳かれて辿り行く道すがら、北「思へば、詰らねえことになつた、どうぞ古着屋でも見つけたら、どんなでも綿入が一枚欲しいが、彌次さんいゝ智恵はねえかの」彌「ナニ買はずともいゝにしたがいゝ、江戸つ子の抜参りに裸になつて歸るはあたりめえだは」北「それだつて、寒くてならねえ」彌「そんなら幸こゝに湯屋がある、ナントちよつくりあつたまつていかねえか」北「ホンニこいつは奇妙、彌次さんお先へありがてえト、一目散に或格子づくりのうちの暖簾をくぐりて、すつと入り、」彌「モシ、こなさん誰ぢやいな、何さんすのぢや、」ト、咎められて北八あたりを見、彌「エ、いめえましい、湯屋かと思つた」ト、湯屋かと思つた、湯の字があるさかい、それで錢湯かと思つてぢやの、アリアヤ濟生湯といふ、振出し薬の名ぢやわいな彌「ホンニこいつは大笑ひだ」北「また一倍寒くなつた、いめえましいト、」彌「いひながら行く先に、しみたれの古着屋一軒あり、店頭に古布子古裕吊しあり。きた八彌次郎兵衛を口説きて、布子一枚求めんと、件の店」彌「モシこのぬのこはいくらだね」彌「ふるてやのていしゆ」ハイ、こつちやへおかけなされ、コレお茶もて來んかいな、お煙草の火も無いわいな、赤いの一つ、ちやとくさんせ」北「イヤ茶も煙草も入りやせん、コレヤアいくらだといふに」彌「ハイ、そりや、きよとう善ござります、お安うしてあげうわいな」彌「ハイお茶あがりなされ」彌「長吉、そりやおぬるいぢやないかいな、なぜ熱いちや、」彌「茶」あげんぞい」彌「イヤお家さまが、朝は茶粥ぢやさ

かい、茶ちや焚くなとおつしやつてと御ざります、それは昨日焚いたまんまのちや、でござりますわいな」彌「いかさま、昨日のお煮花ほどあつて、とんと河童の尻の様だ、イヤ尻のついでに尾籠ながら御亭主さん手水に行きたい、おうらをちよつと」彌「ハイ、雪隠へお出でかいな」彌「せつちんはぬるうはござりませぬ、よう(能く)沸いてぢやあるぞいな」彌「ナニ雪隠を誰が沸かしたぞい」彌「それぢやて、今のさき、わたしが参じたさかい、すぐ、い(行)て見なされ、ぼつぼと煙が出てぢやある」彌「エ、むさい事いふ奴ぢや」北「そんなことより、此布子はいくらだえ、早く決めてくんねえ、寒くて堪へられぬ」彌「お寒くばもつとそつちやへ寄りなされ、そないによう日がさしてぢやわいな、昨日も着物買ひにお出でたお方が、コリヤきようとい(氣疎)ぬくい(暖い)うちぢやて、其處に一日日向ぼこしていなれ(歸)ましたが、そのお方がもう着物買うて着いでもだんない、毎日此處のうちへ日向ぼこしにこ(來)うわいなと、こない(此様)に云うてぢやあつたわいな、」北「エ、じれつてえ、コレヤア賣らねえのか、どうだ」彌「ハイ、かうぢやわいな」北「安くしてくんねえ」彌「その紺のおひえぢやなト、」彌「三十五匁、とんとぎり、ぢやわいな」北「高いく、わつちらは江戸者だが、古着は商賣柄で、いくらも取扱つて居るから、やるもんぢやアねえ、ほんたうの所を云ひなせえ」彌「ハア御商賣柄とあれば、おまい様も古着屋なされてかいな」北「イ

ヤわしは質商賣さ ていしゆ「質とあれば何かいな、お取りなさるのか、置きなさるのかいな、置くの
 が此男の商賣さ 北「それだから質に置く時の算用からして懸らにやア買はれやせぬ、此布子はどうし
 ても一メより外は貸すめえから、貳朱ばかりに買はにやア損がいく ていしゆ「何いひぢやぞいな、後家
 の質屋へもていても、金壹分は物言はず貸すわいな 北「とんだことをいふ、どうして壹分貸されやせ
 う ていしゆ「ナニ壹分つかん事はありやしよまいがな 北「それともおめえ直に請けなさるか ていしゆ「請
 けるわいな 北「さう云つても、あてにやアならねえ、それよりか此間の股引の出入はどうしなさる、
 そして拾の時貸しもあるし、それもおめえ、子供衆が脾胃虚して病つてゐるうへ、かみさまが疫病で
 死なれたけれど、佛かへて葬禮を出す工面が出来ぬと、たつてのお頼み故、貸してあげたものを、
 義理の悪い、いつそのこと、此布子はその拾のかたに只取つておきやせう ていしゆ「ア、これ申し、と
 つともう、やくたいもないこと云うてぢやわいな、わしが喉がいつ疫病で死んだぞいな、あたけたい
 なこと云はんすわいなト、亭主大きに腹立てる。彌次郎兵衛可笑しく「どうも此男は口が悪くてなりやせん、了簡しなせえ、
 そして何角と面倒な、その布子も壹貫にまけてやりなせえし ていしゆ「よござります、朝商ぢや、ま
 けてあぎよわいな、シヤンくく 北「まづは布子にありついたト、彌次郎に代錢を拂はせ、かの布子を着て彌次郎
 兵衛に木綿合羽をかへし、此内を出るとて腹藏
 を見れば、とちやとあ
 るに思ひよりて、



和藤内三貫あまりの古布子老ふるぬのこらう一くわんに求めこそすれ

それより北八は忽たちまちに元氣を得て「ナント彌次さん、すさまじからう、古着屋めをちやらッぽこで、はぐらかして、壹貫くわんに見おとしは安やすいもんだ、見なせえし、まだ袴はき垢あかも附かねえのを、彌紺こんの法被かんぽんと見えて、おいらがお供やうの様で、てうどいゝの、北きたとき、こゝらは何なんといふ所だの、ごうてきに粹せいなたば(女)がちらくするは、彌ハ、ア紫帽子むらさきぼうしの野郎やろうどもが見えるから、大かた宮川みやがは町といふ見當だ、北きた来るぞく、美しい妓おやまどもが来る、いゝ時おいらア着物を買つてよかつた、まんざら裸はだかの上にその木綿合羽もめんがっほぢやア、あいつらに擦れ違ちがつてもげえぶん(外聞)がわるい、俄はげに黒くろかき合あはせて、見えばりながら、ちがひ通れば、一人のおやま、振返り、きた八を見て「初音はつねさん、見なませ、あの人さんのきりもん(着物)におつきな紋もんが附ついてぢやわいな、オ、をかし、オホ、、、はつね、ホンにあほらしい人さんぢや、オ、好すかんやの、オホ、、、ホト打うわらひ行き過ぎる故彌次郎兵衛も心付いて「オヤく、きた八、手めえの着物きものを見や、背中せなかの横よに大きな紋所もんじやうがくつ付いてゐらア、北きた何處どこにく、ト、振返りてよく見れば、轡うまを船ふねに染めたる布子故、一寸見れば知れぬ、北きたコリヤ大變たいへんく、彌ハ、、、裾すその方かたには鯉こひの瀧たきのぼりが見えるから、こいつ幟のぼりのはぐらかしものだな、北きたエ、古着屋やめが、とんだ目に逢あはしやがつた、道理で安やすいと思つた、ぶんのめして来よう、彌ナニうちやつておきやれ、皆手みなてめえが笠かさ棒ぼうから起つたことだ、先は商賣しょうばいだものを、仕方しかたがねえ、北きたエ、いめえまし

い、ト眞面目まじめになりて、ぶやきながら、四條通りに出れば、名にし負ふ川東の生粋、祇園町の繁昌は両側の芝居、櫓太鼓を打「サアく、評

判ぢやく、今が三五郎の腹切ぢやく、此後があら吉と友吉が所作事、評判くく、ト、呼び立つる、江戸で火種と

八彌次郎兵衛が袖そでを引いて、北きた女をんな「モシナおまいさん方かた一幕見ひとまはてお出でんかいな、北きたいかさま、ナント彌次さ

ん、京の芝居しげも、ひとり見ようぢやアねえか、彌やま面白おもしろからう、女中、いくらで見せる、女をんなよござり

ますわいな、わたしがどうなとするさかい、マアお出でなされト、二人を両方の手にひっぱり、引連れて芝居へはひ

敷敷の前側へ入いれる。もつとも幕まくらの「昆布、宇治山く、饅頭まんぢうよいかいな「茶アあがらんかいな、茶ちや々ちやどうぢやい

な「番付、繪本く、彌やま「どうぎに大入だ、併しかし江戸の芝居しげの半分はんぶんでもねえ、北きたア、退屈たいくつだ、一杯飲いっぱいみ

たくなつた、彌やま「おらア腹はらがへりまの大根だいこんだ、菓子でも買つて食はう、商あや今いまみづから、宇治山、彌やま「なん

だ手づからうちやる、勝手かたてにさつせえ、商あや「饅頭まんぢうどうぢやいな、北きた「こいつがいつち分わかつてゐる、コ

レ饅頭まんぢう三ツ四ツくんせえ、商あや「ハイく、三文もんツ、でござります、となりさじきのけんぶつ「コレ饅頭屋まんぢうやさん、

どしたもんぢやぞい、こちの辨當べんたうへしつぶしぢや、商あや「ハイく、お許ゆるしなされ、彌やま「アイタ、、、ごう

ぎに足を踏ふんだ、商あや「ハイこれは、モシちとお許ゆるしなされ、北きた「コリヤどうしやアがる、人の頭あたまの上を

金玉きんぎょをひきすつて通りやアがる、エ、きたねえく、となりさじきの見ぶつ太郎兵衛「オ、權兵衛ごんべいさん、何買なにう

てお出でたぞいな、權兵衛ごんべい「太郎兵衛さん待つてぢやある、わしや今あこの棧敷せきでな、氣疎けうとう甘あまいもの喰く



芝居の四糸鴨川
 子東のあり永禄
 年中不江戸の浪
 人名古屋
 三左衛門とらふり出雲の
 お國とらふり流女とかきり
 歌年妓と名付て男を左衛門
 狂言とまきと北野の森祇



芝居の南の抹五冬河原で
 奥行しき後中
 絶して美後二年は村山又まはし
 つるの四糸うら中道あり
 再興し又獨手四冬めわし
 うらし死す子寛久
 毎年今の地子
 うらし
 常芝居とあり

てぢやさかい、ソレ見てゐて、おそなつたわいな、サア〜こない（此様）なもんぢやト、竹の皮づ、み
 太郎兵五「ハア鯖の鮮もじかいな、コリヤきよとい〜、その飯は辨當の代りにして、肴は剝して酒の
 肴にさんせ、それがよいわいな 権兵五「さよぢや、竹の皮はもていで、草履の鼻緒たてるわいな、イヤ
 ときに一盃やるかいなト、小さな猪口を取出し、風呂敷に包みし徳利より「彌次さん見ねえ、甘さうに飲みをるが羨
 ましい 彌、エ、いめえましいことをいふ男だ 北「コレおぼろさん、おまん（饅頭）一つあげやせうト、
 おのれが食ひ残した饅頭一つ隣棧敷の子どもに遣る。 太郎兵五「コレハお有難うござりますわいな 北「おめえ方ア、よい
 これにて脚をつけて酒を飲まうといふ下心なり
 物をあがりなさる 太郎兵五「お前も御酒はお好きかいな 北「左様〜、飯よりは好物さ 太郎兵五「ソリヤ
 よいお楽しみぢやはいな、コレ権兵衛さん、も一つ頂こかいな、オト、、、コリヤ美しい酒ぢやな
 権兵五「さよぢや、ホンニお隣のお客、御退屈ぢやある、是れなと一つあがらんかいなト、茶碗をさし出
 取るより早く「ハイ有難うございやす 太郎兵五「併し冷めはせんかいな、モシお銚子ごとそれへあぎよはい
 頂きて 北「茶屋の土瓶をきた八に渡せば、もつけな顔して 北「エ、茶ださうな、ベツ〜 太郎兵五「おぬるなつたぢやある
 なト、うけとり、ついで飲めばぬるい茶なり 北「エ、業晒しな 北八小聲に「いめえましい、饅頭一ツ棒にふ
 北「とてもぬるい序にどうぞ是へ其徳利のをうめて下さりませ 太郎兵五「これはしたり、コレ見なされ、
 こないになつたわいなト、徳利を逆にし 彌「ハ、、、業晒しな 北八小聲に「いめえましい、饅頭一ツ棒にふ
 つたト、ぶつ〜口の内にこぼといひながら、ふ「カツチ〜 見物「イヨ口上さまア 口上「東西〜 拍子木「カツチ

カツチ、ト、此内口上も濟み幕 たいこ「テン〜、テレツクテン〜 拍子木「カツチ〜、カチ、、、三味ツ、テ
 ン〜〜幕開くと、花道より仕出しの役者大勢出ると見物の悪口「イヨ大根ウ、十把一からげぢや 北「ナニ大根とはアノ役者のことか
 何のこつた 見物「ヨウでけますの 北「ありがてえと申しやすト、此北八至つて芝居好き故、幕があくと夢中となり、なにかももち忘れて、むしやうに大きな聲してほめる故
見物みな〜可笑しが、き 北「ヨウ〜大根め〜此大根といふ事は、上方にては役者の下手なものを大根といふ。北八その譯は知らず、人が大根〜といふを、きいた風に役者さへ見ると、大根〜と呼び立つるを、
見物北八を小馬「イヨ盲祿さまア、トきた八を笑ふ。上方にて盲祿といふは江戸にていふ折助といふ事なり。きた八紺の布子を 北「彌次
鹿にして さん聞いたか、こつちの役者にはいろ〜の變ちきな名がある、大根だの、盲祿だのと、よもや俳名
 ぢやアあるめえ 彌「大かた役者の仇名だらう 北「そんなら今出た役者が盲祿だな、ヨウ〜まうろく、
 ありがてえぞト、いふと見物にどつと落きて、狂言は見ずに、き「イヤ向う棧敷のまうろくさま、大出来〜 見物「阿
 呆よ〜、向う棧敷のまうろくの阿呆ヤアイ 北「なんだ向う棧敷のまうろくたア、なんのこつた、涙
 つ垂しめら 彌「ハ、、、はなつたらしたア手めえのこつたは 北「なぜ〜 彌「上方で盲祿といふは折
 助のことだは、手めえ紺の法被を着てゐるから、それで皆に冷評されるのだは 北「エ、さうか、そん
 なら疾くにさういつてくれ、ばい〜に 見物「あほよ〜 北「イヤこいつらは太え奴等だト、むしやうに力
なく騒きたち、喧嘩よ〜と大騒動となると、棧敷番四五人來り、北八をとらへ引出さんとす 見物「コリヤどうする 北「おまい狂言の邪魔になるわいな、こ
 ちごんせ けんぶつ「そいつ早ういなせヤイ 北「何ぬかしやアがる 北「ハテよいわいな 彌「コリヤきさ



あつめ
き
うら



さ
く
き
く
山
の
き
乃
なめ
し
日
も

井どんぶりはいくらだときいたら、五分だと云つたぢやアねえか、そして硯すずりぶたはといへば、二匁五分だといふ、よし、大平おほひらが三匁、よし、此鉢かみはと聞いたたら、これが三匁五分と、きさまが云つたに違ちがえはあるめえ、そこでべた所が拾貳匁五分、渡したから言分いひぶんはあるめえ、ウオホ、、、ようぢやらぢやらと、串戯てんごういふお方かたぢやわいな、オホ、、、彌イヤ、オホ、ぢやアねえ、ほんたうに持つてけるト、まじめになつて風呂敷ふろしきに包ままう、「モシナ、わたしの云うたは、お肴さかなのことでござりますわいな、彌ハテ肴さかなの直段なげだんきく氣きなら、此硯蓋すずりふたに盛すつてある肴さかなはいくらだときゝやす、それを此硯蓋すずりふたはと云つたら、貳匁五分だと云つたぢやアねえか、ウそぢやてて、それがまあ、彌ナニ、いさくさがあるもんだト、カツツ、かへしつ云ふところへ委細わいさいをきいて前垂まへたれしたる男おとこ、勝手かたてより出て、「ハイこれはあなたの御尤ごようも、よござります、お持ちなされませ、その代り道具だうぐの代物は頂きましたが、あがつたものゝお拂はらひは、まだ頂きませんわいな、それを御勘定ご勘定下さりませ、彌成程なりほど、食くつた物は高たかが知れてある、拂はらひやせう、いくらだ、男ハイ七拾八匁五分でござりますわいな、彌途方とほうもねえことをいふ、おいらを盲めくらだと思ふか、コレエ、たつた五百か六百が物を食くはせて置いて、大だいそれたことをぬかしやアがる、男イヤ私方わがはでは何ぢやあると、お肴さかなは大坂おさかから歩あ行ち荷にで取り寄せますさかい、駄賃だちんがえらうかゝりますわいな、彌肴さかなはそれにもしてやらうが、青物あおものは高たかが知れてある、アノ初はつめに出した菜さいのしたし物ものはいくらにつく、男ハイあれはな七匁五分、彌ヤア

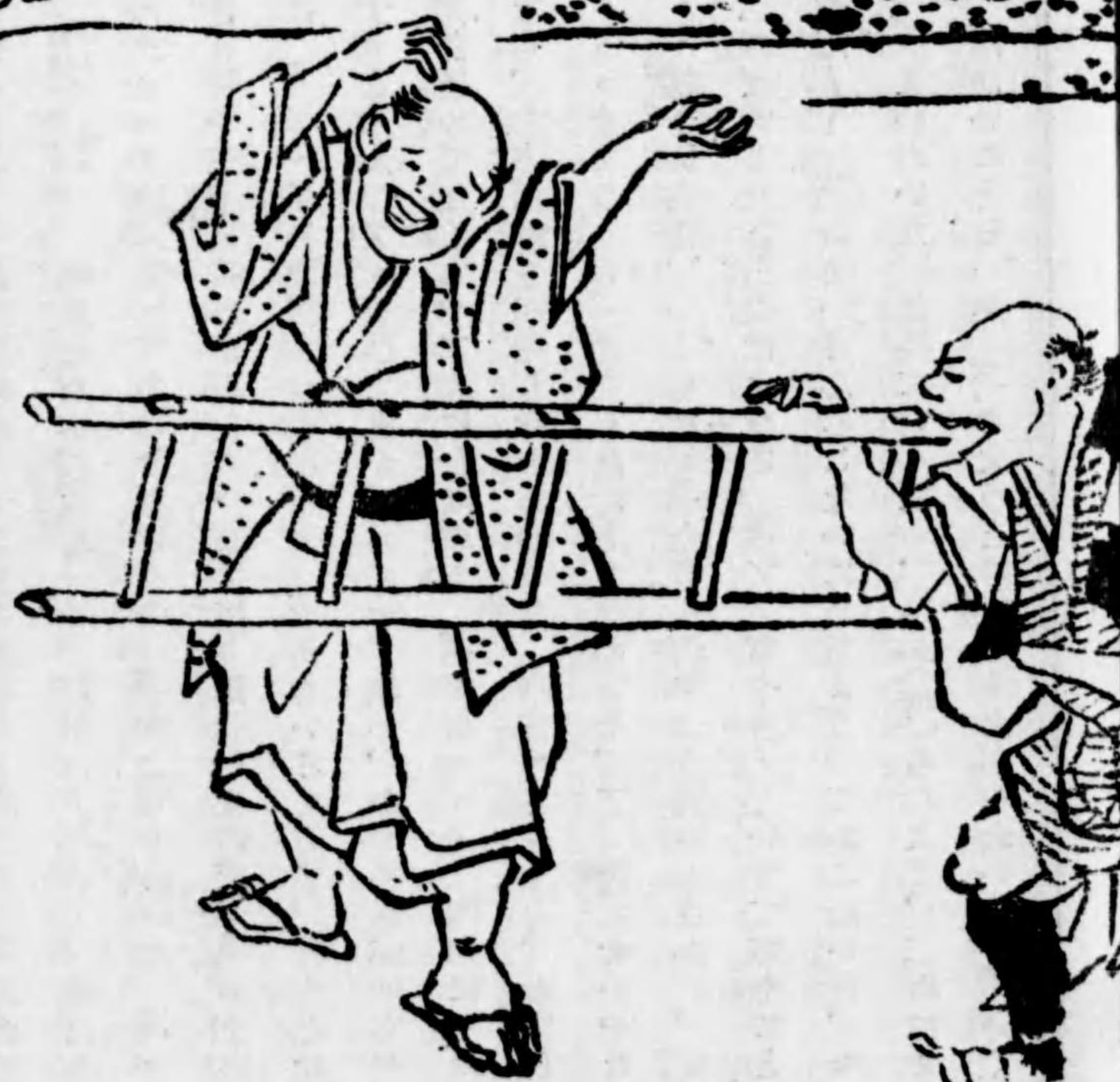
あれが七匁五分とア、あんまり人をうつむけにしやアがる、三文か四文が物だ、男そないにおつしやりますな、ありや京きやうの名物ななつもので、東寺菜とうじなと申まをしますわいな、私方わがはでは別に作つくらせまして、虫むしの喰くた菜さいは除のぞけますわいな、そして莖こも太おとい細ほそいの無いやうに選出えりだしてあげるわいな、穢けいお咄はなしぢやが、糞くそも絹きぬごしにしてかけますわいな、彌とんだことを云ふ、そんなことがあるもんか、何でも食くつたものゝ代しろは二朱にしゆばかりやらう、男イエ、さよぢやなりませんわいな、ハテ高いと思召おもうすなら、食くつた物を残のこらすお戻もどし下さりませト、此一言このことに困こまり、彌次やじ郎兵衛らべゑやつきとなりてせりあつた所ところが、此エ、面倒めんどうな、彌次やじさん、はじめらねえぞ、彌いまましい、云いひ分ぶんがあれど、勘定勘定づくで恰好かつかうがわりい、了簡りょうかんしてやらう、よく覺おぼえてゐやアがれト、此所このところを出でつれば、女ようお出でで、又お近ちかいうちにえ、彌糞くそをくらへ、ハ、、、

又しても祇園ぎゑんの茶屋ちやにでんがくの味噌みそをつけたる身みこそくやしき

それより境内きんじを出でで、もとの四條通りよじょうどおりを行いくに、日もはや七ツ下さりとなれば、急いそぎ三條さんじょうに宿しゆくをもとめ、足休あしやすめんと辿たどり行くさきに立ちて、近在きんざいの女商人おんなあきんど、何れも頭あたまに柴薪しばたきぎ或は梯子はしご、連木れんぎ、榎えんなどを頂いただききて四五人打連うちれんれ立ち「梯子はしご買かはしやんせんかいにやア、連木れんぎいらんかいにやア、此コウ見みねえ、ござえな物ものを頭あたまへのつけて行くは、彌アノまた尻しりを振ふるさまはい、ハ、、、女商人あきんど「薪買たきぎかはしやんせんかいにやアト、行きく河原かはらに出ると、かの女おんなどもおのゝこに、彌ハ、アさすがは都みやこぢや、どいつも小綺麗こぎれいな面

野曉

下河原
あま
きり
きり



つきだ、ちとひやかしてやらうか 北「またおめえ、へこまされようと思つて 彌「馬鹿ア云ふな、手めえぢやアあるめえしト、煙管を出し女商人のそばへ寄り 御無心ながら火を一つ、パツバ／＼、時におめえ方ア、とんだおもてえ物をよくあたまへきけ(置)てあるきなさるの 女「さよぢやわいな 北「ナニ、此位えな物を、おいらなんざア廿貫目や三十貫目ある石をあたままで振り廻したものだ 女「おまいさんは饅飴屋の粉ひきぢやあるわいな 彌「エ、手めえだまつてゐろえ 女「おまいさん方ア、どうぞ此連木買うておくれんかいな 彌「ナニすりこ木か、ア、買ひてえが、コレヤア細い、わつちらが所ぢやア、なんでも材木の様な、そして四角な連木でなくちやア間に合はねえ 女「オホ、、、、四角にした連木でおむし(味噌)す(磨)らんすなら、大方摺鉢も四角ぢやあるわいな 彌「さうとも／＼、おいらが所ぢや穴藏で味噌をする 女「オホ、、、、きようとい、きさくなお方ぢやわいな、アノ連木おいやなら梯子買うておくれんかいな 彌「ハ、梯子面白え、いくらだ 女「今日も何もよう賣らんさかい、安してあげよわいな、六匁下んせ 彌「二百ばかりなら引受けようさ 女「アノぢやら／＼いうてぢやことわいな、もちと買うて下んせ 彌「いやだ／＼ 女「おまいさん、こないにあちようしてあるわいな、モシ五匁にあぎよわいな 彌「いや／＼ 女「よいわいな、是持ていんだら、ひか(呵)られよう、二百にまけてあぎよわいな 彌「ヤアまけるか、情ないことをいふ 女「きようとう安いもんぢやわいな 彌「いくら安くつても

梯子を買つてどうするもんだ、内もねえ癖に 女「よいわいな、サアもて去なんせ 彌「こいつはあやまゐる、ありやうはおいらは旅の者で、今宵は三條に泊らうといふのだから、梯子を買つても仕方がねえ 女「何言はんすぞいな、入らん物をつけさんす事は無いわいな 彌「ソリヤもう直をつけたが不肖だから、いらねえ物でも袂か懐へ這入る物なら、買つてもやらうが、何を云つても此梯子だから、恐れる恐れる 女「そぢやて、わたしらを黽らんしたのかいな、こちや商賣ぢやわいな、そないなこといやぢや、もて往なんせト、女ども四五人口々にやかましくしゃべりたちて、彌次郎を中にとり巻き責めたつる。すべて此女商人は皆至つて逃げられるせず、大きに困り果て、さま／＼に言譯し、又はりこみいつて見ても一向き入れず。相手は皆女のことなり、喧嘩にも、彌「こいつは逃がられるせず、せんかたなく錢二百文出してやり、たうとう梯子を買ひとり、人の見る前、捨てられるせず、見物はどつて笑ひて散る。 北「エ、とんだことをいふ、おめえ持ちないくぢもねえ目にあつた、北八、そこらまでかついでくれ 北「エ、とんだことをいふ、おめえ持ちなせえな 彌「又一番へこんだ、ごふはらな、
いかにせん梯子の親とこのやうな厄介ものをひきうけし身は
かくて四條通りを寺町へさがりて行くみち／＼も、梯子の持ち重りして、つぶやきながら 彌「ナントきた八、手めえ附合を知らぬものだ、ちつとばかり持てくれるえ 北「いかさまおめえ心がらとは云ひながら氣の毒なこつた、さぞ重たかる、かうしなせえ、アノ女どものやうにあたまへきけ(乗)て持つて見なせえ 彌「成程／＼ト、手拭を兼み、あたまへ載せその上へ梯子を載せ、両手に持ち添へ行く、往來の人 「コリヤなんぢやいな、浮雲うてな

らんわいな 彌「ハイ〜向うがさつぱり見えねえで、歩かれぬ わらわいの人」コリヤじやうもんが行くさ
 うぢや、おひや（水）持て出やしやんせんかいなるさうなといふことなり わらわいの人」どこにじやうもん
 がいくぞいな「アレあこへ梯子もていくわいな、あほよ〜」彌「何ぬかしやアがる わらわい」ふぬけな
 わるぢや、ハ、ハ、ハ、彌「イヤこの籠さくめらト、梯子をあたまへ載せたなりに、ぐつと振返れば、かわらわい」アイタ、
 タ、何ぢやい、どめつさうな、此人中で長い物横たはしにしくさつて、えらいあんだら（馬鹿）ぢ
 やの、のうてん（天窓）どやいてこませやい 彌「ナニたはことぬかしやアがる わらわい」わしが額の瘰
 癧が無うなつた、そこらにやないか、見て下んせ 彌「エ、おいらが知るものか、馬鹿な面な わらわい」え
 らい 願なわるぢや、た〜んでこませやいと、いづれもきかぬ氣の者共と見えて、大勢ど 「コレヤアこつちが悪か
 つた、どなたも御了簡下さりませ、サア〜彌次さん、あゆび（歩行）なせえ 彌「いぬえましい奴等
 だ、北八どうも一人では持たれぬ、あとの方へ肩を入れてくれぬか 北「ドレ〜、コレヤアおれまで
 をとんだ目にあはせる。」

是もまた咄しの種よ遙々と京へ上りし梯子一脚

彌「エ、歌どころぢやアねえ、どうぞうつちやつてしまひてえものだがト、今は二百の錢も借しからず、厄介
 来少き横町へはひり、そつとすておき、逃げんとすれば、折悪しく人に見付られて咎められ、せんかたなくか
 つきあるき、又いづ方へぞ捨てん〜と思ふうち、うかく〜と三條通りに来りければ、宿引と見えたる男 「モシナおまい様方お泊り

かいな 彌「泊り〜」ヤド「こちのうち方へお出でんかいな 北「おめえ何處だ ヤド「ツイあこぢやわい
 な、サア〜お出でんかいなく〜ト、うち連れて大橋の方へ行く。」

東海道中 膝栗毛七編 卷之下

既に其日もはや西に落ちて、家毎に灯火を照し、門鎖す頃、三條小橋を打ち渡りて、かの旅籠屋の方に着きたるに、ヤド引「サア、お泊り様ぢやわいな、ヤドヤのていしゆコレハお早うお着きでござりますわいな、彌アイお世話になりやす、ていしゆ「お荷物は、此此梯子一丁、ていしゆコレハ氣疎いお荷物ぢやわいな、コレ、おたこや、奥へ御案内申さんかい、女「ハイ、お出でなされませト、奥へ案内するに亭主來りて「今晚は、お客様が、いこお少うござりますさかい、お湯は焚きませぬ、ツイあこの小橋下る所にきようとう綺麗な湯がござります、これへなとお出でなされ、此「おいらアい、から、彌次さんお前いくなら、いつて來なせえ、京の水で洗ふと、ごうせえに色が白くなるといふことだぜ、彌この上、白くなつちやア詰らねえから、よしやせう、ていしゆ「ときあなた方は、近在から御出でかいな、此「イヤわつちらア江戸でござりやす、ていしゆ「かいな、私は又梯子をお持ちなされたさかい、コリヤ近在のお方でお宿へ買うてお歸りなされるのかと存じましたが、として江戸のお方が梯子を何なされますぞいな、此「イヤ是には譯がありやす、アリヤ江戸からことづかつて來やしたのさ、ていしゆ「ソリヤなんとして、あないなものを、此「聞きなせえ、わつちらが心易い者だが、生れは此京の人で、今江戸に



世帯を持つてゐやす、所へ京の親元の方から遙々とアノ梯子を擔がせてよこしやした、その譯はかの親御が無筆といふことで、人に手紙を書いて貰ふも面目ねえと云ふ事からして、アノ梯子ばかりよこした心は、のぼつて来いといふ心意氣でござりやせう、そこで又その息子が返事をよこしてえが、同じくこれも無筆で、いろはのいの字も書けねえ癖に、とんだ負け惜み、わつちらが今度御當地へ來ると云つたら、幸のことだから、ことづけてえものがあるといふによつて、随分何でも届けてやらうと云ひやしたら、聞きなせえ、きたねえ乞食坊主一人と、アノ梯子をよこして、是を親父の方へ届けてくれろといひやす、そこでわつちが、コレヤア梯子はいゝが、坊様は生きてゐる人だから持つて行くに難儀だと云ひやすと、其の男の云ふには、そんなら梯子ばかり持つて行つて京へ着いたなら、どうぞ坊様を一人頼んで、その坊様に撞木ばかり持たせて、梯子と一所におやぢの所へやつて下せえと云ひやすから、ソレヤアなせさうするのだときゝやすと、イヤ京の親元からのぼつて来いと云つてよこしたから、その返事だと頼まれてもつて來やしたのさ、ていしゆ「ハ、、、梯子をやつてのぼれといふは聞えてぢやが、そのお返事に梯子と又ぼんさまに撞木計り持たしてやるとはどうぢやいな、北ソリヤのぼりたいが、かねが無いと云ふ心、ていしゆ「ハ、、、、でけましたわいな、併し遙々の御道中梯子の事なりや、柳行李へもよう這入るまいに、嘸御難儀にあつたぢやある、北イヤなかゝさうでもこ

ざりやせぬ、道中するには梯子を持つて歩くが、とんだ調法なものさ、馬などに乗るに梯子をかけて乗ると、途方もねえ乗りよくて、そして川々を越すに得なことがありやす、大井川でも、安倍川でも、臺越といふをすると、川越しの賃錢が四人前に、かの臺の賃が一人前出やす、所を梯子持参といふものだから、川越しの賃錢ばかりで、臺の賃がかすりになりやす、おめえ方も是から若しも道中しなざることがあるなら、必ず梯子は持ちなざるがいゝ、コリヤ人の氣の付かねえ調法な物でござりやす、ていしゆ「イヤ誰も道中するとして、ナニ梯子持て行こといふ氣が付くものかいな、ハ、、、、ときに只今おつしやつた坊さまは、こゝでお雇ひなさるのかいな、北さうさ、是非雇はにやア成りやせぬ、ていしゆ「さよなら幸のこつちやわいな、私方に世話致しておきをりますよ、い坊がござりますわいな、是をお連れなされませ、只今お引合せ申しましょかいト、立ちあがらんとする、き「モシ、待つてくんなせえ、今急には入りやせぬ、厄介物の梯子を引受けて困るさへあるに、又生きた坊様をとりこんで、どうするものだ、ノウ彌次さん、北イヤ、ソリヤ手めえの掛りだから、おいらは知らぬが、何しろ其坊様を早く頼むがよささうなものだ、北エ、おめえまでがとんだことをいふ、ていしゆ「ハテ今貴方の云うてぢや通りなら、是非ともお頼みなさるのぢやないかいな、北それはさうだけれど、ていしゆ「なんぢやあると、私へお任しなされ、北そんなことより、おらア早く飯が食ひてえ、ていしゆ「御膳も今あ

も慰み、ちよぼ(淨るり)語らして、やらしましよかいな ぐわんてつ「ヒヤリましよともく、わしふめ
 (梅)が枝をヒヤるさかい、どなたぞへんた(源太)をやて下んせ 彌「コリヤ面白い、鼻くたの梅が
 枝に、北八、源太は手めえが相應だ 北「エ、馬鹿ア云ひなせえ、わるいしやれたト、まじめになり、小言い
 つてあるうち、亭主が
 指置に十三四の娘三味線をかへて来ると、うちの女房下女めしたき迄次の 「コレ北八、アノ通りかみさまや女中たちが見物
 間にかたまり、丸哲坊をそのかしながら見物する、彌次郎をかしく
 してぢやが、一番おちをとる氣はねえかどうだト、袖をひかれて、北八少
 し浮かれが来て「いかさま見物が多いと、張合が
 ある、まよ源太におれがならう、その代り言草は出鱈目にやるがいゝか ぐわんてつ「ヒヨござります
 ヒヨござります、サアおとらさん、へん太の出端からやて下んせ 彌「ハ、、、、髭むしやくしやの
 梅が枝もいゝが、源太が轍を染返した着物きてゐるも珍しい 北「コレく、東西くト、此うち娘孫瑠璃
 を語り出す
 「夜毎くに通ひ来る梶原源太景季、千歳が奥を伺へば、ちやうどよい首尾 幸と、すつと通れば梅
 が枝は、炬燵にとんと身をそむけ、そらさぬ顔でふく煙管 北「コレ何が機嫌に入らぬやら、めつきり
 ともたせ振り、われらがやうな浪人の微た衿にはつかれまい じやうるり「すんど立つを、待たしやんせ
ぐわんてつ「座ひき(敷)ばかりをふとめる(勤)ひやす(筈)で、今日此處へほら(貫)はれたは、
 文でひら(知)せて合點ぢやないか じやうるり「憎い男と目に脆き涙は戀のならばせなり 北「ア、コリ
 ヤ寄るなく、臭くてならねえ、そつちへぐつと寄つたく、ごうせえに臭い梅が枝だぞぐわんてつ「ひ

よりや、聞えませぬ、へんたさん 北「エ、寄るなといふに、コリヤ手短にやつてくれう、コリヤ坊主
 イヤ梅が枝、産衣の鑑はどうした ぐわんてつ「ひちなん即滅と三百目に曲げたわいの 北「ナニ打ち殺し
 た、ソリヤなぜに ぐわんてつ「そもやわたしがよこね(便毒)からほねう(骨疼)になつて山歸來服む
 ほどにく、氣種はしくく、此ひやな(鼻)をたすけたいばかりに、ひやね(金)ならたつた三百
 目で、低いひやなを落すか、ア、ひやなが惜しいなア 三下りうた「二八十六でふみ付けられて、二九の
 十八でつい其心、四五の廿なら、一期に一度、わしや帯解かぬ ぐわんてつ「エ、なんぢやの、人の心も
 ひらずに、ふたひくつさる、ほんにひよれよ 彌「イヤ待つたくト、これも堪へられず勝手に行き以前の梯子、店
 の間に横倒しにしてありしを掲げ来り、鴨居に
うちかけ、二階の氣取にて彌次郎中段に上りながら、
 手拭を焼んで、大盡風になちよいとあたみに載せて「サアく、源太が母の安壽の役だ、サア和尚、やらかしねえ
ぐわんてつ「傳へ聞くふけん(無間)のひやね(鐘)をつけば、有徳自在心のま、ほれ(是)よりは
 はよ(小夜)の中山へ、遙の道は隔たれど、ほもひ(思)詰めたるあが(我)念力、此ひようづばち(手
 水鉢)をひやね(鐘)となぞらへ、ひし(石)にもせよ、ひやね(金)にもせよ、志すところはふ
煙管おつ取り色々ある、此時彌次郎梯子の上よりうちがへ
 の鏡をばらくと投出したが、自身に深瑠璃語る「そのかねこゝにと三百文、うちがへの錢
 けんひやねト、
 投出す、みやま嵐に山吹の、花吹き散らすやうにはあらで ぐわんてつ「こゝに三文、かしこに五文、拾ひ
 はつめてひやん百銅、コリヤ雇はれの賃錢、さき取りとは有難ト、かき寄せて袂に入れんとするを、彌次郎
 兵衛梯子の上から丸哲をとらへ「ソ



やアい、彌エ、なさけない、コリヤたまらぬ〜ト、居たり騒ぎたつと、ていしゆ「コレこなさん、どつちやへも遣ることならんぞ、彌ハイ〜何處へも行きは致しませぬ、コリヤ〜北八ぜんでえ手めえが悪い、何の有體に云へばいゝものを、ちやらくら嘘をついたから起つて、無間の鐘だのなんのと、ろくでもねえことを始めたから、此の騒ぎになつた、もとは手めえが發頭人だから、下手人はそつちへ譲るぞ、北オヤとんだことをいふ、當人はおめえだわな、彌そんなら拳をして負けた方が下手人だ、北馬鹿アいひなせえ、おいらア知らぬ〜ト、此うち醫者も來り、藥など與へ、きまん介抱するうち、煩やう〜息吹きかへせば、を頭み、だん〜証がごとし、あやまり證文をかきて、やう〜と此いさくさをさまりける。もつとも北八が判にて、しかつべらしく書きたるその證文、

一札之事

一我等此度ひらがな盛衰記淨瑠璃之内、安壽の役相勤め候所實正也、然る所梅が枝無間之鐘相撞き候節、其金是に罷有る趣申之、打替之鳥目投げ出し候逆梯子爲之候故、丸哲どの陰囊御釣上げ被成、并に貴殿息女へ怪我爲致候段、全く右梯子鴨居へ打掛け候より事起り候趣、預御腹立、無申譯、段々誤入り候所、御了簡被下、忝く存候、然る上は、以來御宿御無心申候共、梯子抔決而持參致す間敷候、爲後日仍而如件

月 日

當人 彌次郎兵衛

證人 北 八

此證文にて事をさまり、宿屋の娘も次第に快く、中直りの酒酌み交して、夜も更ければ、二人はやがて打ち臥したるに、程なく夜明けて、家内の人々起き立ちたる物音に目を覺し、支度調へ、そこ〜に立ち出づるとて彌「コレハ大きにお世話になりやした、殊に色々なことでお氣の毒な〜いしゆ」御機嫌ようお出でなされ、女は「モシ〜お梯子がござりますわいな、彌イヤもうそれはこちらに置いてくんなせえ、今日は所々見物して晩程又お世話になりやせうから、〜いしゆ」イヤ〜お持ちなされ、そしてこちや晩程はおさし合があるわいなト、一體亭主は此二人を胡亂に思ひ居たりし故、梯子も預ること氣味悪く、いかなる後難やあらんと、うけつけざれば、せん方なく、又かの梯子をかつき、この所をたちいで、北「ナント今日はどつちの方へまごつくだ、彌イヤまだ東に見物してえ所があるが、マア今日は北野の天神様へいきやせうト、堀川通りに出で、北「ときに思ひ出したことがある、ソレ伊勢の古市で京の人と一座したが、慥にその人は千本通中立賣とやらいつたが、北野の天神様へ行く道だと言つたぢやアねえか、彌「オ、サ邊栗屋の與太九郎か、北「ソレ〜、そいつが所へ尋ねていつて酒でも呑んでやらうぢやアねえか、彌「ナニあたじけなすびが飲ませるものか、北「ところをおいらが術に懸けて飲倒さうト、往來の人に千本通りを尋ね、中立賣に至り、邊栗屋與太九郎の彌「御免なせえト、格子戸をあけてはひ「誰ぢやいな、コリヤ珍しい、ようお上りぢやわいな、彌「扱マア伊勢では大きにお世話になりやした、與太「なんのいな、

サアこち這入りんかいな 北「ハイお久しうござりやす 興太「イヤこれは、まだ表にお連れ様があるさうぢや 北「二人ばかり、誰もをりやせん 興太「それでもアリヤなんぢやいな 興「梯子のことかえ 興太「何ぢや梯子おもたせかいな、コリヤきよとい 北「イヤおめえの所は中立賣ひよいとあがる所だといひなすつたから、もしも高い所なら梯子かけて登らうと思つて、わざ／＼求めて持参いたしました 興太「ハ、、、コリヤお出来ぢやわいな、時に何もお愛相がない、お支度はどうぢやいな 興「ア今朝宿星でたべたま、中食はまだ致しやせん 興太「ソリヤお樂みぢやわいな、さゝ(酒)などあげたいが、此邊に酒屋はなし 北「酒屋は直にお隣りにあるぢやアねえかえ 興太「イヤあこでは小賣は致しませんわいな、折角のお出で、お煙草でもあがりなされ 北「煙草はこつちのだから勝手に致しやせう 興太「おまい方せめて、もちつとさきへよつてお出でなされると、きょうとい物があるわいな、桂川の若鮎生きてをるのを、鹽焼か魚田にすると、ねからはから甘いなんのといふやうなこつちやなわいな、イヤまだ四條の生洲が近いとお供して行こもの、あこの鰻は加茂川でさらして、とつと違うたものぢや、きょうとう甘いかな、そしてあこは玉子焼をえらうようして食はすわいな、何ぢやあると、是程に大きう切りをつて、ぼつぼといきの出るのを、南京の薄鉢に盛つて出しをるが、甘いというては、ねからく、んで持つやうぢやわいな、ホンニそれよりまた秋にお出でなされると、とり／＼

の松茸ぢや、當所の名物で、これがまた外にはないわいな、新しいのを、すましの吸物にして、ちよつと山葵落して酒の肴にいたそなら、とつともう、なんぼ食うても、ねから飽きがないわいなト、咄しはて何も出さぬ故、北八こらへかね、そつとぬけ出て、隣の酒屋へ飲みに行くと、咄に身を入れて、興太九郎は一向北八の逃げたるを知らず 興「イヤも一人のお方は何處へ行かんしたぞいな 興「もう歸りやした 興太「はてさて、ねから知らなんだわいな、いつの間になんであつたぞいな 興「今、松茸のお吸物の出た時、中座致しやした 興太「ソリヤ残り多い、後段にまだお菓子の咄し致すもの 興「イヤもう、さき程から大きにお馳走になりやせぬ、お蔭で空腹じい、お暇致しやせう 興太「イヤお待ちなされ、よい所へお出でたわいな、ちとお咄しがあるわいな、アノ伊勢の古市でおつき合ひ申した時のこといな、あの時の入用、金壹兩ぢやあつたがな、わしや算用ぢがひして、金壹分貳朱こちから出して置いたさかい、コレ見なされ、道中の小遣帳におやま屋のつけ(書付)も、何もかも、こないに細かに書きつけて置いたが、うちへ戻つて算用して見ると、おまい方一人前百廿四文ヅ、わしの方へお貰ひ申さねば、算用が合はんわいな、僅のこつちやさかい、どうしてもだんないが、取るに如くはないさかい、お二人分貳百四十八文お貰ひ甲しましよかいな 興「エ、おめえも、今となつてきたねえことをいふ、そればかりのこと、うつちやつて置きなせえ、こつちでも立替へた事がありやす 興太「ソリヤあげるのがあらば上げるさかい、言ひなされ、算用は算用ぢや、マアこちへ取るのが此通りぢや

非匠へ
読来て
之の毛
春秋亭
仲佳



七
毛
栗
毛



感和亭
向山武
老引
大
之

て靈祠を作り、天徳三年右大臣師輔卿、巍々たる大厦をあらため營みたまふ、今の北野宮これなり。社頭に渡邊の綱が納めしと言ひ傳ふ石燈籠苔むしてあり。

綱の名はいまだに朽ちぬ石燈籠昔を今に三ツぼしの紋
東向觀音は梅櫻の二樹をもつて菅神御手づから刻ませ給ふ所なりといへり。

御利益は四方にかをれる觀世音梅櫻にてつくりたまへば
それより社内を抜けて平野の社に參る。此御神は四座にて、今木神、久度神、古閑神、比咩神なり。

こゝろよく飯くふために本膳の平野の神を祈りこそせめ
こゝに紙屋川のほとりに二軒茶屋あり。二人は空腹となりたるに、支度せんと此の茶屋に這入れば、

女共出迎ひて、女ようお出でたわいな、ツイト奥へお出でなされ、
食ひたし、酒も飲みたし、マアちよびとした物で一盃早く頼みやすぞト、
彌早速これはありがてえ、女中一つ注ぎ給へ、オットありやすく、
女お看あぎよわいな、コリ

ヤわたしが心のたけちやぞえ、彌ハア此鮎がおめえの心意氣とはどうだ、
が川鮎といふこつちやわいな、彌コリヤ有がてえ、
の肴上げやせう、女オホ、、、此生姜がなんとしておまいさんの心ちやえ、
彌わしやはちかみイ

こゝろよく飯くふために本膳の平野の神を祈りこそせめ
こゝに紙屋川のほとりに二軒茶屋あり。二人は空腹となりたるに、支度せんと此の茶屋に這入れば、



「ハ、ハ、ハ、こぢつけるもんだ、ときに女中、田樂で飯を早くくんせえ、女「ハイ、只今ト、家が田樂と飯を持ち来た。二人は食事しながら見れば、衝立のあなたに、さもおまじろしき出」ナント役戒坊、きさま髪はどこで結家二人、麻の法衣の汚れたるを着て、是も田樂にて飯食ひながら、一人の俵のいふを聞けば」

ふぞいの、やく「オ、持戒坊、わりさまもわしが結ふ所で結はんせ、あこはきようとう善う結ふわいの、わしや久しうのんこ髷に結うてぢやあつたが、今は流行らんさかい、コレ見やんせ、雷子にいうて、貫うたが、えらう氣持がようてたまらんわいなト、いひつ、淺黄の頭巾を取れば、此坊様身には麻の法衣着ながら、あたまは巻髪にて、芝居のやつしといふ髪なり、彌次郎兵衛北八これ

を見て腹をつぶし可笑しき半分、やくかい「ハ、ア、なる程よう結ひくさつた、わしや又こちの弟子坊に結はせを不思議さうにうかひ見れば、

るが、もう、月代がむちやぢやさかい、見て下んせ、いつの間にやら、こないに剃りこかしをつたわいなト、これも頭巾を取れば、髷はほんのくぼにある、剃り下げ」モシお隣りのお客様、わつちらは遠國の者でござり奴なり、彌次郎御りに合點ゆかず、こたへかねて

やすが、所々歩いてゐるうち色々様々な珍らしいことも見聞きしやしたけれど、御出家方の髪結うたを見るは、まことに今が初め、どうも合點がゆきやせぬ、卒爾ながらおまい方は何處のお方でござりやすね、やつかいばう「ハ、アこのあたまの御不審かいな、こちや空世堂の僧ぢやわいな、彌「なる程な、咄に聞いてゐやした、かの茶筌賣るお方だな、やつかい」さよぢやわいな、こちの宗體は昔から由緒があつて、こないに身には染衣を着しながら、天窓は大俗凡夫ぢやわいな、彌「それで聞えやしたが、なぜ又おまい方のゐなさる所を空世堂といひやすね、やつかい」さればいな、こちの宗體では、どしたこつちや

やら、代々皆えらい大食で、飯ぢやあるが何ぢやあるが、何ぼでもよう食ふさかい、齋非時に呼ばれて行ても、強ひつけられて、もつとくふやどうぢやいなと、人毎にいうたを、すぐに空世堂といふわいな、もつかい「そぢやさかい、コレ見やんせ、ちよと此處へ來ても二人でお鉢三杯食うたわいな、彌「ソリヤ途方もねえ大ぐらひだ、尤もわつちらも食つたものさ、何日やらも信濃へ行きやした、ナニガあつちが飯どころでござりやすから、先朝すつとおきると、茶うけにとて座頭あたまの天窓程ある握り飯を出しやすが、あつちの手やひは子供でさへそれを十四五程づゝも食ひやす、わつちは折わるく氣分が悪くて、ろくに食もいけやせなんだが、十七八計りも食ひやしたらう、さうすると頓やがて飯が出来たとつて、其處の亭主の云ふには、江戸のお客はお鹽梅あんばいが悪いといふことだから、今朝は麥飯むぎめしをたきましたとつて、何が薯蕷汁とろろ汁を吸つた程に吸つた程に、摺鉢すりばちの二十計りも其處そこに並べてあると思ひなせえ、さうすると、椀わんへ盛るが面倒だと、家内の奴等は皆其摺鉢一ツづゝ引うけて、麥飯をその中へ山のやうに盛つてくらひをる、わつちも絶食ぜつじく同然どうぜんでゐたが、麥は好物で堪こらへられやせんから、せめて一摺鉢もやつて見よう、食ひかゝつた所が、口あたりがいゝから、するゝと、なんのことなしに迂すべりこんで、たうとう摺鉢すりばちに五六杯ばいも食ひやしたらうが、今ではとんと食しよくが減りやした、やつかい「ソリヤおまいも飯は素人ぢやないはいの、ナント飯盛めしもりさんせんかいな、彌「アノ飯盛めしもりが此處ここにもありやすかね、やつかい「ハ、ハ、

ハ、おまいの云うてぢやは道中の飯盛ぢやある、そぢやないわいな、こちとらが仲間なまでするは酒飲さけのむ衆しゆが酒さかもりといふ格かくで、飯を互あひに食たひあふを飯盛めしもりといふわいな、ちとやて見みやんせ、幸さいこちもまだ飯めしが食くひ足たらんさかい、相手あひてほしさの玉手箱たまてばこぢやわいな、此こどうやら面白おもしろさうなこつたが、それはどうするのでござりやすね、やつから「マアなんぢやあると、やて見みなされ、モシ女中にようぢゆうちよと来てくだんせ、お鉢はちのおかはりぢや、女にようぢゆう「ハイ〜ト、飯鉢めしに一杯持ちて来こると、やつから「サア始めはじめんかい、イヤ亭主ていしゆ役にやくわしからやるわいなト、茶づけ茶碗ちawanに飯めしを盛りまりてさ、やつから「サア〜お前まへさそかいなト、彌次郎彌次郎やじらうへかの茶碗ちawanをつ、きつつけて杓子しやくしを取りとり、「酒盛めしもりならお酌しやくといふ所ところ、飯盛めしもりぢやさかい、お杓子しやくし致いたしましよかいなト、彌次郎彌次郎やじらうが持もちたる茶碗ちawan、彌次郎彌次郎やじらう「コリヤわつちが食くふのかね、やつから「左様さやまぢや〜、彌次郎彌次郎やじらうハ、アきこえやした、盃さきをまはす心こころだねト、次郎次郎じらうか一杯一杯の飯めしを食くひしまひて、やつから「コリヤきようとい、おさへましよかい、彌次郎彌次郎やじらうイヤまづ〜、もつから「はて、お前まへ最さい一杯一杯重かさねなされ、わしすけてあぎよわいなト、無理無理無理に又また一一盃盃盛盛、彌次郎彌次郎やじらうそんなら、おめえすけてくんせえト、飯飯めしの盛盛つてある、かかに渡わたせば、もつから「これも酒さけぢやと、つけざしぢやけれど、飯めしぢやさかい、食くひさしぢや、彌次郎彌次郎やじらう「エ、お前まへのその搦ひぢむしやくしやと、不掃ぶさう除じゆな口くちゆう中で食くひさしはあやまるの、しかもソレ〜水みづ漬づけを垂たらしてさ、もつから「ナニ云いうてぢやぞいな、そないな事こというて、飯盛めしもり附つき合あひがなるかいな、早はやう食くはんして誰たれになと、さ〜んしたがよいわいの、彌次郎彌次郎やじらうソリヤ情なさけない、さて〜飯盛めしもりといふものはきたねえものだ、もう

もうわつちごめんは御免ごめんなせえ、やつから「イヤおまい麦飯むぎいね摺鉢すりばちに四五杯食くはんしたというてぢやないかいな、卑怯ひげんなこといはんす、斯しうさんせ、一けん拳けんいかんせ、彌次郎彌次郎やじらうそんなら拳けんでまわらうか、もつから「よかるわいの、その代かり否いや應おうとんと云いはさんぞやト、かか茶碗ちawanの上うへへ、もつから「サア〜薩摩さつま拳けんぢや、サンナ、彌次郎彌次郎やじらうムメデムメで、もつから「トウライ、えらいか〜、サア〜あがりなされ、其その辭ことばお鉢はちのおかはりぢやト、無理無理無理無禮ぶれい無禮ぶれいられ、彌次郎彌次郎やじらう面めん倒たうなりと我われ慢まんを起おこし、やつからいばう「も一つやらんせ、お鉢はちのかはり目めぢや、彌次郎彌次郎やじらうイヤもう〜御免ごめん〜、やつから「コリヤやくたいぢや、おまいは田舎者いなかものぢやな、麥むぎや挽割ひきわりの混まぜたのをあがりつけておさんすさかい、こないな一本生ほんせいの米こめばかりの飯めしは、ようあがらんもんぢやあるぞいな、彌次郎彌次郎やじらう「ナニわつちらア猪いのししの牙きばの様さまな飯めしでなくちやア食くひやせん、やつから「さいな、これが猪いのししの牙きばぢやわいの、彌次郎彌次郎やじらう「そんなら、おめえかはり目めのあひを頼たのみやす、やつから「ソリヤよいわい、とてもこのことことに大おほきなもんで、おつもりにしよぢやないかいなト、茶漬茶漬ちぢの入れいれありし井いをうちあけて飯めしを盛りまり、べろ〜食くつてしま、「サア「サアあぎよわいの、イヤ飯めしでにちや〜するト、縁先縁先えんせんの手水鉢てすいばちへ井い「サア澄すましたわいの、おつもりぢや〜、彌次郎彌次郎やじらうイヤ〜もういかぬ、そしてきたねえ、人が雪隠せつおんへいつた手を洗せんつた手水鉢てすいばちですました井い、それでどうして食くへるものか、やつから「そしたら此茶碗ちawanで、彌次郎彌次郎やじ郎イヤもう腹はらが裂さけるやうだ、それに聞きなせえ、今の一杯一杯やらかしてゐた時とき、何か懐ふところのうちでぶつ〜りといふ音おとがしたから、搜さがつて見たら越中えちゆう禪ぜんの紐ひもが切きれる位くらいに腹はらが

洛陽
凡仲

三父子

先お

う

侍の

の



晴月
田中
の
お
の
り
の

芥子

張り切つて来たものを、もう〜お許し〜、やつかい「ハ、ハ、ハ、もうよしなされ、おつもりぢや、コレ女中なんぼぢや、勘定してくだんせ、やつかい「ハイ〜、御いつ所に致しましよかいな、やつかい「そぢやわいな、女御酒とおでんの代もつは十文でよござりますが、おめしは五百七十二錢頂きたうござります、やつかい「ソリヤ氣疎い安いもんぢや、割合に致そかいなト、此代錢勘定して半分の拂ひすれば彌「ソリヤあんまりだ、おめえ方が、しこたまあがつて、わつちはたつた一膳か二膳食つたもの、二つ割りとは不承知だね、もつかい「何言はんすぞいな、一座で飯盛さんしたもの、よう食はんはお前方の勝手ぢやないかいなト、やつつかへしつ、これも理詰めに、彌次郎せんかたなく、たうとう二ツ廻りにし北「ハ、ハ、ハ、いゝ見せものだ、サア彌次さんてこの所の拂ひをなしければ、僧二人は早くもさきにたちて出で行きたるに、どうだ、いかねえか彌「オ、サいきてえが、あんまり食ひ過ぎて動かれねえ、どうぞ手を引いてそろそろ立たせてくれ、北「エ、意氣地のねえ、サア立ちなせえ、彌「コレサ手荒くしてくれな、飯が口から出るやうだ、北「テモ、きたねえことをいふ、サア〜立ちな〜ト、いひつ、彌次郎の手を取り引き立つれ女「おゆるりとお出でなされ、北「アイお世話になりやした、サア〜彌次さん、いかねえか、どうする〜、はじめから人を茶にして何杯もやたらにめしを空世寺の僧、是よりまた天神の社内にかへりたるが、東の門より一條通りに入る道を知らず、うか〜ともと來し南向の門を出たるに、思はずもかの梯子を預けし茶屋の門近くなれば、彌次郎兵衛心づきて「待て

待て、さつての梯子が、やつぱりあそこにたてかけてある、エ、こつちの方へ來なんだからよかつたものを、北八また後へ戻らうか、北「成程あそこへ休まずに直ぐ通りにしたら、ひよつと見付けた時、例の梯子持つていけといふだらうし、と云つて又後へ戻るも業腹だ、どうぞいゝ智恵がありさうなものだト、立ちどまりて思案してゐるうち、右近の馬場北「イヤアいゝことがあるぞ〜、アノ馬の横ッ腹の方に〜、の借馬一疋博勢がひいて來るを見るより北「イヤアいゝ〜、アノ馬の横ッ腹の方に〜いて、茶屋の前を通れば、馬の陰になつてゐるから、よもや見つけはしめえぢやアねえか、彌「オ、サそれがいゝ、コリヤ大出來だ〜ト、あとより來る借馬を見合せゐるうち、やがて傍近くなれば、二人ともならんで馬の陰に隠れ行くと、丁度かの梯子を預けし茶屋の前に至りて馬は立ち留まりて動かす。二人は駈け抜けて茶屋に見つけられてはせんなと思ひ、同じく馬の横腹の方へついて、立どまりゐる。博勢馬を打ちて、打てども動かす、頓て馬は小便をしヤア〜彌「エ、コリヤ又情無い目に逢ふことだ、北「ア、臭い〜、ソレ彌次郎北八にとはしりはねて小便だらけとなり、彌「エ、コリヤ又情無い目に逢ふことだ、北「ア、臭い〜、ソレ彌次さん、おめえの方へ流れるは、彌「畜生めが、とんだ目に逢はせる、これは〜ト、飛び退けば、むかうの目早く見つ「モシナ〜、こつちやでござりますわいな、サアお這入りなされ、北「ソリヤこそ見つけられた、彌「コリヤたまらぬ〜ト、一目散に駈け出せば、茶屋の亭主とんで出で「コレナ、梯子がござりますわいな、オ、イ〜ト、呼び立つれど耳にも入れず、二人はやう〜と息をはかりに駈け出して、下の森を打過ぎ、もとの千本人は眞黒になり逃げる。二人はやう〜と息をはかりに駈け出して、下の森を打過ぎ、もとの千本通りに出で、今宵は島原の廓中を見物して、安見世もあらば、一宿せばやと申合せて、往來の人に道すがらを尋ね、千本さがりて行く程に、町をはなれて東寺に至る。

手折らんと手を出す人ぞ鬼ならめ東寺わたりの花の盛りに
それより壬生寺に参りて、こゝに葭簀門先きに建てよせたる怪しの茶見世に引こまれて、其夜の宿
と定め、打ち臥したるが、あくる日、島原を見物し、朱雀野より丹波街道を横ぎりに淀の大橋に至り
爰より下り舟に打乗りて大阪へと赴きける。

東海
道中
膝栗毛八編序

凡而事の十分なるは、缺くるの兆、九分なるは充つるの首なれば、八の數
を以て、永久の嘉瑞とし、物のめでたき極位とする事は、先づ大江都の八百
八町、長にして盡きず、神に八百萬神、永く跡を垂れ給ひ、法華經の八部、
末世に傳へて弘く、歌書には八代集を最上とし、易に八卦、十露盤に八算、
食言にも八百の相場あれば、質も八ヶ月を限とす。予が膝栗毛も此八編に至
つて足を洗ひ、引込思案の筆をおくこと、花の半開、酒の微醉に託けたれど、
實の所は逃げ口上、知惠倍揚底なれば、はたき仕舞ひし栗毛の趣向、據な